
『Not Nonfiction』

人工 工人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Not Nonfiction』

【Nコード】

N3136L

【作者名】

人工 工人

【あらすじ】

夢から覚めた時、そこに在ったのは“違和感”だった

世間一般がいう所の“普通の才能”を何一つとして持たない高校生、黒澄理緒くろすみりおは、物心ついた頃には、死んだ姉が見えるようになっていた。

その事を誰にも知られないように、世間に溶け込んで生きてきた姉弟。

そんな彼らの日常は、とある夢を見た事で異質で異様な物へと変

化する。

よく知る町並み、世界、仲間達。

しかし、それらは全て彼の知らない別物に変わっていた。

《可能性》、《特異能力》、《七大世界》。

『 現実感なんてまるで無い だけど僕は、此処にいる 』

プロローグ前編（前書き）

初めまして、工人と申します。

この厨二小説もどきは本来、完成してから載せるつもりだったんですが、初作品という事で、練習を兼ね、皆様方のご意見を参考にさせていただきながら、修正を加えて仕上げているところと考えた次第でございます。

お暇な方、どうか寛大な御心でお付き合い下さいませ。

プロローグ前編

風が吹き抜ける。

彼を右頬から撫でた風は、変わらぬ強さでやや長めに伸びた黒髪を靡かせる。

眼下に広がる都市は日常的に目にする景色の筈なのだが、俯瞰の視点によってなのか、今はどこか遠い世界に感じられる。

「いや、そうじゃないのかな。それにしても……」

この感覚は、それだけが理由ではないのだろう。

だが、それを置いておくにしても。

「……まるで箱庭だ」

ふと、そう思った。

彼、黒澄理緒は、とあるビルの屋上に一人で佇んでいる。

「うん？ 理緒くん、何か言った？」

いや、正しくは二人か。彼に問い掛ける声は可愛らしい少女の物。

しかし今、この場に三人目の誰かが居たとしても、人影は一つしか視認出来なかっただろう。

もう一人の“彼女”の名は黒澄璃尾^{くろしみりお}。

容姿、精神、その他諸々、どの角度から見ても小学生か中学生と見紛う程に幼い少女であるが、なんと実際には、理緒の二つ歳上の姉なのだった。

「うっん、何でもないよ、姉さん」

さて、全方位三六〇度を見渡す限り、彼らの視界を遮る建造物は存在しない。それはこのビル、『トラッシュユバンカー』が、世界有数の大企業、フロンティアライン社の本社として建造された、超高層建築だからだ。

正確な数値は不明だが、地下数百メートルから地上九百メートル

前後地点までの天地を貫くその様は、正しく杭の名に相応しい。

と、肩書きだけは立派だが、この辺境の街の交通の便の悪さや、その地上から高すぎる上層階は、もっぱら情報通信回線を利用して“司令塔”と化しているという噂だった。

文字通り、という奴だ。恐らくは、現在世界で最も高いビルであり、最も情報の集まるビルだろう。

しかし、この姉弟の視線は、主に眼の高さよりは下に向けられていた。

ふと、誰もいない世界の頂上で、寂しさと不安と僅かばかりの清々しさを噛み締めるように呟く。

「ここが……この世界が……」

“彼”の言っていた

『 《蒼》の世界？ 』

《To be continued……》

ブログ前編（後書き）

お目汚しでしたら申し訳ありません。以後、精進致します。

これからも、『N・N・N』をよろしくお願いします。

感想の方もお待ちしております。

プロローグ前編《Fragment》（前書き）

《Fragment》とは、《空想事》という意味で、本編中で実際に起きた訳ではない“白昼夢”のようなモノだと思って下さい。詳しくはまたいつか……

プロローグ前編《F i g m e n t》

《F i g m e n t》

風が凧いだ。

随分と、心地よい風だった。

柵も金網すらもない屋上の端から地上を見つめてみれば、忙しなく歩き回る人々は蟻の如くひしめき合い、彼らに乗せた飛行機が、空の彼方を蜻蛉の如く突き抜けてゆく。

だとすれば、この街は蟲の巣か……などと、益体もない事に思考を流す。

意識は、主に下へと向けられていた。

首が疲れてきた。

ほんの少し視線を持ち上げる。

そして、そんなふとした拍子に身体がぐらりと揺れた……………

…気がした。否、揺れたのは意識の方が。

その所為で、この矮小な身すら捕らえて放さぬ見えない腕を感じてしまった。星の重力に惹かれて、危うく足を踏み外す所だった。背筋に冷たい何かが這い寄る。

落ちる。おちる、墮ちる、オチル、墜ちる。

このまま前に、巨大な引力に、任せるまま自分の質量を引き渡してしまえたのなら。

……そうしたら、少しは楽になれるのかも知れない。

自分がここで死んだら、一体どうなるだろうか。

……いや、何も変わらない、か。

こんな所で学生が一人死んだ所で、世界は何も変わらない。

僕が居なくなった穴には何者も替わらないけれど、歯車が一つ抜けても世界は変わらず廻り続ける。

なんて、皮肉。

それは、自分ごとき居ても居なくとも同じということなのか。……ならば、此処から飛び立つのも悪くはないかもしれない。ならば、此処から飛び立つのは悪い事では無いだろう。

跳ぼうか。この足場を蹴りつけて。

飛ぼう。ひたすらに上へ、前へ。

飛べ。何も阻みはしないから。

そうして僕はただ一步、前に踏み出す

……なんて、そんな妄想に囚われてしまいそうになった。

「やっぱり、高い所は苦手だ……」

高所には、下界とは違う空気が確かに存在する。

密度が低い気がした。酸素や気圧、そういった物ではなくて、もっと致命的な何か。人の気配のような、現実感というか、よく分からない何か。

それが何かは、よく分からないけれど。

それこそ益体もない事を考えながら、風を切る音と、近づいてくる地面。それらを全身で感じて、そのままぼんやりと眺めていた。

《Black Out》

プロローグ中編

『世界は、“可能性”で満ちている』

新歴三十年五月一日、月崎都月崎市、学術特区にて。

「えーと……世界に於ける“可能性”とは、決まった概念的方向性を持たない特殊なエネルギーの総称であり、それでいて一般的なエネルギーの定義からはやや外れる存在を指す」

この特殊な粒子状のエネルギーは可能性因子エーテルと呼ばれ、世界の至る所に満たされており、ベクトルを持たないが故か、物理法則や人間の精神等によって影響を受け易い性質がある。

「一般に、“人が持つ可能性”というものは、“ヒト一人が扱い切れる可能性エネルギー”と同義。そして、一人の人間が一生の内に扱える可能性の量は大体決まっているらしい、と」

それを限界まで使い切ってしまうば、待っているのは存在の停滞。最終的には世界の流れから取り残され、自分自身の雲散霧消。物理的消滅が待つ。

しかし、言い方は悪くなるが、どんな凡人であろうが、人の持つ可能性は膨大だ。他の地球上生物と比較しても大きく発達した精神活動も手伝って、日常的な可能性の浪費ぐらいなら、世界は軽く許容してしまえたのだった。

しかし、可能性という未知のエネルギーを、人工的に扱う術は、未だ発見されていない。

ただそこに“在る”と、判別できるだけのセンサーのような物が造られただけだ。

その製造方法も、素材すらも、一般には公開されなかったが。

国も研究開発から完全に手を引き、法律で“可能性因子”に関連

した情報の一切を封印したからである。

というのも、三年前に起きた事故 所謂“事件”により、『町一つを消滅させる被害』が出たからなのだ。

最も、それでも言論の自由まで規制していない辺りはお国柄か、はたまた悪く言って平和ボケといった所か。

現在になつても、未だ地下に潜つて密に研究をしている連中は、日々捕まつて極刑にされ続けながらも、新しく、何処からともなく沸いて来ているらしい。

公表された罪状を解りやすく説明すれば、非人道的実験やらなにやら。

最も、何一つ中身を公開させない法律の為に、一般人には何が危険なのか、何が非人道的犯罪なのかすら判然としないのだが。

そういった事情もあり、政府には日夜疑問や追及が寄せられているが、かつての“事件”の被害だけは報道されていたので、現状ではそれほど過熱しないままでいるらしい。普通なら、逆に疑問の声や追及は激しくなりそうなものだと思うのだが。

と、高校生である自分にすらここまで言われたい放題なのは、どうなのだろうかと友人に話をしてみた。すると、

「お前は見た目男子中学生だけだな。……でも確かに、その上でなんで隠蔽しなかったんだろ？」

との事だった。

「うるさい。あ、だけど“男子”を付けた心遣いは友人として評価してもいいけど……っと、話を戻して……隠蔽の事だけど、ホラ、事件の規模と 被害も相当だったし」

「あ……悪い……」

何様だよ、というツツコミは来ない。
彼は気を使っているらしい。

「いいよ、事実だし。“父さん”のした事は、例え事故だとして許されることじゃない」

「でも、お前が何かした訳じゃ……」

悪くないだろう、と。

そんな甘言をいわれるのは、何と言うか……困る。しかも、ただ甘いだけで毒もないというのが、一番困った。

「……でも、ダメなんだ。三年前の“事件”で、計画の中心にいた父さんは行方不明どころか生死不明だし、その責任は誰かが負わなきゃいけない。だったら、止められなかった僕は、あの人の息子である僕は、それを甘んじて受け止めなきゃいけないんだ……」

けれども、理緒の友人は、ただ甘いだけの男では決していない。

「……驕るなよ、黒澄。その責任は、決してお前一人で受け止めて良い物じゃない。ただか高校生のがキが背負える程……背負っていい程、軽い訳じゃねーんだろーが」

「……………」

冷たい正論に聞こえるが、この言葉には黒澄への気遣いしか含まれていない。友人のその優しさが、心に染みた。

「分かったか？」

「 うん、ありがとう！」

やや幼く中性的な容姿も相まって、その笑みは目映まはゆいばかりに輝いている。それは

「ん、ならいい。……とここでさ、お前のそういう所が男っぽくな
いって言われる原因なのは、自覚あんのか？」

「 な！？ 」

自覚は、なかった。

というか、意識していなかったのだから、これが素であるという
結論になる。

「そ、そんな事、あるわけないよ！」

「はいはいそうだなあるわけないな」

「ちよつと、キリト 錐斗君！？ 」

絶対に分かってないだろうと言いたげな顔を見やってか、理緒は
友人の名を叫ぶ。

「むーむーうなりながらいわれてもな……ああ！ 嘘、嘘だから！
嘘だからそんなに拗ねんなって……！」

実は、友人とは言うものの、二人は決して特別に親しいという訳
でもない。

今日のような会話は日常茶飯事で、だけれど時々会って時々話を
する程度の関係でしかない。

矛盾したようで矛盾していない関係。

おそらくは、傷の舐め合いなのだろう。

ただ、同類を見つけて自分の不安を無くすなり何なりしたいだけ。彼、篠崎錐斗も、そんな傷を抱える一人だった。

互いの傷を探り合い、教え合い、各々傷口を再確認して、時たま間違えて傷口を刺る。^{えぐ}

それでも最後は笑って終わり。

また近い内に気が向いたら、どちらともなく話に誘う。

どこか破綻しているようで、致命的な所は決して破綻していない関係。

矛盾しているのは、きつと本人達自身なのだろう。

どこをどこからどう見ても、綺麗とは程遠い関係だが、それでもやはり、それは友人と呼んでも差し支えないのかもしれない。

……そんな関係を、少年らしからぬ少年 特に、黒澄理緒はいくつも持っているのだった。

それは必ずしも傷の舐め合いとは限らない。

だが、何故か奇特な事情を抱えた繋がりを中心に、常に彼は立っていたのを、本人が一番よく理解していた。

さて……ではでは、どちらが主人公が分からなくなりそうだが、

一応僕 黒澄理緒^{くろすけみじお}が身を以って知ることになった一件を、ここから綴っていきこうと思っ。

『 ねえ、だから待ってってば!! 』

プロローグ中編へFragment（前書き）

プロローグは前編、中編共に《Fragment》つきです。

前回、白昼夢のようなモノと言いましたが、“もしかしたら実際に起きたかもしれない出来事が混ざっているかもしれないと思ってもらっても構いません。”

つまりは、“信用できない部分”だということ……。。

プロローグ中編〈F i g m e n t〉

《F i g m e n t》

可能性とは、決まった概念的方向性を持たない特殊なエネルギーの通称であり、それでいて一般的なエネルギーの定義からはやや外れる存在である。

この特殊な粒子状のエネルギーは、世界の至る所に満たされており、ベクトルを持たないが故に、物理現象や人間の精神等によって容易く影響を受ける。

人間は、本人には自覚できない根底の部分で、周囲のエネルギーと影響を与え合っているのだ。

我々は、このエーテルへの干渉能力を、特殊な方向性かつ強力な値で有する人間が、生れつき存在する事を極秘裏に確認。

この、奇妙な性質を持つ干渉能力は、一つとして同じ物はなく、個人毎に別の物を有しているらしいとの統計が出ている。

我々は、この異質な干渉能力を《特異能力》、人間を《特異能力者》と呼称する事にする。

(これ以降の文脈は所々が不自然になっていて、改竄されている可能性が高い)

この《特異能力者》を研究する事により、人類は進化が望めるであらう。

所長の独断により、現時刻（新歴二十五年、九月二十日正午）をもって、当該部署はプロジェクトから離脱。

フロントティアライン社からの支援を受けた上で、当該部署の名称を《人工進化研究所》から《仮想階段》に変更。

以降、当該企業本社ビル《トラッシュバンカー》にて、活動を再開する。

研究の目的は

『 警告、停止を求めます』

「……………」

『 この記録は重要度の高い関係者用（レベル2）の情報です。貴方の現在のアクセス権限では一般公開（レベル1）以上の深度レベルの情報を閲覧する事は許可されていません。直ちに現在の操作を中止する事を求めます』

「……………」

『 ツー！！ 第七層へのハッキングを感知 非常事態発生。繰り返します、非常事態発生。管理者、序列第十二位《記録覧》ロケライターより報告。現在、データベースに警告を無視した不正なアクセスが行われています。侵入者の目的は、最高機密（レベル7）相当の情報の奪取と推測。非常時対応マニュアルの優先順位に従い、深度レベル3以上の機密保持の為、侵入者への迎撃を行います』

《Black Out》

プロローグ後編(前書き)

これでプロローグは最後です。

一話からは、練習の為に一人称もやってみたいと思います。

プロローグ後編

タツタツタツ、と間隔の短い足音が、狭い両壁に反響して響き渡る。

ビルの日陰による暗さの中、勝手よく知る街の路地裏を走るのは、息も切れ切れない少年らしからぬ少年。

名を、黒澄理緒という。今、彼は街中を目茶苦茶に走り回っていた。

「はあ、はあ……！！　なんで……なんでこんな事につ……！！？」

目方で二十メートル程の後方を追隨するのは、黒いロングコートに、同色の、銀をあしらったチョーカーを首につけた二人組の男女。百八十を越えているであろう長身の男性と、彼より頭一つか二つ程低い身長少女。

この時、理緒に冷静になって彼等を見ている時間があれば、男性のチョーカーにのみ、銀色のローマ数字で『2』のナンバーがあった事に気づけただろう。

更には、彼等との距離が丁度“二十メートルきっかり”を保たれている事は……流石に知るよしも無いかもしれない。

されども事実として、今の彼にそのような余裕は無く、現状は、現在絶賛逃走中なのであった。

「はあ……はあ……まだ、追って来る……！！」

実は黒澄は、今の現状について意外と冷静に思考していた。

黒澄は、至ってごく普通の高校生だ。

いや、それには語弊がある。

彼には極端な不得意がなく、寧ろあらゆる事が一定水準でこなせる、超の付く器用さの持ち主だ。だが、その“一定水準”が問題で、全ての分野に於ける、普通の人間の平均よりも下の一定ラインを絶対に越えられないのだ。

つまり、彼は究極の“器用貧乏”なのであった。

「……こんなの、絶対におかしい」

その器用貧乏的、かつ呪いじみた“全てが平均を下回る”法則は、精神的な部分（学力などは含まれない）以外には確実に作用している筈なのだ。

よって、黒澄の走る速度は、普通の人間よりもやや遅い。

にもかかわらず、後ろの人物達は未だ追いつく気配が無い。当然ながら、振り切れそうな気配も。

（どこかに向かつて追いついてるのか、単純に狩りを楽しんでいるのか……捕まれば殺されるかな……それとも……）

彼の脳裏には、数時間前まで平穩の中に居たとは思えない程のネガティブな思考があった。

それも当然。むしろ自然か。

黒澄理緒は、軽度の“恐怖症”なのだ。

そして、何の恐怖症かと聞かれればこう答えるしかあるまい。

曰く　自分以外の“全て”。

黒澄理緒の“呪い”の原因でもあり、黒澄理緒という存在の根源でもあるそれは、あの街で《世界恐怖症》と名付けられた。

担当した医師によれば、世界を怖れるが故に、世界に対して自分の内在を出力し、晒す事を本能レベルで抑制しているらしい。

そしてそれらは、彼の周囲は常に恐怖に囲まれ、この世の何処にも逃げ場が無い事を指し示す。そうなれば、自然に精神が強固になっていくのは当然の自己防衛だった。

ちなみに、この“全て”にはごく一部の例外もある。

（これだから……他人は怖い……。嫌いじゃないけど、ただ怖い）
その例外こそが、黒澄の姉である黒澄璃尾であった。

（　　ねえ、理緒くん）

理緒の頭の中に幼い少女の声が響く。

今は何処にも姿が見えないが、姉の声はテレパシーのように伝える事も可能らしかった。

理緒は、姉が居なくなるのは随分と久しいので、この事をすっか

りと忘れていた。

尤も、例えこの場に居たとしても、どうせ理緒以外には見えやしないのだが、それについての説明はもう必要ないだろう。省略することにする。

少なくとも

(どうしてあの人達から逃げてるの?)

どうやら、璃尾は理緒の中で今まで眠っていたらしく、現状を理解していなかったらしい。

(なんでって……あんな怪しい恰好の二人組に追いかけられたら、逃げるに決まってるよ!!)

先程は、この少女から怪しげな攻撃(?)を受けた。

彼女がこちらに手を翳^{かざ}した瞬間、どこから現れたのか分からない光が、空間に複雑怪奇な模様を描き出し、どこからともなく、こちらに“弾丸が撃ち込まれた”のだ。

そういえば、宙に現れた光の紋様は、見方によっては、ゲームが何かで見た魔法陣のようにも見えた。

が、そんな事は、銃弾を撃ち込まれた事に比べればどうでもよく、今はただ、思考の大部分を恐怖に埋められていた。

先程までの出来事を思い返しながら後ろを振り返れば、向こうは相変わらずの距離を空けている。

その二人組の着ているものは、まるでバラバラだった。

男の歳の頃は五十代後半から六十代後半程で、ごく一般的な会社員が着ているような黒いスーツにネクタイをしているが、威厳のある顔つきと白髪混じりのオールバックにした髪型のせいで、平社員というより重役か、下手をすれば社長と言われても問題なく信じられる雰囲気纏っている。というか間違いないと思う。

少女の方は、上下共に紺色のセーラー服で、下のスカートは短め、脚には横縞のニーソックスを身につけて、長めの金髪を、黒の立方体が二つ付いた髪留めでツインテールに結っている。

統一性など一切無く、

共通するのは黒のロングコートとチョーカーだけ。

中に着ているのは普通の衣服のようにも見える。

というより、そうとしか見えないので、普段着や仕事着の上から適当に着けただけなのではないかと感じた。

着けることが義務であるかのような、無理矢理の取り合わせ。

ならば、

「はっ……はっ……（制服？ まさか……“着用を義務づけられている”？）」

一歩毎に荒さを増す呼吸に限界を感じながら、理緒は一つの解答に到った。

（相手は何処かの組織か……いや、今はそれよりも）

「そろそろ仕掛けるぞ、間宮」

「りょーかいです、隊長」「隊長じゃない」

自分は少しずつ追い詰められている。

それを薄々感じながらも、今一番の疑問を思わず絶叫した。

「 此処は……此処は一体、“何処”なんだよー！！」
道に迷ったという訳では断じて無い。

黒澄にとってこの辺りの地形は、自宅から月校までの通り道などで、表の道の一本一本、信号の位置から路地裏までを余す所なく把握している。

彼が言わんとしているのはそんな次元の話ではない。

昨日まで無かった筈の建物が増えたり、いつも通う店舗が、あった場所から全く別の場所に移動したり入れ代わったり。

お陰で、完全把握している筈だった路地裏で、いつの間にか追い込まれている、なんて事になっている。

極めつけには、上を見上げれば、何処まであるか分からないような巨大な高層建築。天を貫き地に縫い留めるようなそのビルは、神話に聞く『バベルの塔』の完成を思わせた。

「あんな物、昨日までは無かったのに……って、うわわっ！？」
と、遂に限界が来たらしい。

限界に達した疲労で足が止まりかけ、躓いて片膝が地面につく。もはや立ち上がることもさえ適わないので、後ろをふり向いて敵を確かめる。

走りを緩めながら止まった少女。

(……ん？ “少女だけ”？)

その瞬間。アスファルトを靴で強く蹴った音が後ろから聞こえる。

「しまっ……！！」

振り返り、思わず目を固く閉じながらも、身体の前で反射的に腕を交差させて構えた。

反射的な防衛行動は“恐怖症”の副産物らしいのだが、実際の所、中々に役立つレベルのモノではあった。

しかし、なぜか思っていたような衝撃やら何やらはいつまでたってもやって来ない。

不審に思いながらも怖ず怖ずと目を開けると、そこには、先程後ろに回り込んでいた初老の男性が眉を僅かにひそめながら、口を開く所だった。

「む……先程から無抵抗に逃げるばかりだとは思っていたが……まさか、此処が何処なのかすら理解できていないのか？」

「……え？ え？」

なんとなく話が読めないが、取り敢えず攻撃を止めて、話し合いをする雰囲気になっていいるような気がする。……話は読めないが。

続いて反対側から、少女の軽い声が聞こえた。

「あーあ、どーするんですか、井文^{いぶみ}さん。この子、敵対勢力どころか、逆に保護対象じゃないですかー」

老人の名前は井文というらしい。

なんか都合が良さそうな展開になりそうだなー、とか考えていた理緒だが、流石に聞き逃せない単語が聞こえてきたので口を挟む。

「あの、“この子”っていうのはやめてくれませんか。一応、貴方とは同じ年か、それより年上だと思つので」

「はっはっはー、侮ったな、少年！ 確かに私は小学校高学年ぐら

いに見えるとかよく言われるけど……じ・つ・は！ 中学生、しかも三年生なのだよーちくしょー！」

なんと、世の中には自分と似た境遇の人間が居るらしい、と知って感激した理緒だが、一応真実は告げておくことにする。

その程度を不幸だと思われても困る。上には上がいるという厳しい現実を乗り越えて、少女には強くなってもらいたい。

「君は私より少し小さい位だから小学五年生くらいかな」「高校生です」

「うんうんやっぱりか って……え？」

「……高校、二年生です」 ポケットから生徒手帳を取り出して差し出す。

そこには確かに書かれている筈だ。

月崎都立月崎高等学校。新歴〇〇年度入学、二年六組、黒澄理緒。所属部活動、帰宅部（ここはふざけて自分で書いた）。

「……………」

「……ふむ、まごう事なき本物だな」

老人が上から覗き込むように腰を曲げ、アゴに手を当てて頷く。

なんか知らないけどフレンドリーになって来たな、とか思いながら少女に問い掛ける。

「ええと、信じていただけましたか？」

「……嘘、だろ……？」

少女の震えるような声。 直後、

「す、スイマセンでした先輩ー！！」

「えええっ!？」

頭を擦り付けるような土下座をされて、正直ちよつとばかり引いた理緒。

話を聞くに、どうやら少女は、自分と似たような、けれど確実に自分以上の苦勞をしてきたであろう理緒に尊敬の念を抱いているらしい。

当の本人は、先輩ってなんだよ、初対面だよ……とか考えて悩ん

でいた。

すると、ガバツと頭を上げて目をきらめかせた少女が楽しげかつ嬉しげに “最悪の地雷” を踏みつけた。

「いやーこれで助かりますー。人数が少なくて肩身が狭かったんですよねー、“女の子”は」

「うん？」

(……後の事は覚えていない。最後に、引き攀った少女の可愛らしく整った顔と、頬から汗をダラダラと流して硬直した老人の横顔が脳裏に焼き付いてはいたが。視界が暗転し、気がついた時には少女は再び土下座をし、老人は煙草をふかしながらハンカチで汗を拭っていた。気まずい雰囲気では何か起きたという事だけが理解できた、という次第だった)

老人が少女に声をかける。

「間宮、名乗っておけ」

「はい、ではでは改めまして、私のお名前は《間宮雪貴》まみやゆき っていますつ。“ゆきつち”もしくは“ゆつきー”とお呼び下さい。よろしく願いますねっ、先輩！」

「なんだそれ」

「私の名は《井文 無比》いぶんむひ だ。君のような人間を保護する《仮想階段》という組織に所属している」

(僕みたいな人間……?)

理緒の疑問に答えが出る前に、彼等は路地裏から表通りに入る辺りに着いてしまった。

「黒澄君、君は先程、此処が何処かを問うていたな」

そこで立ち止まると、先頭を歩いていた井文さんが振り返り、表通りからの逆光を背に受けながら言った。

「人はこの世界を、《蒼》と呼ぶが……まあ、君にとっては初めての異世界だ。正式な名で呼ぶとしよう」

前にいた老人と、理緒の脇を通り抜けた少女が、路地裏の出口の

左右に立つ。

『 よつこぞ、 黒澄理緒。この素晴らしき世界、
ARTH』 』 《BLUE E

《T o b e c o n t i n u e d》

プロローグ後編（後書き）

おまけ

「しかし……居るものなのだな」

井文がポツリと呟いた。「……………」

間宮と理緒が二人で首をかしげれば、何でもないと取り繕う。

「若さという奴か。いや、若さなのか？」

一人、誰にも聞こえぬように。

「あの人と間宮でウチの組織には二人いたが」

今までの疑問に新たなファクターが加わりそうだ。

「不思議生物も……彼で三人目か」

不必要に若い女性が二人も居たので女性限定かとも思っていたが、
それでもなかったようだ。

ちなみに、この三人目に見えない四人目がついてきた事は、今は
まだ誰も知らない。

第一章『Not Nonfiction』（前書き）

一人称っぽい文章の完成。

次回からは本編なのでもっとはっちゃけていきます。
書き方はだいぶ変わる筈です。

第一章『Not Nonfiction』

新歴三十年五月一日。

ある晴れた日の出来事だった。

此処、日本のとある片田舎　この国に於ける四つの首都の一つにして、最小の首都でもある月崎都では、文化や技術の発展と成長を無理矢理に促すために、幾つかの分野毎に施設を密集させた“特区”が設けられている、との事らしい。

現在、その街の学術特区にある有名な近道である路地裏を歩く、黒澄理緒　つまり自分は、月崎都立で小中高と一貫した教育機関である、月崎高校に通う高校生だ。小中からの一貫にもかかわらず名前が高校であるのは、この学校の七不思議の一つでもあったりするのだが割合したい。

季節は春。

といつても、そろそろ終わりに近づいてきたのか、街路樹の桜に、花はもうほとんど残っていないかった。

最近風が強い所為か、花が飛ばされて散ってしまうのだ。もはや花が残るのは、月崎公園周辺のみだろう。

その風によつて肌寒さを感じ、黒澄は思わず身震いをした。黒澄が着ているのは月崎高校（以下、月校）の制服である学ランではなく、夏用に用意された半袖のワイシャツだった。

つい最近、二学年に進級した際に、新調した物で、試しに袖を通してみたのだが。

「寒すぎるよ……やっぱり、明日からも学ラン着ておこうかな……」
路地裏の日陰も相俟って、一段と体感気温が低くなっている。
「それにしても……」

清々しい朝の空気に、ふと上を見上げれば、青く蒼く碧く晴れ渡り雲一つ無い空が、青のグラデーションを映し出している。

周囲を山々に囲まれた特殊な高層建築群。ともすれば、不気味で

シユールなこの光景も、十年も暮らせば見慣れた物だ。逆に、夏場でも涼しい街の気温は、此処ならではの物だとも思う。

「小春日和、つていうのは……えーと……そう、秋を言うんだっけ」
一人で呟いた言葉は、それでいて決して独りで呟いた物にあらず。隣の一メートルほど上空、人通りの少な過ぎるアスファルトの上を、“ふわふわと”漂う幼い少女がその言葉に相槌を打つ。

「この前、琴塚君がぼやいてたもんね……」理緒、今時の人間は、言葉も満足に遣えないというのか。間違つた遣い方をされる言の葉の気持ちも考えてもらいたい』とか何とか……」

姉の璃尾だ。

ちなみに琴塚とは、黒澄の友人の一人であり、錐斗と琴塚の二人は、割と黒澄と親交がある人間である……割と、だが。

“彼”のこだわりについての議論は、本人が居なければ意味も無く、ただ面倒臭いだけの話で何の得にもならないと判断したので、多少強引にでも矛先を逸らす事を選ぶ。

「そついえば、姉さん。今年は桜が随分前に散つたのに、未だに風が強いような気がしない？」

そう、実は浮遊する少女”は黒澄理緒の姉であり、彼と同じく月校の制服 彼女の場合は女子用 を着ていた。

ただしこちらは、冬でも着る人間の少ない“フル装備”であり、制服としての原型（これが原型なのだ）を留めておらず、些か装飾過多で可愛らしさを重視しすぎなのではないか、と学校側に疑問を抱いている。

とまあそれは置いておくとして、この姉弟、どちらも名前の読みが“リオ”なので、一見ややこしいように見えるのだが、実はそうでもなかったりする。

浮いている事からも分かるように、彼女の一切は、『何者にも見えず、触れられず、聞こえない存在』なのだ。ただ一人、弟である自分を除いて。

僕が物心ついた頃には既に、彼女はそういう存在として常に傍に

在った。

その特異性故に、誰にも知られる事を許さぬまま。一般的な知識とのつじつま合わせの結果、『幽霊』という言葉で落ち着いた。ただ一つ、幽霊にもかかわらず『成長する』という一点を除いてそして、十六年以上触れ合えぬ姉弟は、常に共に育ち、逆に強いつながりを生み出したと自分では思っている。

「……ねえ、理緒くん。風の話は、お姉ちゃんとの団欒より大切な……？」

……ちなみに、姉の璃尾の歳が今年で十八になるのは驚愕の一言に尽きる。

なにせ見た目も、中身の一部までもが小学生か中学生程度。目の前で真実を告げられても、それこそ悪い夢か、人をからかう為の笑えない冗談にしか聞こえない。

だが、もし仮に自分達姉弟の姿を誰かに視認されたとしても、その人物は余り驚きはしないだろう。

血は水よりも濃かったのか、それとも、遺伝子は幽霊にとっても重要なファクターなのか。どちらにせよ、どちらも似たような物。

つまり、僕 黒澄理緒も、『男らしくない』や『幼い』等と散々言われるような中性的な容姿なのだ。小学生程度の姉に、中学生程度の弟(?)が並び立つ。

街中で見かけても、まあそういう事も在るのかな、で終わりだろう。実年齢さえ知らなければ。

……大分話が逸れてしまったが、が歩いていた路地裏の近道は、いよいよ大通りに差し掛かる所……だったのだが。

「……え」

目の前を、路地裏前的大通りを、月崎高校の制服を着た“白い髪の人影”が通り過ぎて行った。

瞬間、

向こうと目が合った。赤い瞳と。

口元が歪んでいた。優しげに微笑んでいた。

長髪が靡いた。ただひたすらに灰色で、腰よりも長い髪だった。

「あ」

忘れる事は許されないと思わせた。

なのに、次の瞬間には記憶から消えかけていた。

記憶に残るのは鮮烈な色だけ。

白灰の長髪と、紅い瞳だけだ。

何故、と、疑問を持つ間さえ無かった。

たった一瞬の邂逅は、“黒澄の存在の根底を揺るがしていた”。

「り……くん……理緒くん!？」

「え?」

倒れていた。

ひんやりとした日陰のコンクリートが硬く、心地よくも痛かった。

「あの……姉さん、誰かに見られると悪いから、揺らすのは止めてくれないかな……」

「あつ……ごめんなさい。揺らしたらダメだよね、何処が悪いかもしれないし」

実はそういう話ではなく、姉は理緒に触れられる事こそ可能なのだが、他の人間には見えない。

つまり、だ。誰かが路地裏を覗き込みでもしたら、自分は一人何も無い路地裏をゴロゴロ転がっているように見える。

……勘弁してくれ。

「よかった……急に倒れたから、私……驚いて……」……（急に、

倒れた……?」

何故かと考えるよりも先に、涙目になる姉を心配する辺りは、まだまだどうしようもなく甘さが目立つ。

(誰にもシスコン呼ばわりされないのは、救いだけどね……)

「理緒くん……?」

「またもや上がる心配げな声。」

「大丈夫。姉さんは、僕が守るから」

何気なく口にした台詞に、何やら感動の余り目を潤ませまくる姉。事実としては、自分達はシスコンやブラコンと言われるべき依存関係だという事を理解していた。

まあ、それは置いておくとしても、特に具合が悪い所はどこにもないようなので、明日からの連休について早くも思いを馳せる事にした。

『 早く行こう。この先に何かあるか分からないけど、それでも速く 』

《T o b e c o n t i n u e d ……》

第一章『Not Nonfiction』（後書き）

この物語はフィクションです。

実在する人物名、団体名、その他の固有名詞とは一切関係がありません。

……今更ですが、一応。

第一章『Not Nonfiction』> Fragment < (前書き)

本編は時々バカっぽくなる予定。

第一章『Not Nonfiction』〈Figgment〉

《Figgment》

最初はほんの気まぐれだった。

見納めになるであろうこの世界を、人の少ない町並みを眺めながらぶらついていた。

だが。

今までずっと捜し求めていた人物を、ふとした拍子に街中で偶然見つけてしまったから。

嬉しかった。

この街に居る事を掴んでから、かつて自分の属していた組織や、この世界の方々に手を回して、余計なモノを締め出して。

やっと“彼”に接触する準備が整いそうなその矢先に“彼”を見つけたのだ。

だが、“仕掛ける”のは明日かそれ以降。接触するのは更に後。

「仕方がないだろう？ この感情を、一体何年耐えてきたと思っ
ている？」

我慢の限界だったのだろう。

不意に込み上げてきた激情に、思わず彼の前に姿を晒してしまっ
た。

いくなれば宣戦布告だった。

疲れが溜まっていたのかもしれない。特に、裏から手を回すのに
は苦勞した。

接触到当たって色々と手を回したのは、“彼”の近くに自分のか
つての友人がうるついていたからだ。

組織にいた時の相棒にして親友。

自分が組織を抜けた後も、今だに仕事を続けていたらしい。

だが、彼は“彼”を監視している訳ではないらしかった。

軽い接触ならまだしも、ターゲットと友人になる監視役はいない。断言できる。彼は性格の上でも、平時には他人との余計な接触を避ける。

同僚だった時も、自分以外にはほとんど事務的な会話しかしていなかった筈だ。

と、そこまで考えて、その彼が友人のように語らう“彼”は、やはり素晴らしい相手なのだろうと思った。

まあ、そんな彼だが……今回はここで退場だ。

この話に、彼は必要ない。

カーテンコールも、そもそも出演すらも許さない。

例え親友でも、今回ばかりは加減できない。

舞台上上がるのは、“彼”と自分と不愉快な仲間達だ。

本来なら、“彼”と二人で独壇場じみたことがやりたかったが、やはりそこには演出も必要だ。

主演もまだまだ経験が足りない新人。ラストシーンまでは、脇役共と腕を磨いてもらおう。

よって、彼には辺境に飛んでもらう。家に着く頃には出張命令が出ている筈。組織に手を回したのはその為だ。二年前に抜けたとはいえ、現在のトップが昔からの“同志”なので、組織に対しても多少の融通が利く。

面倒事を押し付けて暫くは帰って来れないようにしてやってくれと頼んでおいた。

準備は十全。そろそろ始めようかと一人呟く。

「……開幕は近い。楽しみにしておくといい」

“彼”に姿を見せた直後には、彼女は屋上に居た。少女は、どうやって一瞬で登ったのか、地上十メートル近くあるビルの屋上から、すぐ下にある路地裏を見下ろしていた。

少女は、何も無い路地裏の地面に倒れて、一人でゴロゴロと転がっているように見える“彼” 黒澄を眺め、胸に右手の平を当

てて心底愉快そうにクスクスと笑った。

「フフフ……少しばかり、今の君には刺激が強過ぎたかな
才君」
“リ

《Black Out》

第一話 『昨日までと今日は日常』

ここからは僕、黒澄理緒がお送りします。なんちゃって。

錐斗君と学校に着いてから、校舎の昇降口で靴を履き替えている琴塚君に出会った。

錐斗君が声を掛ける。

「あ、オーイ、琴塚！」

向こうは靴を手にしたまま、腰を曲げて屈んだ状態からこちらを見上げる。

「む……？ ああ、黒澄達か」

錐斗君から朝の挨拶。

「グッモーニン、琴塚！」

「『Good morning.』だ、キリト」

妙に発音いいなあ。

「おはようございます、琴塚君」

これは僕。

「ああ。おはよう、黒澄」

フツツ、みたいな感じで目を細めて優しく微笑む彼。

僕と同じ位の、肩まで伸びた黒髪に、切れ長で鋭い瞳、平均よりやや低めな身長に、色白でシャープな顔立ちと体つき。耳障りにはなりえない程に落ち着いた、それでいて男にしてはやけに高めの声。

例えキザっぽい仕種でさえも、彼が浮かべれば成金趣味ではなく気品溢れる高貴な品に……ごめん、自分でも意味が分からない。でも大体そんな感じ。

いつもは完全に無表情でほぼ無言に近いらしいけど、自分達と居る時にはそうでもないと思う。

異様に高校生離れした、落ち着きのある優しい空気、個人的には好ましいと感じさせてくれる。

ちなみに、彼は何よりも女の子っぽい。僕のような中性的（認めたくはないが）な訳ではなく、女の子らしさが滲み出る美人。美しいとか、端麗とか、そんな雰囲気を持っている。れっきとした男だが。

生物学的に検査して調べたらいいと思います。

本人はかなり気にしていて、トラウマすらあるらしく、面と向かって言うといじけてしまうのだが、自分としては、世の中『上には上がある』という言葉をもつて教え、自分にはまだ救いがあると思わせてくれた心の恩人に認定されている。感謝。あと合掌。

今更説明するまでもないのだが、彼の名前は《琴塚蓮》ことづか れん。

錐斗と僕と彼の三人は、割りとよくつるんでいる友人達。

高校に入ってからからの知り合いではあるが、対人恐怖症の僕にしては、比較的以上に仲の良い付き合いだ。

そういう彼は、普通の人から苗字で呼ばれる事を嫌ったり、“言葉”に対して妙なこだわりがあったりもする。

僕と同じで両親が居ないらしいけど、そこには気軽に触れないのが僕達三人の流儀みたいなモノ。やる時は了承をとって互いが互いを徹底的に。

かなり歪んでいるとは思いつけど、どうせ僕らは似た者同士。

傷の舐め合いはいつものことで、傷をえぐり合うのもいつものこと（慣れたもの）だ。

「っーかさ、お前ら。誰かに噂されなくなかったら人前でそれはやめろ、っっていうつも言ってるだろ。どう見ても『お姉様と無垢な少女の背景に花が咲き乱れる関係』にしか見えねーんだって」

バツ！！ と顔を逸らす僕と琴塚君。

顔が熱いのは気のせい。いや怒りとかのせいに決まってる。

だって男に興味ないから。

うん、“QED”証明完了。

……念の為に言っておくと、本当にそんな気はない。

気恥ずかしさやら横にいる錐斗（馬鹿）……もとい、横の馬鹿（

錐斗)に

「二回言うな！ あと括弧に名前を入れるな、俺の名前が馬鹿の代名詞みたいになってんだよ!!!」

馬鹿に対する怒りやらのせいであることは間違いない。

「ついにただの馬鹿に!? 括弧無くなってんぞ!!!」

「何を言ってるんだ、篠崎?」

「え、あ、いや……何でもない、気にすんなって!」

……なんで僕は話が始まっていきなり、それもしようもない自己弁護を必死にやっぺてんだろう……。

「えーと……ごめん? ……なのかな」

呟きながらも、横で呆れた顔をする錐斗君を見て、苦々しい顔になりそうだった。

「……謝る事でもないだろう。この馬鹿が突拍子もない事を口走っただけだ」

琴塚君は既にそんな顔になっていた。

錐斗君は、言い訳のような真実(あまり認めたくない)を語り始めた。

あんな、と一拍おいて溜息をつき、

「俺は善意で言ったんだ。本来なら既成事実と勘違いされそうな噂を、半ばで留めてるのは誰だと思ってるんだよ」

「……待って、それは留まってない」

ただし、悲しいかな、全ては現実であり、いつも錐斗君に迷惑をかけているのは日頃から認識している事実である為、申し訳なく思っで謝罪する。

琴塚君も同じ事を思っていたようで、僕より先に謝っていた。

「む……すまなかった……」

「ごめんね……錐斗君……」

「……お前ら、男だよ……? 見た目を省いたとしても、字面だけ見たとしても、全然区別つかねーよ……。本当は自覚無いだろ、お前ら」

『字面？』『何でもねーよ』とかいう会話の後、確かに一理ある、というような話になった。

「気にすんな、友達だしな。それに、お前らがそうやってるとな、俺に女子どころか男や“それ以外”まで、無数の嫉妬の視線と恨みがましい念が……」

「……なんか“それ以外”が気になるような怖いような死にたいような……。いやいや、それにしても、ちよつと大袈裟過ぎじゃない？」

自分は人に注目されるような人間ではないと思うのだが。琴塚君は別として。

「私もそんな覚えはないが？」

……琴塚君本人は、そういった事を気にしていなかったようだ。

「自覚が無いって怖いなー」

「……ああ、恐いな、鈍感って」

……錐斗君はなんでこつちも見てるんだろ。

……ああ、そういえば、前に初めて三人で錐斗君の家に行った時の事を思い出してしまった。

確か、家に到着した僕達三人を錐斗君のお母さんが見て、

『あらー、お帰りなさい錐斗さん……って、ええ！？……ダメよダメよダメダメ！ 二股どころか、“両手に花”だなんて！！』

優柔不断なんて許しませーんっ！！』

……言うまでもなく、僕らの顔は直後に引き攣った物へと変わった。

玄関先で顔を見合わせた三人は呆然となり、意識が彼方に飛んでピクピクとする頬を抑えられなくなっていた。

今思い出しても、引き攣る頬が止まらなくなる。

頭をブンブンと振り回し、ゴチャゴチャになりかけた思考を散らす。

と、意味もなく話をしながら歩いていると、いつの間にか教室の前にいた。

二人はここまで。

僕だけは、この二年四組から二つ隣の廊下の端にある、二年六組に向かう。

「じゃあね、二人とも」

向こうは手を振り、声を返す。

「おう、またな、黒澄！」

「縁が合った時にまた会おう」

……二人とも同じ教室に入ってしまったのを見送ると、廊下を振り返り足を動かす。

(むにゅ……二度寝しちゃった……?)

友人に会ってからは自分の“中”に消えていた璃尾も、また起き出してきたようだ。

目指すは教室、二年六組。

そして物語は、放課後へ。

『 ふふ、今日はなんだかいい事がありそうだ 』

《To be continued》

第二話 『皐月の夜の夢』 - Spring Night's Dream -

やっぱり安定しなかったので、当初の予定通り書き方を今回の統一する事にします。

サブタイトルは……気が向いたら付けています。

1 .

二人の友人達と別れてから数時間。

授業の終わりを告げる鐘の音と、周囲に満ちたこの時間特有の喧騒を聞きながら帰りの支度を終えた僕は、教室後ろのドアに手を伸ばした瞬間にクラスメイトに声を掛けられた。

「あつ、ねえねえ黒澄君」

「ああ、貴女は……」
友川智佳。

活発にして快活な少女で、クラスに一人は欲しいようなムードメーカー兼トラブルメーカー。好きな物は元氣、大好きな物も元氣。自称、元氣の欠片かけら。ちなみに、塊は響きが嫌だったらしい。よく分からないが。

普段は男女問わず人気者で、普通ならば、自分のような人間に関わってくるタイプではないように見える。

だが僕は、最近起きたとある一件の際に、彼女が偽りの性格で身の裡うちに隠した暗い感情を知る事になってしまった。

後に待っているのは、他の人にやっているようないつも通りの傷の舐め合い。

この件について、彼女には罵られたってけなされたって呪われたって殺されたって構わない。

“見たくもない自分の傷を勝手に見せつけ、嫌がる相手の傷を無理矢理晒させる”。

僕がやったのはそういう事だった。彼女に対する辱めもいい所だ。本人の中で一応の踏ん切りがついてない内にこれをやると、逆に立ち直れなくなる危険性も有ったのだが、彼女は再び立ち上がった

みせた。

それは、彼女がそうなる事を見越していたとか、彼女を信頼していたとか、そういう事ではない。そもそも、そこまで彼女とは親しくなかった。

ただ、“どちらでも構わなかった”だけ。

別に彼女が立ち直ろうが、そうでなかるうが、それこそ一向に構わなかった。

寧ろ、立ち直れなくなったその時は、自分達の仲間が増えるのもいいかな、とさえ考えていたのかもしれない。

最低な事この上ない外道だ。生きている価値が無いと思う。

だが、死ねない。

怖いのだ、単純に。

生きている事もこの世の全ても死ぬ事も死んだ後に待っている全てさえも。

だから“殺してもらおう”。

自分は殺されて当然だから、それを受け入れる。

受け入れる受け入れないに関わらず、ただ襲い掛かって来る圧倒的な暴力のみを受け入れる。

……それは多分、受け入れた事になっていないと思う。

やっぱり僕は、最低だった。

そして彼女は、

「あのね、黒澄君……今から、ちょっとお話出来ないかな」

僕らのお仲間に、なってしまった。

悲しいことに、立ち上がりはしたのだ、彼女は。だが、立ち直れなかった場合に発生する筈の弊害 “傷の舐め合い” への“依存性”が発現した。

彼女は、“壊れかけ”てしまった。

「ゴメンね、友川さん。今日は、病院に行かなきゃいけないんだ。

僕の……例のアレなんだけど」

聞こえをよくすれば、完全に立ち直るまでは支えてあげる人が必

要だというだけの事だが……涙ながらに自らの傷を吐露した結果がこれというのは、余りに救われたいではないか。

「そっか……うん、じゃあ、また今度、お願いしてもいいかな」

「ええ、分かりました。僕で宜しければ」

誰が悪いという話ではないのかもしれないが、やはり僕が悪いのだろう。僕の至らなさ故だ。

（別に、理緒君は悪くないと思うよ。だってああでもしなきゃ、あの子の心は完璧に壊れちゃってただろうし……）

「（……ありがとう、姉さん）」

姉のありがたい気遣いに安堵してしまいそうになるが、それだけはダメだ。安心しては、ダメだ。

姉も、そういうつもりで言ったのではない筈だ。

仕方なかった、で納得してはいけない。

他に方法が無かったとはいえ、いや、他に方法が無かったからこそ、彼女の心を土足で踏みじった事を“仕方なかった”で片付けたくはない。

それが、それこそが、僕にできる贖罪なのだから。

本来なら、責任をとろうと時々のお話”に付き合っているのだが、生憎とその“お話”は昨日やったばかりなのだ。

少しは控えさせないと、逆に立ち直るのが遅くなるので、胸が痛むが今日は断っておく事にする。

勿論、僕は病院になんて行かない。

そもそも、例のアレ “恐怖症”は、あらゆる医者がどう手を尽くしても治らないと匙を投げたような代物だ。今更検診なんてする必要はないと思う。

……まあ、これ以上あの凄惨をきわめた事件について、気軽に語っていい事だとも思えないので、機会があるまでは心の中にしまっておくとする。

「それじゃあ、失礼します」

「うんっ、じゃあね！」

(智佳ちゃんまたねー)

なぜか親しげな不可視の姉が、友川さんに向かって手を振る。

僕は振り返ると、今度こそ教室のドアを開き、廊下に踏み出した。

2 .

学校を出てすぐの所で、今日はなぜか、あまり錐斗君と会わなかった事を思い出した。

篠崎錐斗しのまききりつとは、最近は残念ながら拡大気味の、僕の“お仲間”に分類される人間だと思う。

数少ない友人の、最初の一人。互いが互いの一番親しい友人だと考えて間違いではない筈だ。

知り合ったきっかけは……省略させてほしい。

「僕には、普通の知り合いがないのかな……」

勉強は出来ないのに、頭は妙な程に回る少年。多分、勉強ができないというより、勉強が嫌いなのだと思う。

そういえば、琴塚君は学年トップクラスだし、友川さんも成績上位グループの一人であった事を思い出した。

何らかの欠落を抱えた人間は、その欠落を補うように他の能力が発達するらしい。

だが、ほぼ全てに問題を抱える僕は、けれどもどこも優れてはいない。これは一体どういう事なのだろう。

考えるのも虚しいので、本筋の思考に戻る。

「休み時間に、やたらと走り回ってた気がするけど……」

何か焦っている気もした。

休み時間に会った琴塚君は、気にしなくてもいいだろう、とか言っただけだ。「うーん」

あれこれ悩んでいる内に、既に住宅区の隅にある自宅の前に到着していた。

割と立派な外観に、中も見た目通りに比較的広い。有名な研究者であつたらしい父の残した物だ。

「ただいま……ですね……」

そう言いながら家の鍵を開け、中に入る。

僕が産まれて早くに母は亡くなったので、この家には父と、誰にも見えない姉の三人で暮らしていた。

だが、三年前のあの日、父は行方をくらませ　　というより、生死すら分からなくなった。

覚えているのは、最後に口にした父の言葉。

『　ごめんな、リオ。“計画”は、失敗する　』

これが最期。

これで最後。

余りにも呆気ない。

その翌日、父が主任を務めた“計画”とやらは、“街一つを巻き添えにして”失敗。

クレーター一つ残して、他には塵一つ残さず消滅したのだった。

これが僕の視点から見た、“事故”と呼ばれる、新歴三十年間の最大の事件だ。

何故か姉は、僕がこの事を考えていると、それを感じとってどこかへ行ってしまう。

おそらく僕の自室の隣にある自分の部屋で、着替えでもしているのだろう。

僕の“心の中”に潜り込んだり、勝手に成長する事を含め、とてもじゃないが“幽霊離れ”しすぎだと思う。嫌だとは思わないし、どうせ思えやしないが。

……あの男が、何を思って僕に言葉を託したのかは分からない。死んだという実感は今一つないが、生きているとはとても思えないので、確かめようもないだろう。

ただ、父が最後に残した言葉の意味は、多分こつこつという意味ではなかったんだと思う。

天才という常にもれず、ひいき目がなくとも才能に溢れた変人、という認識だったが、真面目ではあつたし、優しい人でもあつた。尊敬する父が、何をしていたかも少しは聞いていた。

『エーテル』という未知のエネルギーについて研究をしていたらしい。

詳しいことは分からないが、大気中に存在する粒子状の“力”だとも、あの人は言っていた。

息子とはいえ、実験の内容までは流石に教えてくれなかったが。

『 成功したらのお楽しみ 』

秘密は未だ秘密のまま、秘密を知る者が居なくなつた以上、おそらくは一生、あるいは永遠に秘密のままなのだろう。

そう思っていて、それを信じていたし、その筈だつたのだ。

今日、この日まで。

3 .

お風呂からあがると、濡れた髪を丁寧に乾かしながら、自室に帰ってきた。

担当医だつた三島さんがカウンセリングのついでに言うには、僕の髪質は意外と繊細らしく、適当にするとすぐ傷んでしまつぐらいに弱いらしい。

さすがに父親より先に禿げたくはないので、細心の注意をはらう。ハゲが悪いとは言わないが、なにも好き好んで禿げたい訳ではない。

「……一人で何考えてるんだろ」

夜中に一人、風呂上がりの自室でハゲに悩む高校生……嫌過ぎる。

もうやめよう。まさしく“不毛”だ。

「璃尾は……もう寝てるかな」

ほとんど私物の無いように見えるが、本当に私物が無い訳ではなく、見えない箇所にある収納スペースが妙に広いだけだ。

尤も、それでも余り多くを収納している訳ではないが。

璃尾に言わせれば、『物悲しいくらいに寂しい部屋だね』との事だが。

何の理由もなく“恐怖”の対象を増やすのは御免なので。置かれたベッドに転がる。

余り眠くはない。

というか、“眠りたくない”。

最近ベッドに入ると、決まって妙な夢を見る。

自分は白い闇に、いや“白い何か”に包まれていて、”何処からか呼ばれる声が聞こえるのだ。

聞こえる声はいつも同じ。

『早く、目を覚まして』

お陰で夜中に起きて、最近若干だが寝不足気味だ。

こんな不気味な夢を毎日見るのは、誰かに呪いでも掛けられているんじゃないか。

だとすれば大成功も良いところだ。

あの気持ちの悪いような、何とも言えない感覚が嫌で、最近就寝時間が憂鬱になってきているぐらいだ。

休息のための時間を、無理矢理他の事に浪費させられるような、

まさしく鬼畜の所業！……言い過ぎか。

しかしそんな事を考えている内に、いつの間にか僕は、まどろみの中に沈み込んでいたのだった。

そして

僕は、見慣れた白い闇だけが広がる空間にいた。

訂正。その上で、白いナニカが更に僕を包み込んでいるようだ。そして、脳裏に、微かな声が、響き渡る。

「早く、目を覚まして」

いつも通りの、自分に覚醒を促す女性的な声。

そういえば、自分は何故この声を、“呼ばれている”などと思ったのか。

考えていると不意に、今までは聞いたことのない声が混じった。

「こ……………に……………」

聞き取れない程に小さくはあったが、徐々に大きくなってくる。

「こ……………帰……………き……………」これが、僕がこの世界で最後に聞いた言葉だった。

『 こちらの世界に、帰ってきて 』

《T o b e c o n t i n u e d》

1 .

寒気のような感覚に目が覚めた。

辺りがだいぶ暗い為に、いまいち現在の時間が分からない。

この自室まで朝日が差し込まないのは不満ではあるが、構造上の問題なのだから仕方がない。

転がったまま重い^{まぶた}瞼を擦り、ゆっくりと開くと、天井には何一つ遮る物の無い青空が縦長に切り取られている。　って、え？

「あれ？」

おかしいな。我が家はちゃんと天井が完備されてるタイプのマイホームなんだけど。されてないタイプをお目にかかった事はないが、おまけに心なしか、背中に覚えのある感触が。

「……なんでコンクリートに寝てるんだろっ……」

コンクリート健康法？

「そんな馬鹿な……」

そんな怪しげ極まる健康法になんて手を出した覚えはない。

ヒュウ、と一迅の風が吹き抜けていった。

「ていうか、寒い寒いと思ったら、ここ外じゃないか……」

……どうして外なんか居るんだ？

昨日は、確かにベッドで寝た筈なのに。

凄い寝相？

いやいやそんな筈はない。だとしたら壮絶の一言に尽きる。

むしろ僕の寝相は良い方だし、璃尾が言うには、まるで死んだようにピクリともしなくなるらしい。……死んだように静かな人間が、わざわざ屋外まで歩いて来たりはしないだろう。それではまるでゾンビだ。

では、何故？

「……取り敢えず起きよう。そろそろ、背中が痛くなってきました」
しかも寒い。

寝る前に着ていたのはワイシャツと学生服のズボンだけ。ベルトは寒さを防いではいくれないので除く。

「あ、学生服……」

腹の上辺りをまさぐってみると、寝る前に掛けておいた学ランが手に触れた。正直助かった。

季節が春だとはいえ、未だ早朝は肌寒い時期だ。

風邪をひきたくはないので、学ランを上から着込む事にする。

右にあつた壁に片手をつけて立ち上がり、辺りを見回す。

「ここは……路地裏？」

なんでこんな所に？

下手に知っている場所だったので、逆にどうやってここまで来たのかが気になった。

やっぱり、自分の足でここまで歩いてきたという線が妥当な所なのか。

考えたくはないが、夢遊病という可能性もあるかもしれない。

睡眠時遊行症、又は夢中遊行症。

僕の最後の担当医だった三島先生がしてくれた話によれば、ストレスや、睡眠時の興奮などによって発症したりするらしい。

ただし、先天的に、あらゆる物に対して恐怖を感じつつづける僕は、ストレスに対して多大な耐性がある。

正確には、許容量が人よりずっと多いという事なのだが。

そんな僕が、今更になって夢遊病だなんてあり得るのだろうか。気付いていなかった、なんて筈はない。

なんととっても僕には、常に互いの近くにいて見ている自称保護者が

「……姉……さん？」

おかしい。

いつもなら、こうして考え事をしている時に横から話し掛けてく

る璃尾が居ない。

……居ない？

姉さんが、いない？

「姉さんっ！！！！！」

2 .

いた。

姉さん居た。

『ふみゆ……どうしたの、理緒君？』

ふああつ、と欠伸をした璃緒の声は、僕の真上から聞こえてきた。

ふよーん、とか、ふいーん、みたいな擬音が付きそうなくらいに、

それはそれは見事な空中浮遊でございました。

『うーん……むにゃ……ねむねむ……』

姉から段々と色が薄れていき、遂には消えてしまう。

二度寝だった。

それも、僕の“中”に入ってきてまで。

もはや、向こうから出てくるまでは物理的な方法では起こせない。

……それら一連の動作を呆然とした顔で眺めていたであろう僕は、

「……良かった」と、思わずそう呟いた。

安堵や何とも言えない感情で胸がいつぱいになり、不覚にも目尻

が潤んできた。

ぶっっちゃけ、泣きそうな気持ちになった。

3 .

ようやく再起動をはたした僕は、取り敢えず辺りを見回す。割と綺麗に整備された路地裏は、月崎の物に間違いはない。

路地裏にここまでお金を掛けてるのは、多分この街くらいだ。

路地裏の魅力にとり憑かれた僕が言うのもなんだが、馬鹿だと思
う。

意味が分からない条令も多いと聞くと、そもそも、“四つの首都”とかいう構想も意味が分からない。

四つあるなら首都じゃないだろうに。

『重要拠点の分散による、伝染病の流行、テロ行為又は仮想敵国からの攻撃等による国防機能の麻痺に対する防衛策』。

建前は立派に聞こえるが、実際には、分散させたら首都としての機能が上手く働かなくなる筈だし、ダミーとして使うのなら四つは些か数が少なく、その為に街を三つ無駄に作る価値があるとも思えない。予算の無駄だ。

……というか、残った都市以外は切り捨てるつもりなのだろうか。埋め立てを繰り返して面積を増やした造成地の新東京を筆頭に、北海道地下を掘り進めた要塞状都市、日本海沖の洋上プラント、そしてここ、最小の月崎。

どこも面積が狭いから、戦術クラスの兵器を一箇所につき一つ使われたら、壊滅しても余りある被害。

こうもバラバラでは、防衛力も十分には行きわたらないし、爆弾でも使われたら、逆に周囲への被害が増える事は容易に予測できる。海の真ん中にポツンと造ったり、地下に掘り進めたりと努力らしき事はしているようだが、全くもって心許ない。

というか、そんなのはもはや首都ではないと思う。秘密基地か何かなのか？

爆弾で一カ所吹き飛ばしてハイ終わり、とはいかないのだ。

最悪、余りに呆気なさ過ぎて、実は全てダミーであり本当の首都は隠されている。なんて勘違いされたら、もはや目も当てられない。

これでまだ平和なのは、単純にここ最近、戦争が起きていないからだろう。

敵を作ったら、先陣きつてあの世へ……まるで笑えないジョークだ。

ただ、抑止力やら何やらは、ここ一世紀弱の平和を保たせてはい

る。しばらくは、戦争なんて起きそうもなかった。素人が予測できる事なのかは分からないが。

戦争で死なない為には、戦争が起きない現状を維持するしかない。それだけが、生き残る唯一の方法。

余りに“脆い”世界だ。

まあ、そんな現状でも、ここを離れられない僕のような人間を除いた住民達から、苦情は余り出ていない。

多分、信じたくないのだろう。

安全性が逆に損なわれている、とは。

深く考える事はやめて、建前を信じ、安全性が高まっていると思

い込もうとする。

羨ましい。

目も当てられないような物が、上手く巧妙に隠されているなら、それをわざわざ暴いてまで確認する事は無意味だ。

出口の無い密室には自分一人。そして置いてあるのは時限爆弾。

絶対に助かりようがない状態なら、そのタイムリミットを確認する事を、“幸福”と呼べるのだろうか。

……気にしたら、負けだ。現実と理想の乖離に悶え苦しむしかない。

僕にとって、いつそ身近にも思えるその在り方は……そう、まるで

「まあ、今は関係ないけどね」

いらぬ現状まで再確認してしまったが、取り敢えず差し当たっ

ての現状は理解した。

僕は今、月崎の路地裏にいる。

自分に見覚えのない路地裏があった事には驚いたが、そう広い街でもない。

場所を確認すれば、すぐにも帰れるだろう。

コッソ、コッソ、とコンクリートを靴が鳴らす音が路地裏に響いている。

ところで今さっき、“現状を理解した”と言ったが、“理解していた”と訂正しておく。

なぜなら今、行動を起こそうとした直後、眼前に現れた“黒い口ングゴートの二人組”によって、歩き出そうとした道を遮られたからだ。

高らかにコンクリートを鳴らすべき靴を、今の僕は履いていない。

「あ、侵入者さん発見ですっ。観念して下さいね？」

見知らぬ黒い少女と、黒い老人。

現状は、まるで理解不能。

続いて老人が口を開く。

「《仮想階段》が“二段目”、《井文》^{いふみ}。私の名乗りは、それで十分だろう？」

今、狩人が名乗りを挙げる。

外ならぬ獲物を前に、自らの得物を隠して。

4 .

五月二日のゴールデンウィーク初日。

確かに僕は、“彼等”と対峙していた。

「えーと……貴方達は……」

「随分と余裕だな。隠れるつもりもないらしい。現川うつつがわの娘が感知した反応の強さから見て、おそらく相手は相当の手練だ。援護する間宮。今回ばかりは私が前に出る」

「了解です隊長！」

「隊長じゃない」

「え……あの……」

口早に告げた老人に、了解を示す少女。
なんか、マズイ気がする。

直感に従って、百八十度反転し一直線に駆け出す。今日は平日だ。路地裏の清掃機械にばったりと出くわす事もないだろう。

だがしかし、手近な角を曲がろうとした瞬間に、背後から銃弾 銃弾！？ ……が飛んできてそれを阻んだ。

一直線な軌道のままに頬を掠めて、目の前のビルの外壁を砕いて穴を開ける。

「ッ……！」

意図せずして息を呑み、吸い込まれた空気が喉を短く鳴らす。

衝撃音と恐怖に思わず頬が引き攣り いや、引き攣るような痛みを感じる。

生温く頬を伝う、ぬめり気のある気持ちの悪い感覚。

「分かっているとは思うが、“足止め”だぞ？ 頭を狙ってどうする。まさか有り得ないとは思うが、万が一に運悪く当たったら、大事な敵の情報まで辺りにぶち撒ける事になる」

耳に入った声にゾツとして、止まった足をなんとか無理矢理に動かし、角に跳び込む。

背後の壁に続けざまに撃ち込まれ、壁が砕ける音がする。

この狭い空間での取り回しを考えれば、おそらく相手は拳銃を使っているのだろう。

立ち上がりながら顔に手をやれば、絵の具のようにべったりと手に付く少量の赤色の液体。

「痛っ……」

弾が掠った際に切れたらしい。引き千切^{ちぎ}られるような、削り取られるような感触を感じていたが、浅い切り傷のような裂傷だったらしい。

……血だ。

争い事とは無縁の生活に努めてきた為、最近はまるで見なかった赤色。

震える膝を叱咤する。

気を取り直し、姿勢を立て直して、再び走り出す。

確認の為に振り向けば、向こうは今、角を曲がった所だった。

逃げ切れるか？

既に息は切れ切れ、何キロも走ったように心臓は暴れ、足元は覚束ない。

意識は内界から遠ざかり、客観的に現状を確認しようと必死に思考を働かせる。

それでも、前に踏み出す二本の足だけは止めない。
立ち止まらない。

背中を急かすのは恐怖のみ。

それでもいい。

元よりこの身は

「っはあ……はあ……！」 近くにあつた交差点を止まらずに曲がると、目の前に迫る機械音。

「ッー！」

清掃用の無人車だ。

洗浄液を流しながら、道幅と丁度になるように機体前面に取り付けられた、回転するブラシ状のパーツが汚れを磨き、ゴミを表通りまで押し出して行く。

普段は毎週日曜日に行われているので、平日だと思って油断していた。

「しまった……ゴールデンウィーク……！」

失念していた。

連休初日の早朝。“祝日ならば問題はない”と判断されてもおかしくない。

僕は、事前の通知を確認していなかった。

全くもって運が悪い。

そして更に、この無人機械は、盗難防止やら悪戯対策やらで、結構頑丈に作られているらしい。

人が歩くような速度だが、ブラシと同じく前面に取り付けられた装甲板には威圧感がある。

本当に清掃車？

装甲車じゃなくて？

正面に近づいた僕をセンサー感知したのだろう、安全装置が働き、動きは静止する。

僕は、色々と悩んだ末に、

「う……ごめんなさいっ」

勢いのままに装甲板を蹴りつけ、真後ろに方向転換する。

脚にはしる痛みが、逆に先程より感覚を鮮明にする。交差点ま

で戻れば、黒コートの二人と鉢合わせる。

すかさず前に飛び込むように転がると、立っていた辺りでコンクリートが砕ける音が響く。

向こうは、素足の僕からは殆ど足音がしない為に不意を突かれたのか、その動きを鈍らせる。

反対に、予め予測出来ていた僕の方が、先に行く結果になった。

今度は運がいい。

清掃車は、大きなゴミを掃き出す必要があり、尚且つ小回りが利かない為、街の外周 路地裏の奥から、一直線に表通りまで向かうパターンで仕事をさせなければならぬ。

つまり、この一直線を真っ直ぐ走れば、表通りに入る事ができるのだ。

いくら銃を持っていたとしても、人混みに紛れられれば役には立

たないだろう。

後は、追いつかれるか逃げ切れるかの鬼ごっこ。

そして 見えた！

表と裏の境界、日常と非日常の境目。

いつもは自分から楽しみに来ている路地裏の持つ現実感のなさから、今、この時ばかりは逃げだしたかった。

残り数メートル。

再度放たれた銃弾が、足元で火花を散らしてコンクリートと共に爆ぜる。

僅か数歩。

躓きながらも足を動かし、光差す場所へ。

あと、一步。

そうして僕は、街中まで“逃げ切った”。

5 .

勢い余って表通りに飛び出した僕は、視線を首ごと左右に振って、隠られる人混みを探す。

だが、

「嘘……でしょう……？」

始めに感じたのは違和感だった。

自分の知識と照らし合わせれば どこか違う、何かが違う……
そんな感覚。

誰かに理由なく急かされているような、あるいはそれと知らずに何かの間違いを犯してしまった時のような、不安。

そして 続けざまの“絶望”。

「誰も、いない……？」

求めた人影は、されど影も形もなく、視界が捉える物は、捕らえ

ることのできない空虚ばかり。

人っ子一人いない不気味なメインストリートが、そこには広がっていた。

目論みは外れ、最後の希望は墜つえた。

希望には程遠い絶望。

絶望には事足りる希望。

頭の中に空白を割り込ませるには、充分すぎる。

だが、真に絶望したのはそこじゃない。僕の目の前に在ったのは紛れも無い

「僕の家だ」

間違いはない。

隣の家の表札は、《熊乃御堂ホノミヤウ》という珍しい苗字だし、近くにはいつも利用しているスーパーがある。そして今僕が出てきた見慣れない路地裏は 毎朝のように使っている道だった。

「ここ……僕の家だよ……？」

なのに、

「なんで家が公園になってるんだ（……………）
！？」

見知った道は、既に見知らぬ未知の迷宮と化していて、住み慣れた帰るべき場所は、さも当然であるかのように亡きものとなった。

……悪い夢に決まってる。

目が覚めたら自分は外に転がっているし、変な二人組に突然拳銃を撃ち込まれるし、何が何だか分からないうちに、裸足で転げ回るように逃げ回って。

他にも、建物が増えたり減ったり、いつの間にか道も何もかもがゴチャゴチャになっていて

極めつけには、あの“家”が無くなっている。あの人が残した意

思が……父さんが遺した遺志が……。

絶望。望み絶たれること。

あまりに脆い僕の意識は、ここで脆くも崩れさる筈だった。

だが

6 .

背筋を“恐怖”が這い回る。

直感的な防衛本能に引きずられ、無理矢理に意識を取り戻した僕は、感じる不快感きふくかんに思わずその場を跳び退く。

こちらの足を狙ったであろう弾丸は、容赦なく路地裏から突き刺さり、されどアスファルトを刺えくるに留まった。

薄暗い路地裏から、何かがつつすらと発光しているのが見て取れる。

「やっぱり、人を払はらっておいてもらって正解でしたねー。危つく、一般人を巻き込んでしまう所でした」

この人はいったい、何を言っているんだ？

「え……と……待ってくだ」

「民間人を盾にするか、人質にするつもりだったのか。どちらにせよ、許しがたいな。ここで止めさせてもらうぞ」

……ああ……。

「しかしまあ……加減してるとはいえ、後ろからの私の銃弾を見ないで避けるなんて……井文さんレベルじゃないですか？ 正直言って訓練受けてなかったら、怖すぎて脚が震えちゃってます……」

ああ……。

もう、いい加減にしてくれ。

話なんて、通じていないじゃあないか。

普通なら、この状況で反論なんて、恐怖が勝って出来るはずが無い。

初めから、話し合いをする余地などないのか。

それとも彼らとは、使っている言語が違うのか？

やめろ、おかしいのは、僕じゃないだろう。

それともまた、僕が間違っていると言うのか。

また僕の間違いだと言うつもりなのか(……………)

……………。

何処をどう間違えたというのだ？

解らない。判らない。分からない。

全くわからない。

本当に 本当に僕なのか？

あの時と同じように(……………)?

有り得ない、そんな、僕は、僕は、僕はボクはぼくはボクハ

僕は……………ッ!!!!!!

「　　っああああああッ!!!!!!!!!!」

「　　ひっ……………!!」

「下がれっ、間宮ッ!!」

嫌だ。

嫌だ!

嫌だッ!!

逃げ出そう。

とにかく、遠くへ。

「こんな所は……………僕の知ってる世界じゃない　　ッ!!」

決死の逃走劇を演じた後の疲労など、まるでないと言わんばかり

に勢いよく立ち上がると、先程とは別の路地裏に、何かに弾かれたように飛び込み、再び走り出す。

「うん、決めた。今から本気出す」

此処から先は“逃走劇”ではなく“逃避行”だ。

逃走なんて苦手だが、逃避なら大得意。

どこまで行っても逃げ切れないから、どこまで行っても逃げようとした。

「この世の全てから逃避し続けた僕が、たかだか二人に立ち向かうなんて事、ある筈ないだろう（・・・・・・）」？

この身に刻まれた“臆病さ”と“防衛反応”。

今は、その為だけに使わせてもらう。

最短距離の“コ”の字形に走って戻ってくると、何とも運の良い事に靴屋を見つけた。

昨日までのこの場所にはなかった店。

僕の世界とは、決定的に絶対的に致命的な異物。

だが、そんな事は微塵も考慮に入れない。

これは逃避だ。

嫌なモノ全てから逃げる為の。

僕が認めたくない事を、わざわざ認めてやる必要などない。

裏口に積まれている廃棄品らしき靴を躊躇いなく履いて、再び表通りに駆け戻る。道沿いに少し走ってから、ジグザグになるように路地裏へ入る。

次の角は左へ。その次は右へ。

自分が迷うのは考慮の外。むしろ、あらゆる考慮を今は考慮して
いない。

現実逃避は、癩癩を起こした子供と同じ。

思考を埋め尽くすのは拒絶のみ。

逃げたいから逃げているだけで、考えなんて他にない。

だからこそ、逃げる為には何だって出来る。何だってやってやる。
両刃どころか脆刃と呼ぶのが妥当な時間稼ぎ。

作った時間と思考を全て、現状維持に費やす。

逃げるだけでは解決しない問題に当たって、それでも逃げるのが僕の最終手段。

現実を受け入れる為、末路を呑み下す為の“心構え”。

自分以外の全てを拒絶する事が、自分以外の全てを受け入れる事と同じだと気付いたのは、一体いつだったのか。

人間一人と世界の全てが釣り合うのなら、人間一人を捨てるだけで、世界の全てが昇華する、と。

あと僅かで、向こうはこちらを捕捉するだろう。

都合のいい夢は、もう終わり。

それさえ終われば、僕は

『何もかも拒絶して、何もかも受け入れる。追いかけてきたって、逃げてなんかやれない　　！！』

《T o b e c o n t i n u e d 》

第三話 『現実置換

- A l t e r n a t i v e o f a l t e r n a t i v e

急によく分からない設定が出てきました。

この作品の主人公には、感情移入出来ない可能性が高いですね。僕でも厳しいです。

そんな主人公の黒澄理緒は、恐怖症を理由にあらゆる物事に対して一線を引いている為、あらゆる物事の本質を客観的に見る事ができる人間です。

全てに平等な感情を抱き、しかしそれでいて全てをありのままに認識し、仕方なしに受け入れられる性格。

これからも、この人間としてちょっとアレな主人公をよろしくお願ひします。

第四話 『既知との遭遇』 - Unknown encounter - (前書き)

プロローグ後編からの続きです

1 .

寒気のような感覚に目が覚めた。

辺りがだいぶ暗い為に、いまいち現在の時間が分からない。

この自室まで朝日が差し込まないのは不満ではあるが、構造上の問題なのだから仕方がない。

転がったまま重い^{まぶた}瞼を擦り、ゆっくりと開くと、

「……知らない天井だ」

良かった、今回は天井あった。

……何故か今、デジャヴ的な何かを感じた。

思い出しては溜息が出るが、一昨日は散々な目にあった。

追いかけられたり、逃げたり、追いかけられたり、捕まったり。

だが、今となっては身体に痛みはなく、どこをどう見ても傷一つすらなかった。

まあそんな事はともかくとして、心底喜ばしい事に、先日僕に掛けられた疑いが晴れた。

だが、いかにして住所不定の僕が無罪放免になり、このような部屋まで与えてもらって、恥ずかしながらも大見栄きった決死の覚悟が無駄になったのかを語れるなら、話が無駄に長くなってしまふ事を考慮しなければならぬだろう。

まずは、この寝ぼすけを起こして朝食でも作るうか。

「おはよう、姉さん」

話は、それからゆっくりと。

五月二日のゴールデンウィーク。

遂に、最後の路地裏逃走劇から無事生還した僕は、今回の一件について詳しく聞く為、彼らの拠点へ向かう事になった。

となれば当然、道すがら、何故僕が襲われたのかを聞いてみるぐらいの事にはなるだろう。

なんでも彼らは、街中に突如として現れた膨大なエネルギーを察知。敵の襲来と推測して、目的を聞き出そうとした結果が昨日のアレ。

以上、説明終わり。

「はい？」

ええ、分かりませんとも。全然。

「ダメですよ、井文さん。多分先輩は、そういう事が常識じゃない“世界”からいらっしやっただと思います。じゃないと、このクラス“資質”が手付かずで残っている説明がつかないです」

「資質？ 世界？ 何の事だろうか。」

「フム……あの黄朽葉きくぢばの申し子であるお前が言つのならそうなのだろうな」

「……………」

「そうなのだろうな……って、そんないい加減でどうするんですかっ！ 井文さんは、黄朽葉先生よりも前から居た、最初期の古参メンバーの一人なんでしょう？ 幹部がそんなんで良いんですか!？」

「なんとこの老人、社長じゃなくて幹部だったらしい。いや、どこ
の幹部かも分からないけど。」

「そうは言われてもだな、私は実行班の人間で……………」

「実行犯だか
静かな湖畔だか知りませんが、ウチは一応研究機関なんですから！」

「……………」

ちなみに、さっきから無言なのが僕。

「だが、我々の仲間にお前以上に知識が豊富な奴はおらんぞ？ 黄朽葉を除いて、だが」

犯罪者扱いに気付いたのか眉を僅かにしかめながら、

「先生と比べないで下さい。あの人は、今すぐゴールドスリープさせて百年後に解凍しても、問題無く進歩した文明に適應できる頭の持ち主ですよ？」

「えと……あの、そろそろ説明の方を……」

流石に聞くべき事は聞いておかないとマズイ。

なぜなら、必ずしも彼らのリーダーが善人とは限らないからだ。

何が待ち受けるのか分からない以上、最悪でも、自分の立場くらいは確認しておく必要がある。

今までの会話で掴めたのは二つ。

ひとつ、この老人はやや天然ボケな老人である事。

“な”は抜かない。失礼だから。

まあ、重要なのは後の一つ。

『研究機関』。

今までの井文さんの言葉を総合すると、組織とやらがこれに当たるらしい。

おそらく、その組織とやらの名前は

「済まなかった。詳しい説明は、“中”でする事にしよう っと、

着いたぞ」目の前にそびえ立つのは、天を突くバベルの塔。

逃走中に発見した、超々高層ビル。

「どうやったらこんな高さ……」

維持できるんだ、とは聞けなかった。

入口の看板に書かれた文字は《トラッシュバンカー》。

このビルの名前らしい。

入口をくぐると、いたって普通のオフィスビルといった内装だった。

奥に進み、無数に並ぶエレベーターの、入口から一番遠い一つに乗る。

途中で見た案内板が正しいなら、ここの建物は、生活に必要な施設があらゆる揃っているらしく、一生を殆ど外に出ず暮らせると思う。

まったく、馬鹿げた建物だ。

エレベーターに乗り込むと、井文さんが階数を告げる。

金属の箱の中に機械音声が響き、身体が不安定になる感覚を感じる。

「音声認識ですか……何となく凄いですけど、人が混むと不便じゃありませんか？」

皆が皆、乗る度にいちいち声を上げるのか？

「大丈夫ですよ、先輩」

……出来れば、先輩って呼ぶのは勘弁してくれないかなあ。

「お断り致しますっ」

即答ですか。

「……で、大丈夫って、何がですか？」

「あれ、気付きませんでした？」

気付く？ という事は、此処に来るまでの話か……。

「あ 人が妙に少なかった（……………）ような……………」

「さっすが先輩ですっ。何を隠そうこのビル、外から入って来る人間も、外に出てくる人間も滅多にいないんです」

うわ、それでいいんだろうか。

「それにこのシステム、試作品だったりするんです」

「試作品？」

いったいどの辺りが？

「フッフッフ……例えば、まだ念入りの調整が足りないのです、あらかじめ登録された声でもない限りは（……………）

……………（……………）、一部の階数の指定を認識できない（……………）……………（……………）、とかですよ」

成る程、これなら、初めて来た人間には何階まであるかも分から

ないし、場所を掴ませづらくしやすい。

お仲間以外は同じ階層にすら近づけさせない。

エレベーターホールに大きく貼ってあった“調整中”の文字は、
そういう事だったのか。

「着いたぞ、ここが 《仮想階段》の本部だ」

井文さんに続いて降りる僕と間宮ちゃん。

今出てきたのは真っ直ぐな廊下の端で、反対側には部屋のドアが
一つ。

井文さんはそこに向かっていき、ノックをした。

「私だ。所長は居るか？」

「え、所長？」

なんと、いきなりお偉方との面会らしい。不覚にも、緊張してき
た。

「どうぞ。入ってきて下さい」

聞こえてきたのは若い女性の声。

まるで、つい最近まで少女だったかのように、若い声だった。

「失礼する」

「失礼しますっ」

二人が先に入っていったので、「失礼します……」僕も続く事に
した。

部屋は窓から町並みを一望でき、内装は内装でまさしく社長室の
ようだった。

窓の外を向いていた椅子がぐるりとこちらを向き、声のイメージ
通りで、歳の頃は大学生くらい、メガネをかけたスーツ姿の女性が、
優しいに微笑みかけてきた。

おっとりとした雰囲気、緩んだ目の端を見れば、心優しい内気
な文学少女が成長したような姿に見える。

メガネは形が丸い物で、知的というよりも、ややかわいらしさが
勝っている。

中でも一番目を引くのは、ロングヘアというべきその長い髪が、

綺麗な若草色に染められている事だった。

「お帰りなさい、二人とも。大丈夫だった？」

彼らを労っている所を見ると、彼女が所長という事でいいのだろうか。

言葉遣いからも、偉そうな雰囲気がるでしない。

「ああ、間宮に怪我はさせてない」

「そう、良かった……貴方も、無事で何よりです……。あら？ そちらの方はどなたですか？」

「初めまして、黒澄理緒といいます」

「……彼は目標地点で倒れていた。現状にはまるで心当たりがないらしい」

「ええと、つまり彼は侵入が目的じゃなくて……」

「巻き込まれて偶然飛ばされてきたと思いき、我々の保護対象ですつ、所長」

びしつ、と敬礼する間宮さん。不真面目じゃないのか？

取り敢えずその、保護とか、侵入つてのが何なのか分からなかったので、説明を求めてみる。

「先輩……じゃなかった、黒澄さんは、《特異能力》も《世界の仕組み》もしらない世界から来たみたいなんですっ」

「帰れるめどがたっていない以上は、説明しておいてやるべきだと思っうが？」

……なんか、井文さん達にはこれからもお世話になりそうな気がするな……。

つて、帰れるめど？

「そうでしたか……。そうですね、分かりました。ここにいる三人で、彼に現状を説明しましょう」

なにやら重々しく頷いてから、彼女 つきした みひと 《月下美人》所長は、「黒澄君、こちらへ」僕をデスクを挟んだ正面まで呼び、改めて僕に向き合ってから尋ねる。

右と左では、他の二人がこちらを見ている。

「では黒澄君、心の準備はいいですか？」

解答は既に言うまでもなく、この話は必ず聞かなければならないと直感的に感じたし、路地裏での、全てを受け入れる心構えはまだ保っている。

逃げられない上に、逃げるつもりもない。

そうして僕は、ゆっくりと縦に頷いた。

3 .

新歴二十五年、一人の学者が、とある論文を発表した。

いわく、『世界とは、可能性という力そのものによって構成されている』。

所長と呼ばれた彼女、月下美人が口を開く。

「『あるいは、可能性の流れその物を、我々は世界と呼んでいるのだ』、でしたでしょうか」

「つまり、それは」

「はい、先輩。この世に存在するって事は、そのエネルギーを使って、『今ここに在る可能性』を作り出している、って事なんです。

イメージとしては、電子機器なんかのメモリですね。容量の一部を占めることで、初めてそこに存在できるんです」

その論文によれば、『世界』は、“可能性の河”に例えられるのだという。

あらゆる行動には、可能性が伴う。

自分が声を出している可能性、手を握る可能性、歩く可能性、何かについて思考している可能性など。

“可能性が無い事”は起きえない。

ならば、事象が起きた以上は、可能性が消費されていなければならない。

絶えず形を変えて流れ続ける可能性、それを人は時間と呼んだ。時間とは変化。ならば、変化こそが時間なのだろう。

「そして、河が幾つにも分かれたるように、世界もいくつもの形がある。物理法則からして別物の“異界”、よく似てはいるものの、分岐点からの歴史が異なる“並行世界”。これら二つの特性が合わさった“平行世界”の、大きく分けて三つだ」

それが、《世界》。

「可能性の力とは、無色の力の固まりです。方向性を持たない、万能かつ不安定なエネルギー！。使い方は単純。方向性を持たせてやればいいんですが……」

生物は、本能的に無意識的に、精神的な活動に伴って使用していて、意識的には感知すらできないので、万能であるのに自由に扱える訳ではないらしい。

可能性を消費する機能は、主に生き物の精神が担う。

ただし、中には生れつきに強力かつ実用的な方向性で指向性を干渉できる人間がいるらしい。

「それが、《特異能力者》。進化した人類として、私の率いる《仮想階段》が研究している対象です」

どれもこれも、実感も現実感も感じられない、想像の中の話のよう。

「先輩の話聞くに、おそらくは七つの大きな異界、《七大世界》のうち“生命の蒼”《BLUE EARTH》、つまりこの世界の並行世界からいらっしやっただけでしょう。大きな違いは一つ。“

「可能性因子^{エーテル}」の存在が、公に発表されていたか否か。ひいては、それが発見された時期も違ったのかもしれない」

しかしその言葉だけが、確かな実体を伴って僕の心に突き刺さった。

エーテル、エーテル、エーテル。

幾度となく反芻して何度となく咀嚼した。

「そういった事と今までまるで関係ない世界に居た貴方には、信じるとか信じないとかそういうレベルの話じゃないってというのは理解できるけど……」

間違いない

「分かりました。その話を信じます」

「え……!？」

何を驚いた顔をしているのだろうか。

信じる……信じるさ、信じるしかないだろう？

確かに。信じるとか信じないとかという問題じゃない。

ただの、事実だ。

あの人の手掛かり。

父親の手掛かり。

父さんの手掛かり。

さつきから何も返事がないって事は、姉さんは反対しないって事だろう。「僕の父さんは、エーテルという未知のエネルギーを研究していました」

「え？ でも、君の世界では“可能性エネルギー”っていう概念はまだ……」

緑髪の女性が首を傾げる。

「父の言う“エーテル”と貴方がたの言う“可能性因子”が同じ物かは分かりません。ただし、父は実験の失敗によって街一つと共に消滅しました」

「そんな……」

今度は誰の声だったか分からない。

もしかしたら、皆の声だったかもしれないし、自分の心の中から響いてきた声だったのかもしれない。

ただ、また皆が驚いた目をしたのを見て、優しい人達だと思った。

「ですが、可能性の力とは、あらゆる現象を起こし得る万能のエネルギーなのでしょう？」

所長と呼ばれた女性が答える。

「あくまでも理論上は、ですよ？ そんな不可思議な形で出力されるより、ただの高エネルギーが消し飛ばしたと言われた方がいえ、ごめんなさい、こんな事……」

「構いません。ですが、僕は世界を越えました（……………）」

零から小数点以下、零々零々零々零々零々零々零々零々一パーセント。それだけでも十分。

「確率の話で、可能性の（…………）話で良いんです」

「成る程、お前は」

「はい。どこかの世界に居るかもしれない、父を探します」

「もし万が一、世界から世界へと飛んでいたとしても、人が生きて行ける世界にたどり着くのは更に稀だぞ……と、すまないな。やはり君は、そんな事はどうでもいいのだろう？」

「ええ、ゼロでないなら、探す価値はあるでしょう？ 父親なんです。確率が低い、で諦めていい問題ではないんですよ」

「先輩……」

会って間もない僕に対して、心配するような眼差しでこちらを見ってくる間宮ちゃんは、本当に良い子なのだろう。それこそ、銃弾を撃ち込んできたのが嘘みたいな程には、優しい子だ。

そして……少しの間黙っていた翠色みどりいろの所長が、急にとんでもない提案を持ち掛けてきた。

「ねえ、黒澄君。貴方、私達の所で　この《仮想階段》で、働いてみる気はない？」

「お断りします」

取り敢えず即答。間宮ちゃんの直伝です。

「ええと……どうして、かしら？」

研究体にされるんじゃないかとか、ここがどういう組織なのか分からないとか、研究所の仕事なんて僕にはできないんじゃないかとか、そういう話は置いておくとしてもだ。

「父を捜すためには、枷になる可能性が高いんです。少なくとも、組織に属せば自由には動けなくなる。だったら　」

だったら、何だと言っただけ？

僕はまだこの所長を、ただのお人よしだと勘違いしていた。

「でもね、黒澄君。貴方、家はどうするのかしら？」

「……うあ」

忘れてた。

忘れてたでは済まされないぐらいに忘れていた。

「ろくにお金も持っていないのでしょうか？　ウチなら、働きに応じた日給出せますけれど」

むー。

悩む。悩む。悩む。

だけど

「あの……」

「仕方なかったとはいえ、お店の靴、勝手に持ち出して来ちゃったのね。棄ててあるように見えても、“勝手に”はマズイわよね？」

何とかしておくのは私達の仕事……まあ、無償働ただきなんだけどねー、と先程までとは違ってかわって楽しんで笑う所長。

やっぱりこの人、最悪に“性質たちの悪い”お人よしだ　！！

「清掃車を故意に妨害するのはー、犯罪だよねー？」「ごめんなさいお願いします働かせて下さい！！」

冷や汗かくとかいう段階を飛び越え、ダラダラと汗が顔を伝う。

あはは……漫画みたい。
洒落にはならないが。

「よろしい」

……今後の身の振り方を考える必要があるらしい。どうもこの人は苦手だ。

「むふふ……よっしゃ、父親を探す健気なシヨタ確保^{ゲット}……」
「え？」

疑問の声をあげたのは間宮ちゃん。

机の向こうで何やらひそひそ話をしていたらしい。

彼女はすっ（・・）と立ち上がると、

「冗談です」

……何が？

しばらく今後についての話を聞いた後、所長室を退室した。

井文さんの案内で与えられた自室に向かっていると、彼が話し掛けてきた。

「アイツとは昔からの付き合いでな、小さい頃、両親に捨てられて身寄りを無くしたのを私が拾って育てた」

月下所長の話らしかった。

しかし、そんな事を僕なんかに言うのか？ 口の固そうなこの人が。

その旨をそれとなく伝えてみると、

「買い被り過ぎだと思うがな……まあ言ってしまうえば、あの子は君には何か通じる物を感じたらしい。目を見れば分かる。十年近い付き合いの、家族のような物だ。私の自惚れでなければ、間違いはない」

「僕なんかとあの人か、ですか？」

確かに、目を見れば分かることもある。

だが、今日会ったばかりの僕に分かったのは、井文さんとは違う事。

あの人は、強い。

探せばどこにでもいるような女性に見えて、しかし誰よりも苦しい道を歩んできた人の目だった。

そもそもが、一歩間違えば屍しかばねが転がるようなこの世界で、重大な責任者を務めている人間だ。

それでも尚、あれだけのまとも過ぎる人格を保っていられるのは、彼女の精神が強靱だからだろう。

歪いびつにもならず、頑なにもならず。

「言っただろう、似ていると。余り卑下するな。私の娘を貶おとしめないでくれ」

「はい！」

間違いない、この人はこの人でお人よしだ。

今までの会話も、僕を励ます為に話してくれたのかもしれないかった。

それと、と続ける彼。

「仮想階段の目的である『妥協なき進化』と、研究者が研究の対象にしているのが、自分自身だという話はさっき聞いたな？」

首だけで頷く。

僕たちは、いつの間にか立ち止まっていた。

「この組織の所長を務めるという事は、そのトップである“一段目を冠するという事だ。つまり「

ある意味では、月下美人つきしたみびとこそが、“最も進化した人類”であると言えるかもしれない。

「そういう事だ。親バカでもなんでもなく、な。……さあ、行くぞ」再び歩き出した井文さんの背中を眺めて、先程の部屋での会話を思い出した。

月下所長は、初め僕の事を知らないようだった。

勿論、あの部屋での会話の途中には知る由もなく、演技でもなく

本当に知らなかったのだとは思う。

では、なぜ。

なぜ彼女は、僕の行動の詳細を知っていた？

井文さんや間宮ちゃんから聞いた？

そんな訳がない。

清掃車を蹴りつけた事までは、彼ら二人も知らない筈だ。

油断はしていなかったたので、途中で報告が入ったら見逃す筈もない。

そう　まるで、人の心でも読んだかのように。

まさしくそれは、過去を読んだかのように。

そしてあらかじめ、未来を読んでいたかのように。

「……月下美人。《仮想階段》の“一段目”にして“最も先を行者”、か……」

僕は、井文さんを見失わないように急いで歩き始めた。

4 .

そんなこんなで、昨日は部屋に案内され、その後別室でよく分からない“検査”をさせられた。

検査といっても、このビルのとある部屋に居る《特異能力者》らしい少女に会って、話して、手を握られたくらいだ。

それだけで判別できる異能の持ち主らしい。

これについては今は詳しく語らない。

昨日の今日では語れないような恥ずかしいエピソードになってしまうので、いずれその辺りをぼやかして話そうと思う。

検査の結果、僕の適正は　不明。

「どういう事ですか？」

僕が理解しかねて聞いてみると、所長が、「ええ、不明よ」とま

たまた不明な事を言い返してきた。

「ですから」

「まず間違いなく、能力はある筈よ。適性自体は間違いなくあります」

「……じゃあ、どうして」「方向性がね、分からないのよ。この世界に來た時から感知されてる力の大きさを見れば、稀にみる程の逸材なのは間違いはないんだけど……」

話によれば、なんでも、特異能力というのは、エーテルに方向性を与える能力なんだそうだ。

それが僕の場合、判然としないらしい。巨大な燃料タンクと強力なブースターがついているのは分かるが、どちら向きについているのかがイマイチわからない。

「それとね、一応、ウチの組織はとある条件を満たした能力者でないと、所属できないのよね」

「え？」

初耳ですよ、そんなの。

「《仮想階段》の目的は、人類という種族の進化。つまり、先天的な体質としての特異能力者しか受け入れてないの」

という事は、

「……僕は」

「“体系化された特異性はもはや技術であり、特異能力とは呼称しない”って、私達は考えるんだけど。……何も学び修めていないのに能力が検知されるといふ事は、貴方は先天的な　つまり、“特異能力者”である事は間違いのないわ。安心してね」

この人、『どちらにしても、立場に物言わせて無理矢理仲間にするつもりだったんだけどね』とか言い始めた。

それは職権乱用ですよ。

……まったく……本当に人がいい……。

「……ありがとうございます」

「お気になさらず。あ、という訳で、今度からは井文さんや雪貴と

一緒に出撃してもらおうから」

なんですって？

僕が？

井文さんや間宮ちゃんと一緒に？

「死にたく、ないです……っ！」

「いやいやいやいや、死なないよ？ 死なないからね？」

「……えう？」

「……それは、素なのね……」
うっ。

せめて説明をしてほしい。

いくらなんでも、銃弾飛び交う中でやっていける程に僕は強くないのだから。

……それにしても何故か最近、感情の揺れ幅がやや大きくなってきた気がする。

不安やらをこんな風にストレスとして受け止める性格じゃなかった筈だ。

「貴方の為に情報を集めてはみますけれど、不安でしょうし、完全には信用できないでしょう？」

「ええ、まあ正直言えば、ですが」

それを自分から言い出す辺りは、ある程度信用に値すると思うけれど。

普通なら、誰だって自分の痛い所を自分で突くのは嫌な筈だから。「ふふ、素直ですね。そういう訳なので、自分でも直接探しに行きたいんじゃない？ 彼らなら、この世界や、たまに他の世界まで出張するから。それに、特異能力も実際に使えるようになる為には、実践の中で感覚を掴まないとね。発現するまではまるで分からないから……」

「分かりました。何から何まで、お世話になります」「言ったでしょう？ 気にしないで、って。“特異能力者の保護”なんていう自分勝手な理由なんだから、ありがたがられ過ぎても逆に申し訳ない

ですしね」

そうして僕は、僕の心からどこかズレた、この世界で生きていく事を決めたのだった。

目的を果たす、その日までは。

▣ 葛藤はなかった。未練もなかった。何もなかった。後はただ、進むだけ ▣

《to be continued》

第五話 『待機状態の邂逅』

1 .

僕 黒澄理緒の朝は早い。

ゴールドデンウィーク二日目の五月三日。

何やら色々あったような気がする昨日も終わり、今は寝ぼすけな姉の璃尾が起き出してくるまでに、朝食を作っている所だ。

無論、実体のない彼女は、食事など必要としないし、摂ることも出来ない。

それでも、家で食事をする時は、必ず家族全員で食事をする事になっっている。

姉の事は生まれてこの方、未だ誰にも話したことはない。父親も含めてだ。

それを誰かに話すこともないだろうし、そんなつもりもない。

秘密は、僕があのお世まで持って行くつもりだ。

この異常性が、何か特異能力の手掛かりになるかもしれないとは考えたが、それはそこまで。

誰かに話すぐらいなら、それぐらいは切り捨ててみせる。

例えばそれが、父さんを切り捨てる事になるとしても。

最近では、食事をしたくとも出来ない姉に気を遣う事もなくなってきたているが、それでも食事は一緒に囲む。

物心ついた頃からの家族なのだ。気まずさや申し訳なさなどは既がない。

「強がりでもなくて、事実本人が一番気にしてないんだよなあ……」
気を遣わせまいとしている訳でもなし。

本当に気にしていないようであった。

「よーし、味噌汁完成ー。あとは……ん？」

なんだコレ？

テーブルの上に置かれた荷物一式。

私服や家具など、昨日手配してもらった生活用品などが並ぶ。それはいい。

ただ、その中に一つだけ、見た感じ怪しい黒い箱がテーブルの上にあった。

もう一度言いたい。

「なんだろ、これ？」

訝しみながらも試しに手に取って見てみる。

と、

「あれ？ これ、底がないのか……」

持ち上げた時に殆ど重さを感じなかったので、不審に思いテーブルを見れば、そこに置いてあるのは

(携帯電話、だね)

「あ、姉さん。おはようございます」

(はい、おはようございます)

後ろから話し掛けてきたのはパジャマ姿の姉だった。

着替えなんかどこにもなくても、気がつくとも服装が変わっているのが璃尾という人間だ。仕組みは分からない。実体がないので、もしかしたら、本人の気の持ち様でどうとでもなるのかもしれないなかった。

改めて、テーブルの上を見れば、置いてあるのはなんて事ない、ただの黒い折り畳み式の携帯電話だった。

いや、“ただの”とは言い難いか。

何せデザインは金属的に角張っていて、いかにも機械然とした雰囲気がある。

そして、僕はこのようなデザインの携帯電話を知らないのだから。「ん？ 紙が置いてある……」

なにになに……

この《仮想階段》特注の連絡用電話は支給品です。肌身離さ

ず持ち歩いて下さい。登録されている番号に電話くださいな。あな
たの月下美人より

……あの人、絶対ふざけてるな。

取り敢えず、プッシュ。

二回ほどコールが鳴った後、まるで待ち構えていたかのような夕
イミングで電話がとられた。

『もしもし？ 見つけてくれたのね？』

『ええ、まあ。電話するようにと書いてありましたので
うーん、と電話口から聞こえてきて。』

『黒澄君。貴方には、学校に通って貰います』

……え？

『それって、どういう事ですか!?!』

『間宮ちゃんとかはね、仕事のない普段は、学園に通ってるのよ』
学園？

少し疑問に思う事があったが、話の腰を折る程でもないと思った
ので、先に進む。

『それで、僕にも通えと？ 確かにありがたい話ではあるんですが

……本当に大丈夫なんですか？』

問題は一つではなく山積みなのだ。

『確かに戸籍も何もないけれど、連休明けまでには用意できると思
うし……』

『あ、いえ、それもあるんですが、そうではなくて。昨日の話なん
ですが……どうでしたか？』

所長室で話した内の懸案事項の一つ。

それは、この世界が並行世界である可能性の“根拠”を探す事。

『それなただけだね、君の言った名前の中で、『篠崎錐斗』と『
琴塚蓮』っていう二人だけは、この学校には居なかった。それど
ろか』

一端間を置き、

『この街には、『黒澄理緒』自体が居ない事になってる』

反応はしない。

僕は黙り込んで、思考している。

自分や、自分と人間関係の深い人物がいない。

「素人考えですけど、多分、僕がいないからなんでしょうか」

『多分、世界の違いの所為もあると思うの』

話によれば、この世界の月崎には可能性因子研究と関連した区域もある為、僕の世界に比べて人が増えたり減ったりしたのだろう、という事だった。

一般的には、エーテルを嫌う人間もいるらしい。

理由は人それぞれだが、“神を侮辱している”だとか、“特異能力者に対する劣等感”なんてのもあるそうだ。

所長いわく、そういった事や、他の事でも反感をかっていている組織らしいので、自分の身の上は隠すようにとのお話。

「了承しました。では、お願いします」

ああ、それと。

「月下所長」

『ん、なあに？』

「なんかキヤラ変わってませんか？」

昨日お会いした時はもつと真面目だったと感じたんですが。

『……いいんです。仕事用の顔とそれ以外は別物なんですから』

トップに立つ人間に、はじめ（・・・）がつきすぎているのもどうかと思うが。

いやそもそも、今は仕事中じゃないのか？

まあ、僕には知る由もない事だろう。敢えて口出しするつもりもない。

「分かりました。では、失礼します」

『ええ、それじゃあ』

さっさと切ってしまう僕。

どうもあの人の考えている事は読めない。

だからという訳ではないのだが、何と無く苦手だ。

少し早く切りすぎたかもしれない。失礼だったかな。

間宮ちゃんが購入してきたらしい白地のシャツと黒いパーカー。上から羽織ったパーカーのポケットに、黒い携帯を突っ込んだ

「ああ、それとね、黒澄君」

「うわぁ！」

真後ろから（……）聞こえてきた月下所長の声に、心臓が飛び出る所だった。

「なっ　　なななななんでこんな所にいるんですかっ!？」

「居てはいけませんか？」

良い訳ないでしょう。

しかも味噌汁飲んでるし。

「あの、試食品コーナーのノリで人の家の朝食を摘まんでもらえませんか……」

「いいじゃない、美味しいし」

良くないよ……いや全然良くないよ？

この人はわざわざ何しにきたのか。

さっきの電話は全然無駄なんじゃないのか。

いつの間に人の家に侵入したのか。

何を言いたいかとかいうより、もはや言いたい事しかない。

つまるところ、未だ現状を理解出来ていないのだろう。

「一つ、気になる事が有ってね」

「気になる事……?」

「貴方の事よ、黒澄君。　　貴方、今まで一度も、元の世界に帰る方法を聞かなかったから」

……ああ、成る程。

それは確かに、不審だろうか。

「……すいません、父を探す事で頭が一杯になってしまったのかも
しれません……」

彼女は、怪訝な目で僕を見た後、「……まあいいわ、貴方がそれで良いのなら」と、そう呟いた。

「帰るためには、現在修理中の世界を移動する為の装置が必要になります。ですが、その施設は数日前、何者かの手によって爆破されています」

井文さんの言っていた、“帰れる目度”。

そういう意味だったのか……。

「……場所は？」

「月崎郊外。修理の完了は一ヶ月は先になると思うわ……殆ど建て直してみたいなものよ」

「まあ、第一目標は父親の搜索ですから、僕はしばらくは使いませぬね」

「そう、分かりました。それから」

急に真面目な雰囲気で見つめてくる赤い瞳。

「実はね、貴方に謝っておこうと思って」

「僕に、ですか？」

「そう、仮想階段の一同を代表して、寄ってたかって追い回した事を謝罪させていただきます」

髪を床の方に垂らして深々と頭を下げる彼女に、逆に僕の方が色々とし訳ない気分になってきた。

「……いえ、分かりました。余り気にしないでください。これからもよろしくお願いします」

本当の所を言えば、僕が受け入れたとしても、璃尾が許すかは別物なのだが。

「ええ、そういつてもらえるなら、こちらこそ」

これは多分、中身の希薄な会話。

薄弱な対話。

真実味の希釈度を間違えたような話し合いだ。

まだどちらか、或いは両方に不信が残っている事実。

確かに、出会って一日では、流石に信用しきるのは難しいが。

「時間でしか解決できない類の問題だよね……」

だが、それでも意味は確かにあった。

歩み寄る行為に意味があるかは分からない。

でも、歩み寄ろうとする気持ちには、意味があるんじゃないかな。

月下所長を見送った、その玄関先で考えていた事だった。

あの人は、去って行く時に「明日からは訓練なんかをしてもらう事になります」と言い残していた。

面倒事が色々増え過ぎたので、現状を整理する必要があるかもしれない。

リビングに戻れば、ソファアの上で璃尾がすやすやと寝ていた。

なぜだろう。最近姉は寝てばかりだ。少し前まではここまでじゃなかったのに。

この世界に来た時に、何か悪影響でも受けたんじゃないや……いや、寝てるだけだしな。

食事の支度をする為にキッチンに戻る……と、

「あ、お魚焦げてる……」　なんか、少し目尻が潤んだ気がした。

2 .

そう言えば、昨日はあの妙な夢を見なかった。

まあ大した問題ではないし、今はその事に感謝こそすれ、困る事は何も無い。

ところで、メモ機能が殊の外に便利だった。

というか、スケジュール管理にも使えそうなくらい高機能だとは思わなかった。

勿論スケジュール機能は別で、そちらはそちらで非常に優秀だ。

今、僕が何をしているかというところ、支給されている携帯のメモ機能を使って、現状の整理を行っている最中である。

「……よし、こんな所かな」

現在地点…… “生命の蒼” 《BLUE EARTH》。

目標地点…… 元の世界（名称不明）

手段…… フロンティアライン社製の世界移動用装置の復旧。

第一目的…… 父親の捜索。

第二目的…… 目標地点への、安全を揺るがさない到達。

大前提…… 璃尾の隠匿。

目的達成の手段…… 井文、又は間宮に随伴しての各世界への出撃等。

達成手段の前提…… 自らの特異能力を自覚し、扱えるようになること。

前提を得る為に…… 五月四日からの“訓練”を受ける。

生活環境…… 《仮想階段》からの保護後に所属している。偽装の為、学園に通うこと。その他の衣食住は、《仮想階段》の仕事をこなす事により支給される。

懸案事項…… 《仮想階段》からの信頼の確保。自らの所属の隠匿。尚、姉の不調にも留意。

といった具合か。

何と言うか、

「ただのスケジュールだよ、これは」

やる事成す事が上手く行き過ぎている。

不安になるくらいに問題が単純だ。

よくもここまで都合良く事が運んだものだと思える。

差し当たっての問題はない。あとはゆっくりとスケジュールをこなしていくだけ。

まずは、明日からの訓練とやらをこなし、連休明けから学校に通い、いずれ実戦に参加する。

傍らで父親の情報を収集し、目的達成の後に“施設”を利用し元

の世界を探索、帰還する。

探し物が多い気もするが、並行した行動を挟む余地も充分ある。
本当　怖いぐらいに順調だ。

携帯を折り畳むとポケットに滑り込ませ、溜息をつく。

声は狭い個室に響き渡って、再び耳へと返ってくる。

それが強調したのは、今の自分がただ一人であるという孤独感だけだ。

僕は今、エレベーターの中に居る。

「来いって言うっておきながら、僕の声がまだ登録されてないなんて……」

動かなくなったエレベーターは、目的地からだいぶ離れた階に止まって動かない。

ドアも動かない。

つまり出られない。

「流石にエレベーターで酸素がなくなりはないだろうけど……」
ここには変な機能が組み込まれているのか、携帯は繋がらない。

「特別品にしてる意味ないんじゃないかなあ……？」

頼みの綱の璃尾は、ビルの中を見てくるとか言っただけ今朝から帰ってきていない。

今、こうして僕が閉じ込められている事すら知らないだろう。

まあ、居たとしても誰にも助けは呼べないのだが。

それでも……

とにかく、脱出するかどうかしよう。

狭い部屋は、怖すぎるから（……………）。

不安に、押し潰されてしまいそうになるから。

普段から感じている物でも、狭い部屋では、いつもより強く響くから。

だから、早く此処から抜け出したい。

或いは、誰か一人でも他人が居れば、圧迫感だけでも感じなくて済むのに。

そんなどうしようもない事を考えていると、まるで僕の思考を汲んでくれたかのように、ドアが左右にゆっくりと開いた。

3 .

初めに見えたのは灰色の目。

次に見えたのは跳ねつ返りのある黒い髪。

白い肌、鋭い目つき。

季節外れにもほどがある白色のコートに灰色のマフラー。

上からでも分かる手折れそうな線の細さ。

そして頭には、茶色のハンチング帽をかぶっている。

僕は、この見知らぬ人物に、友人の《琴塚蓮》を幻視した。

「……あの」

「……………」

マフラーとコートの襟に顔が半分近く隠れた、彼とも彼女とも知れない人物 便宜上、彼と呼称する事にする は、無言のまま隣に乗り込んでくると、僕とすれ違うようにして真横で止まった。

すると、何も言葉にしていないのに勝手に動き出すエレベーター。

横目に見遣れば、僕よりやや高い位置にある彼の目は、若干下を向き何も無い壁を見つめている。

「 階に、向かいます」

復唱している筈の機械音声も、一人でに喋り始めたようにしか聞こえない。

異常な原理で正常に動き出すエレベーター。

永遠にも近い邂逅は、何故か邂逅というよりは接敵というべき緊張感を、絶えず密室に張り詰めさせていた。

そうしている内に無言のまま到着し、ドアが開いても沈黙を続け

る僕と彼。

僕は、降りるに降りられなかった。

彼は、降りようとしなかった。

僕の方が先に沈黙に耐えかね、「あの、失礼します」と言って足早にドアの外に出てしまった。

後ろを振り返れば、俯いていた視線を上げて、こちらを振り返り凝視していた彼と目が合う。

その時、何かを僕は感じとってしまった。

僕の中にある何かに傷を付け、亀裂を入れ、押し潰して歪いびつに歪める。

徹底的に絶対的に絶望的な致命傷　　何かが、僕の中身に突き刺さった。

今まで一言も喋らなかつた彼が、ゆっくりと、口を開き、落ち着きのある声で、言の葉を紡いだ。

「白墨しろいし、庵いおん」

「……え？」

「……一応、ボクの名前だ。覚えても覚えなくても構わない。どちらにせよ、近いうちに忘れられない名前になる。さようなら。……

“果てなき孤独”と、“意識の空”を越えた先で　　」

「ちょ……ちよっと待っ　　」

「　　待っているよ、“黒澄理緒”　　」

ドアが閉まり、彼の乗るエレベーターはなぜか上に向かう。

……彼の名前は、耳に残らなかった。

「……なんで、あの人……最後に、笑ってた……？」

理解もできずに混乱している。

何が何だか分からぬままに。

彼に聞きたいことはあつたけれど、それよりも大事な事が一つだけある。

それは悲しくておぞましい事。

僕が彼の瞳を見た時、彼が本当は誰に似ていたのかが分かってしまった。

それこそが絶望的。

あの、世界を拒絶しながらも、その全てを受け入れたような瞳
つまるところ、世界なんてどうでもいいと思っている目は

決定的に違うのは、片方が怖れるあまりに身を遠ざけているのは正反対に、彼は“初めから眼中にない”と考えているという事。
それはまるで……

「……怖かった。すごく、怖かった……」

振り返り、所長室のドアに向かって歩きだす。

指先から血の気が引き、背筋を悪寒が通り抜け、膝には鈍い痺れが走る。

一人では、身体の震えは止まらなかった。

この時の僕はまだ、この邂逅が、誰にとってどういう意味を持つのかすら分からなかった。

分かるはずも、なかった

3 .

所長室に着いてから、先程エレベーターで会った人物についてそれとなく所長に聞いてみると。

「んー……そんな人は、いなかったと記憶しているけど……。私が直接見たのなら、正確に記憶と照合出来るとは思いますが……」

何と言う記憶の持ち主だ……。

「そうですか……すいません、余計なご迷惑をかけて」

「いいえ、それはこちらの台詞よ。不審な人物の情報提供、ありが

とつございました」

そう言うと、軽く頭を下げてみせる月下所長。

「それでは、本題に入ります。採寸したデータに合わせた物の完成品が、つい先程届きました。黒澄君　貴方の装備品一式を渡しておきます」

言葉通りに渡されたのは、目の前の机に置いてある黒いスーツケース。

重さ確かめる為に軽く持ち上げてみたが、見た目よりも色々と言語詰め込まれている事が分かった。

「貴方のロングコートとチョーカーです。出撃時は着けておくようにお願いします。所属を明確にさせて、敵味方を区別する役に立ちますから」

「はい、分かりました」

どうでもいいが、支給品の色が黒ばかりなのは何故だろうか。

ん？　普段からは見慣れない物まで入っている。

「あの、これは……」

「持っていて構わないわ。何かの役に立つかもしれないですから
はあ、と何となく頷き、それ（・・・）をケースに戻した。

ケースに全て纏めた後、月下所長は、僕がこの世界にきてから、初めて僕に個人的な話をしてきた。

「ねえ、黒澄君。私、ひとつだけ気になる事があるんですけど」

「何ですか、月下さん」

彼女が言うには、

「　貴方は、なぜ話をする時に人の目を見ないの？」

……それは、あまり触れてはほしくない話題だった。

「……あの、ですね……」　「気まずいとか、申し訳ないっていうより、怯えてるように見えるのだけだ」

……まずい。できれば、面倒な説明は遠慮したい。

「そんなことは、ないと思いますよ……？」

「思う思わないではなくて、貴方はそうだ、って言っているの。ほ

ら、今も視線を伏せてる」

……あつ。

ダメだ……言い逃れができない。

この人の赤い瞳に覗き込まれると、どうやっても勝てない気がする。
てくる。

向こうに戦意はないのに。

ただ、戦う前から。

……あれ？

そういえばこの人、最初に会った時の目の色って……？

「あの、月下さん」

「美人^{みびと}」

「え？」

「美人って呼んで下さい。苗字は好きじゃないから。あと、まだ話は終わっていませんよ」

「え、あ、はい………すいません、美人さん」

話題の転換に失敗してしまった。

もはや仕方ない。説明、するしかない。

気分を害するかもしれない話題だが、そこは諦めてもらおう事にする。

諦めを携えて、重々しい口を開く。

「僕は、精神的な疾患を抱えています」

4 .

「つまり、貴方は軽度の“世界恐怖症”という奴で、無意識下で自分^{自分}にリミッターをかけている、と？」

「はい、その認識で問題はありません」

大まかな説明を一息に終えれば、疲れたような溜息が出る。
五月三日の正午、所長室での話。

すると、どこからともなく若い男の声が聞こえてきた。

「はッ！ そりやまた難儀な嬢ちゃんだな！」

僕は後ろを振り返ると、「それは、僕の事ですか？」

暗転。

気がつくと、若い男の声が聞こえてきた。

「……はッ！ そりやまた難儀な坊主だな……！」

「ええと……貴方は？」

歳の頃はまだ若いだろう。青年という表現が相応しいと感じた。

紅いTシャツに普通のジーンズ、オレンジっぽい色眼鏡をかけた、目つきの悪い長身の男性だった。

「私から紹介するわ。彼は、戦闘技術教育担当官 略称、戦技教

官を任せている」

「《茜音紅》だ。ヨロシクな、少年」

教官つて……軍隊じゃないんですから……。

「よし、早速、俺の事は《紅 隊長》と呼べ！ 異論は認める。

ただし返事は『サーイエツサー』だッ！！」

……うわーい、嫌なのきたコレ。

それは意見を認めるといふより、おびき寄せて叩き潰してるだけ
だと思えます。

「まあ、冗談だけだな」

冗談ですか。

「俺あな、固っ苦しいのは嫌ねえなんだよ」

それでいいんですか教官。

「細かい事は気にすんな。名前は聞いてる、よろしくな、少年」

それでも名前では呼んでくれないらしい。

副音声を聞けば、『この半人前がっ！！』っという感じだと思っ。

そう思わせるような雰囲気の人だった。

「訓練は明日の朝からだ。遅れずに訓練室に来るように！」

「はい」

拳動が妙にスポーツマンっぽいな、この人。

帰宅部のエースだった僕としては、明日からの訓練とやらが、大変面倒な物になるような気がする。

「では、黒澄君。頑張ってください」

ええ、嫌でもそうなると思いますよ。

これは、流れを拒絶できない気がする。

運命、なんて表現は、都合良く使われがちだ。

いや、その言葉は表現ではないか。

心の中を“表し出す”為の言葉ではなく。

初めから、明確な定義のある要素として扱うのなら。

逆らえない流れ。

可能性因子論的には、既に選ばれ、過ぎ去ってしまった分流の一つというべきか。

全体を眺める視点で言えば、一部を流れる一区切り。

流れ行く世界に終わりはなく、始まりはもっと遠い。

全ての終点は、一方通行の先にある限りなき永遠。

全ての原点は、不可逆の向こう側の果てなき無限。

「なーに小難しい事考えてやがんだ？」

「ひゃうっ!？」

いつの間にか真後ろに立っていた彼。

心臓が止まった気がした。

さっきの恐怖症の説明を受けて尚、躊躇わずにこつこつ事をやる
辺り、彼は僕の事嫌いなんじゃないか……？

「そんな事ないと思うわよ？」

心を読むな。

「そんな事ないぜ？」
「アンタも乗るなっ！」

……何だろう……最近、口調が悪くなってきた気がする……。
と、思考の途中で視界が揺れ、浮遊感を味わう事になった。

なんと、紅さんが僕を肩に担いだのだ。

「え、あの、ちょっと？」

「今日中に訓練室に案内しといてやるよ。よし、いくぜー」

「廊下で人に見られますーっ！ やめてー、人がいるからあー！」

「居なきや良いのか？」

待って、なんかおかしい台詞ですよ！？

はっはっはっ、と心底楽しそうに笑う紅さんと、肩に担がれて暴れる僕。

……顔は、多分真っ赤だ。

「ウフフ……あんなに楽しそうに……」
笑う月下所長。

「それ紅さんの事ですよね！？」

そうじゃないなら貴女との関係を考え直さなきやいけないです。

『……ああ、もうっ！ 自分で歩けますからあー!!』

《to be continued》

一日で書いたので短いです。
誤字もあるかもしれませんが。
いつも相当ありますが。

傍点の付け方がいまいち分からないんです。
PCで見てみて愕然とした。
直す手間も直す手順も分からない不安。

どうでしょう？

1 .

未だ買い物をするような余裕はなく、そもそも物が持たない性格なので、目立つ私物は無く、事実として、私物は全くと言って良い程に持っていないかった。

何の話かといえばごく個人的で私的な話、つまるところ、僕の日常的な生活の話だった。

ここは僕 黒澄理緒の自室だ。

紅さんは、案内が終わったにも関わらず僕をあちこちへ連れ回そうとしたのだが、廊下ですれ違った所員の深留みずめさんに、紅さんの魔の手から助けてもらい、何とか逃げ出してきたのだ。

今頃は年頃の男女が、光の巨人よろしくファイティングポーズで向かい合っている筈だ。廊下の真ん中で。

すいません、深留さん。助けてもらった僕が言うのはあんまりかもしれませんが、言わせてください。

なにやってんだ、アンタら。

「こーら、理緒くん。助けてくれた方にそんな事言わないの」

頬を膨らませて怒りを表現しようとしているらしい姉 璃尾の表情は、リスかハムスターを想像させる。

異論はあるだろう。

ただ少なくとも、“小動物”辺りで意見は一致をみる筈だ。間違いない。

そんな、妙にかわいらしく庇護欲を煽る姉は、珍しく今日の朝から目覚め、あちこちを見て回ったらしく、昼を過ぎてからようやくよく部屋に帰ってきた。

、最近はやけに慌ただしかったり、本人が寝てばかりだったので構ってあげられなかった（仮にも年長者に対してはあんまりな表現

だとは思うが)ので、璃尾は久しぶりに仲良く団欒したくなっただら
しい。

こちらこそ喜んで、望む所です、といった感じだ。

姉弟水入らず、ともいう。

「久しぶりだから楽しみだね。最後にしたのは、何の話だったわけ
？ お友達の事かな？ それとも、好きな人がいるかどうかだった
かなー？」

強風の話です、とは言えなかった。

この人は、本気で覚えていなくて聞いている。

真面目に質問しているのが分かる辺り、尚の事言いつらい。心が
痛む。

「さあ、忘れてしまいました。ごめんなさい姉さん」

んー、と唸った後、「ううん。いいよ、別に誰が悪いとかいう問
題じゃないし、ね？」と顔を覗き込まれる。

すいません、百パーセント僕が悪いです。

良心の呵責により、自分で自分の頭を殴りつけたい衝動に駆られ
たが、それをするともた姉に心配を掛けるので思い留まる。

殴る、で思い出したが、そういえば僕という人間は、中々に血を
見た事が少ない。

何事も無い平和を重んじる僕が、出来る限り頑張った成果かもし
れない。

嘘。本当はそんな事は思っていない。

人の想いでは、運命は、世界は変わらないから。

まあとにかく、血を見るような事件はなかった。良い事だ。

……ちなみに、血を見ない事が、平和である事とイコールであつ
たとは限らない。

余談。

そんなことを言っていると、「お姉ちゃんとお話する時はお姉ち

「やんだけを見て！」と、意味はよく分からないが心温まる口調で言われた。

その際、空中を浮遊している勢いのままに、ベッドに向かって押し倒された。

現在は、手を繋いで仰向けに並んで寝転がっている。

温もりはほんの僅かに感じる。

冷たいという訳ではなく、なんとなく暖かい空気に触れているような儂い^{はかな}感覚。

この希薄さで僕に触れるというのは、なんとも信じがたい話である。

だが僕にとつては、紛れも無く今ここに存在する肉親だ。

例え誰にも知られなくとも。

必ず誰にも知られないように。

「姉さん……」

「理緒君……」

寝転んだまま互いに横を向き、見つめ合う。

自分の髪が頬にかかるが、今は気にもならない。

片手を鏡合わせのように握り合い、空いた手で互いの頭を撫でる。

「えへへ、大好きだよ」

「僕もですよ」

璃尾の手は、背中から回すように。

理緒の手は、首から回すように。

相手の頭の後ろに手を回すようにして、互いを抱きしめる。

過剰なスキンシップだとは思わない。とてもじゃないが思えない。

とにかく想いを伝えたくて、想いの強さが伝わることを夢想して、あらん限りの親愛の情をこめて、尚の事強く抱きしめた。

彼女の不可思議な特性は、本人にとって当然の異常だし、そもそも彼女の存在自体が、不可思議な異常であると言っている。

どこまでも薄弱でどうしても薄命。

どうしても薄弱でどこまでも薄命。

だから 世界に知られてはいけない。

璃尾を、世界の内に入れる訳にはいかない。

彼女だから 世界の内には居ない彼女だから。

世界の外、“僕”の中に在る彼女だから、僕は彼女を恐怖せず、愛する事ができているのだろう。

……世界の内から零れ落ちた人間しか、愛することができない僕。酷く歪で、醜く、脆く、危うく、虚しくも痛々しい存在。

被害者な自分に酔うどころか、みつともなさすぎて自分ですら直視に耐えない。

それでも僕は、この世に居ない彼女を愛しています。

2 .

この《蒼》の世界に来る前、その前よりも、更にずっと前に、とある少女に言った言葉だった。

「アナタは、私の事が嫌いなの？」

「まさか、そんな事はありませんよ」

彼女の言葉は、僕に重くのし掛かる。いや、鋭く突き刺さりもした。

「でも、アナタは私と目を合わせようとしないうし、どこか距離を感じる」

文末に割り込み、「知つての通り、僕は世界恐怖症です」

僕は恐い。

世界の全てが怖い。

僕より世界の方がずっと強い。

「全てに等しく恐怖して、総てを均しく遠ざける　だから、嫌いになんてなる筈がないんです」

虚無的な物言いになるかもしれないが、僕は誰か個人の事を嫌いになる事もなければ、好きになる事もない。

以前、どこか僕に似た少女と話をした事があつたが、その時も僕はこう言った。

『僕は世界を拒絶する。全てを遠ざけ距離をとる。距離をとって、無関心に近い状態にして、恐い世界から自分を隔離してるんだ』

世界一つと自分一人、外界と内界、まるで釣り合わせようとするかのように自分の裡うちに閉じこもつた。

「僕にしてみれば、世界なんてのは怖くて遠い出来事です、存在です、景色です。恐怖と不安を理由に遠ざけているから、好き嫌い以前、あまりに興味が薄い。詳しくは知らない。つまり分からないんです。だから、僕が人を嫌いになる事はまず、ないのでしょ」

ごく稀に、何かの間違いで好きになる事はあつたとしても、嫌いにだけはなり得ない。

知らない物を嫌いにはなりようがないからだ。

知る事になつてしまった例外を除いて。

矛盾　なのだろう。

全てを拒絶する事と、全てを嫌わない事。

対極ではないが、両立もしない。

真つ当な人格なら、人は恐怖の対象を忌避するのだから。

嫌いでもないのに拒絶して、拒絶するからこそ嫌わない。

皮肉、という程に痛烈ではないが、喜ばしい訳でもまた、ない。

「ですから、僕は貴女を嫌ってなどいません」

本当は矛盾ではないのかもしれない。
だが

そう、自分だけを、自分だけが、自分だけは

「だから、僕がこの世で嫌いなのは」

たった一人。

『自分だけ、なんです』

3 .

気が付くと、部屋には夕陽が差し込み、全体を茜色に染め上げていた。

僕はいつの間にか、眠ってしまったていらしい。

横を見れば、璃尾も数瞬前の僕と同じように瞼をとじ、すやすやと寝息をたてている。

その無邪気で安らかな

寝顔を見ていると、ますます愛おしさが強くなってきた。

寝る前にはさんざん甘え合った気がするが、気にしない。

起こさないように気をつけて。

まともじゃないのも自覚して。

そつと、妹のような姉を一方的に抱きしめた。

「ねえ、姉さん」
誓う。

今、改めて、此处で。

『 世界からは、僕が護るから 』

《 t o b e c o n t i n u e 》

第六話 『一過団樂 - Sister and brother -』 (後書き)

読んで頂いてありがとうございます。

どなたか評価や感想などありましたらお願いします。

参考にしたいので。

1 .

今日は五月四日。

僕がこの世界に来てから、実に三日目となる爽やかな朝。

もっとも、一日目には起きたら野外、続けざまに“号砲”気味のモーニングコールの二連コンボを喰らった訳だが。

それに比べれば、今現在のこの状況、まるで天国のような平穏となる筈だった。

瞬きの間に、眼前の壁面を粉碎する弾丸。

嗚呼、あの初日を思い出させる光景。

「オラオラ坊主ツ！！ なーに考え込んでやがんだあ？ あんまし
氣イ抜いてつと、次は眉間にブチ込むぜエー！！」

場所はここ、トラッシュバンカービルの訓練室。

彼の名は、茜音紅あかねくれなひ二十五歳。

《仮想階段》に所属する特異能力者、およそ数十人いる中でも、
最上位の戦闘力を保持する一人。

《茜色の焔》あかねほのおの二つ名を冠する、別世界出身の戦闘技術教育担当。
かつて、とある世界を一度救った英雄。

なんて、心底どうでもいい前置きは、文字通り置いといて。

「う……ひゃあつ！！」

「なっさけねえ声上げてんじゃねーぞ！ 殺られてーのかあー！！」
何故僕が、こんな戦場じみた場所で命を懸けているのか とい
うより、なぜ紅さんに殺されそうな状況なのか。

涙が出る程には理解不能だが、せめて事の次第を知っておいて欲
しい。

その日は、朝から気分の良い目覚めだった。尤も、気分良く目覚められたのは僕だけで、ちっちゃい姉の璃尾は、「……………」と無言のまま僕の“中”に入ってきて来た。

今はまた寝ているらしい。
らしいと言っても、外から中を知る事は、本人たる僕をもってして不可能な訳だが。

例え自分でも、自分の事で分からない事はある。

それはともかく、今日はいつもより朝が早い。とはいえ、せいぜい三十分程度の違いのだけけれど。

訓練。

今日は、僕の《特異能力》の“自覚”（特異能力の発現を、《仮想階段》ではこう呼ぶらしい）を促す為、月下さんと紅さんが、僕に訓練を受ける事を提案したのだった。

着て来るように言われた、黒いコートとチョーカーを身に着けて、僕はゆっくりと部屋を出る。

殊の外動きやすく、保温性と通気性が両立されている。

ただし、戦闘用にしては防護能力に不安がある。もとい、紙で出来ているように心許ないという難点があるが。

現在、朝食は既に済んでいて、洗い物の類も片付けてきた。

支給された冷蔵庫に元から入っていた食品をあらかた使い切ってしまったので、今日は買い物をしておかなければならないだろう。そういえば間宮ちゃんが、今度この世界の月崎を案内してくれるって言ってたけど、どうだろう？

お言葉に甘えてみようかな……………。

そんなこんなで訓練室に向かう僕。

途中でお隣の部屋の《菱崎かなた》さんに会って挨拶をした後、エレベーターに乗り込み訓練室のある階へ。

当然今回は、前回とは違い問題なく動いた。

情けなくも、正直言つて戦々恐々だった。

繰り返しはギャグの基本だ、と昔ある少女に言った事はあるけれど、流石にこの期に及んでまだ声が登録されてないなんて事態は有り得ないだろうに。

「世界の中に居ない僕には、そんなお約束という法則は関係ありませんよ、っと……」

やはり前回とは違い、途中で変な人に会う事もなく、すんなりと目的地に着いた。

「そもそも、前回と今回という全く別の二つを比べる事からして無意味なんじゃないかな。一期一会……とはちよつと意味が違うかもしれないけど、時間という要素まで含めて考えれば、以前と同じ条件を再現するなんて、タイムマシンかIFの妄想の中に乗り込まなきゃ無理な話なんだよね……」

それこそ無理難題な話なので、益体のない思考は打ち切りにしよう。

有り得ない事態を想像する程に無益な思考はない。

予想が当たりかハズレかなんて、無意味が無様のどちらかを目の当たりにするだけなのだから。

当たりなら、実際にそんな事態は訪れるはずがない　つまり、文字通りに“ありえない”。

即ち無意味。徒勞。骨折り損のくたびれ儲け。

ハズレなら、有り得ないと思いついていた事態　要するに、想像だにしていない出来事が起きたその時、“そんなことは有り得ない”と狼狽する以外にないという事。

それは無様。醜態。不体裁。

どちらにしても、良い事なんてまるでない。

「それでも有り得ないかどうか気になるのは、単に『それは有り得ない』っていう安心が欲しいからなのかな。僕には、関係ないけど」

そう、僕には正しく関係ない。
どうせ、どれを、どうしたって。

僕には、安心なんて逃げ場がないんだから。

気づいた時にはもう、訓練室の扉の前に立ち尽くしていた。
ゆっくりとドアノブに手を掛ける。

僕が躊躇いがちに中へ開くと、そこに広がっていたのは

「街？」

視界一面に広がるコンクリートの森。

ビルに路地裏、空模様までを実寸で再現された月崎が、部屋という区切りをまるで感じさせない広大な空間に広がっていた。

「……って、そんな筈ないでしょう……？」

ここは、超が二度は付く程に高い高層ビルの中程。

新東京の二代目東京タワー（通称）よりも、倍以上は高いんですよ？

地平線があるアスファルトの地面も、乱立するコンクリートの建造物も、青々と澄み渡る蒼穹もあるはずがない。無いたら無い。

だと言つのに、なんだというのだろうか、この有様は。

頭が混乱して眩暈に苛まれていると、オーイ、とどこからともなく声が聞こえてきた。

「よう、遅かったじゃねーか」

路地裏の薄暗がりから姿を現したのは 紅さん。

この人、周囲の存在に敏感な僕ですら発見できなかつたなんて……。

派手な目立ちたがり屋に見えて、こういった小手先の技術もかなりの水準で身につけている辺りはやはり、戦技教官の役は伊達ではなかつたらしい。

「おお、中々似合ってたじゃねーか色男」

「……それは、よく性別を間違えられる僕に対する当てつけですか

……？」

……例えば、昨日のように。

「うおう、俺が悪かったから睨むなって……。お前見たいなちっこい上に小憎^{こにく}たらしくもないガキに睨まれると罪悪感感じるんだよ……」

……はあ。

「……すみません、取り乱しました」

「あ、ああ……」

紅さんが見開いた目を落ち着かせ、深呼吸。

そして

「えー、お前にはこれから殺し合いをしてもらう」

……？」

はあ………はい？「ええ！？ 殺し合いですかあ！？」

「なんだよー嫌かよー？ いいじゃん、やろうぜ殺し愛」

「嫌ですよ。深留さんともやっていて下さい。お似合いじゃないですか、殺し哀。そもそも僕、もう高校生ですし」

「なんでアイツなんだよ！ あと、俺らがやったら大人二人になるじゃねーか！！」

何の話ですか。

………こういうの何て言うんだっけ？

昔、錐斗君に聞いた事が ああ、“ツンデレ”って言うんだっけ？

………このツンデレめっ！！

「……取り敢えず、説明頂けますか？」

「ぜえ………はあ………分かってるよ ん、ホワイトボード（ハスキ
ーボイスで）！！」

何言ってるんだこの人。

言葉通りどこからともなく持ち出してきたホワイトボードに、大きく『特異能力』と書き込んだ。

「お前、異能についてどれくらい理解している？」

尋ねるように口を開く紅さん。

ええと 以前、月下所長やあの二人が言つてた事を総合すると

……。」「……世界に満ちた可能性因子エーテルに、強く干渉する能力だ、としか……」

「全然だな。まるで使えん」

うあ……。言い返せない……。

「厳密に言えば、世界を“構成”するエーテルに干渉、消費する能力。つまりは、世界を削り取って消費してる訳だ。それと、個人ごとに能力が重複しない事も特徴だな。ただし、そいつが死んだら、また別の誰かに発現する可能性はある」

“重複”は禁忌なんだろうな、と彼は言った。

「特異能力は自分という存在の根底だからな。本人の秘めてる本質と言つていい。相手も自分も、アイデンティティの重複は本能的な部分で避けたいんだろうよ」

紅さんいわく、特異能力は、生れつきの性質や体質みたいな物らしい。

羽で飛ぶから鳥であるように、二足で歩くから人であるように、その生れついでの特異性こそ、特異能力者である所以なのだ。

「本質、ですか」

「ああ、本質だ」

紅さんは、腕を組んで話を続ける。

「例えば《井文無比》」

「……？ あの井文さんですか？」

そう、と一息おいて、「あの井文だよ」と返される。

「アイツの本質は、“人を使う”って事柄なんだ」

「人を、使う……」

確かに、あの滲み出る厳肅な雰囲気や、まるで社長ののような存在感は、正しくその言葉の体言であった気がする。

他人に次々と命令を飛ばすような仕事が似合っている気がした。

「まず本質ありきで、それを原型に人格やら身体やらは成長するのさ。特異能力という体質も含めて、な」

特異能力の発現を“自覚”と呼ぶのは、そういう意味があるのだそつだ。

“身につける”訳ではなく、自分という存在の根本の部分を見直し、知覚するだけだから。

「実際問題、《月下美人》という突き抜けたもとい、ブツ飛んだ度合いの超人が居なきや、代わりにアイツがこのトップをやる事になつてた筈だぜ？」

それに、と続け、「名前”にも意味がある”彼はそう言った。

何でも、特異能力者には、後天的な名前 “真名” という物があるらしい。

自らの本質を表す、特異能力者として自覚したその瞬間に、どこからともなく脳裡に焼き付く真の名前。

「本質に合わせて、特異能力者にとって“最適化”された名前だ。

これは、俺や井文なんかの特異能力者 他にも、間宮の嬢ちゃんみてーな^{オリジン}原典系列まで含めた、生れつきの異能者だけじゃねーぞ？
術式^{術式}使いや述式^{述式}使いなんかの、体系化された異能を研究、行使する連中だつてそつだ」

中程からは理解できなかつたが、大体の意味は理解した。

思考が顔に出ていたようで、紅さんにフォロワーを入られた。

「その辺は追い追い説明する。分かんねえなら今はそれでも構わねーよ」

やれやれと首を振って、「そつだな、お前にもわかりやすい例えは……」僅かな思考の後に口にする。

例えは……やはり《井文無比》。

「使い易い例えだからな」

無比という名前は、自分には誰も比肩しない事を意味する。

“人を動かす” 井文無比は、人より上の立ち位置に居る事を表している。

「ウチの所長は本名なのか真名を名乗ってんのか分かんねえけどな。俺の名前はそうだ。《茜音 紅》 つまり、『夕日に焼けたような血の赤』……攻性の炎使いだ」

「“炎”ってというのはイメージ通りですね……」 まさにこの人にピッタリだ。

ああ、そうか。

本質は、性格の原型アーキタイプでもあるのか……。

「そういう事だ。身体や精神、特に精神と特異能力が一致しない奴はまずいない。いたとしたら、それは見掛け上のパラドックスって奴だ。覚えておけ。そうだな、例えば」

狂い過ぎて、逆に正常に見える狂人、とかな

聞こえない程小さな声で、しかしどこか思い返すような声だった。
「紅さん……」

その声の弱々しさに、あつてはならないこの人の弱々しさに、僕は思わず呼び掛けてしまった。

何も知らないのに。

何も知らないから。

「るせー。気にすんな」 怒られてしまった。

……これ以上は触れないでおいた方が懸命だろう。
全く……僕らしくもない。

「まあ、名前についてはこんな感じ ああ、一番大事な所を忘れちまってたか」

それを忘れてどうするのか。

「こいつは人によるんだが、大抵は特異能力者に名を名乗れっっていったら、それは真名の事だ。そして、特異能力者が真名を名乗る時は」

今までにない真面目さでこちらを見る紅さん。

僕は、さりげなく目を伏せている。

「自分の存在を証す覚悟を示す時だ」

自分が今、確かに此処に在る証を立てる時。
目の前の《炎》は、そう言った。

3 .

「まあ、つまりは大体そんな感じだ。特異能力についての説明は終わりでいいな」

十五分ほどの手短な説明をようやく終えた。

「はい、『特異能力は特異である事こそに価値、つまり優位性がある。今までなかった機能が搭載された機械に需要が生まれるように』」

「ですよ、憶え^{おぼ}えました」

つい先程聞いた内容の一部を復唱する。

「よし、分かってきたじゃねーか」

何となく少しは認めてもらえたようで嬉しい気がする。

気はするのだが

「で、なんで最初のバトルロワイアルになるのかが未だに理解できないんですが……」

全く繋がりが分からないです。

「無能」

……。

「ぐは……」

刺さった。

なんか刺さった。

お願い、抜いて……くだ……さい……。
致命傷です……。

「くくつ、死にそうなツラしやがって」
「ニヤニヤしている紅さん。」

せ、性格悪つ……！！

「ああ、悪いいな、気遣いが足りなかったか？」

「悪いのは貴方の性格ですっ……！！」

とは、流石に言えなかったが。

言えるだけの強さが足りなかった。

というより、言ったらまた弄られる気がする。

けなしてけなして時々褒めて、浮かれた所をすかさずけなす。

……ひどすぎる。

「ふう、さんざん話そらしやがって」

「それは貴方だっ……！！」

なんて、やっぱり言えなかった。

「仕方ない、俺が馬鹿でも一度で分かるぐらい簡単に説明してやる」

「なんでこっち見るんですか……」

呆れたような見下すような嘲るような耐え難い視線を、こちらに送ってきた。

うっ、そんな目で見ないで……。

「さて、お前にはさつき特異能力の基礎を仕込んだが、まさか忘れてねーだらうな？」

少し悩んで、「ええ、大丈夫です」と答えておく。

その気になれば思い出せるくらいには記憶している。

「なら、ウチの組織は“武器”を支給しないのは知ってるな？ お前の装備一式にもなかったら？」

………ん？

「はあ……」

「んだよ、気のねえ返事だな。そうなんだっての。何てったって《仮想階段》は、“特異能力者を基礎にした、人類の研究と進化”を目的に掲げる研究機関だぜ？」

『“実戦”つてのは実地検証　つまりは、調整を加えた自分の能力の“試験運用”だ。“実験”を兼ねた仕事なんだよ』、という

のが、本当の所の本音であるらしい。

建前は、野に散らばる特異能力者の抑制。場合によっては鎮圧、保護する治安維持職。

勿論、世の中に必要な事だからとやっているのではあるが、それを引き受ける理由には、自らを被験体とした、一見には狂気に冒されたとしか見えない実験が隠されている。

「俺がここで教えてきた中には、ろくでもない奴だつて二、三人程いた。“特別招致外部協力研究員”　つまり、一応は外の人間である俺だから言っけどな、この組織はお前が思ってるより　ずつと黒いぜ？」

囁くように耳元で、僕にそう、呟いた。

気になる言葉だったので、「それって　」と問い質そうと思っ

た。

質問しようとした　のだが。

「さつて、またまた話が逸れたな。今の話は忘れてくれ、俺の立場が危うくなるのは勘弁だ」、なんて事を言う。

これでは、聞くに聞けないじゃあないか。

本題。本のタイトルではない。

「まあそんな訳で、実験の邪魔になるから武器は使用される事はないし、意味もない……普通はな。能力を試す為に出撃してるんだ、能力を使わないで武器を使うのは正に意味がない。例外は、武器になんらかの効力やら概念やらを付与する異能だが、そのための媒体は、自分に配給されてる研究資金を使って調達するのが普通だ。他の奴らも同じで、研究成果さえ上に提出できれば、資金は更に多く配給されるしな」

その話は、働きもせずただ保護してもらっているこの身としては、「……なんか、申し訳ない話ですね」

「気にすんな。お前の“素質”は、勢力の手元に在るだけで価値が

あるんだろっからな」

なんでも、特異能力者を集めている組織は“此処”の他にもあるらしい。

「厳密には“体系化された異能”だから、特異能力とは言わねーがな。《式使い》の組織が二つに、《武機》開発の組織が一つ、先天性異能力の研究機関であるウチが一つで四すくみになってるんだが……まあ、世界“間”情勢については所長にでも聞いとけ、俺よりよっぽど詳しいから」

言い終わってから、ハツとしたように頭を抱え、ガシガシと頭を振り乱して叫んだ。

「あーもう！！なんで話が逸れまくるんだ！？何故かお前には説明しなきゃいけない気がしてきて……そうか、お前の所為だな、そうなんだな！？」

え……そんな理不尽な……。

「もういい、言いたい事だけ説明する！お前には本質に対する“自覚”が足りていないに違いない。実戦の中で自分を見つめ直せ。以上！！」

「ええっ！？」

本当に一言だけだよ、この人。

……このツンデレめっ！！

「……ダメだ、自分の知らない言葉を使ってみるものじゃないなあ……。大切な何かを激しく間違えている気がする……」

「空間を造れるレアな異能を持つ所員に頑張つて月崎の街を再現してもらっている。このゴム製特殊弾頭が込められている借り物の拳銃を使って、俺と殺し合いだ。死にはしねえ、痛いだけだ」

ゆっくりと、こちらに銃口を向けて

「坊主、お前も取れ。加減はしねえぜ？」

そして話は冒頭に戻る。 死人の出ない殺し合いは今、始まった。

『 僕が自覚するべき本質……戦う……意味？ 』

《to be continued》

……そんなこと言って、本当は痛みなんてねーんだろ？

「……痛いですよ」

「いや痛くないね。お前は、『自分が今、痛みを感じている』と感じているだけだ。」

「……何が」

「傷ついても、実感がねえんだろ？」

「苦しくねえんだろ？」

「痛みはずなのに、痛みを感じているのに、痛くはない。」

「自分で自分が不気味で仕方ない。」

「それはさ、認識が……主感覚クオリアが足りてたねえんだよ」

「貴方に……何が……」

「いや、足りないんじゃない。無いんだ、まるで無い。お前の自

意識の中にある善の、痛みの本質クオリアが

「……何が、解る……」

「自覚しろよ。お前はまともじゃない。」

「無いんだから、該当する物を取り出せない。」

「経験がないからじゃない。」

お前の本質に、もともとそれが刻まれていないからだ。
辞書を引く前に、そもそもお前の辞書には載ってない。
どうやっても知りようがないのを、そろそろ認めてやれよ。
お前にとつての痛み　つまり、痛みという感覚質クオリアが存在して
いない事に、いい加減納得しろよ。

「　貴方に何が解るっ!!」

……………。

「……………何が、解るって言うんですか……………」

……………分かんねえよ。

お前の事なんて何も、解わかんねえ。

「だったら　!」

「　俺は俺だ。どこの誰にだって、他人の事なんか解るワケ
ねえだろうが」

「もう……………もうやめてくれ……………僕が痛くないなんて、そんなのは嘘
だ」

「甘ったれんな。自分だけの理由で、自分が不幸だからなんて理由
で、他人に許してもらおうなんてムシが良過ぎる」

お前には、身体からだの痛みはどうやっても理解できない。

「だって、僕の心は　」

だからお前は、せめて 人より敏感な心の痛みだけは。

「 こんなにも、痛くてしかたがないのに」

『 他人を思いやれる筈だろう、黒澄』

《black out》

幕間

『現象の対義語は本質

- R i o a n d K i r i t o -

』(後書き

極限的に短いです。

対話だけを切り抜いた形なので。

本当は本文に入れるべきかもしれないんですが、敢えて分けて書きました。

お目汚し失礼します。

第八話 『茜色は暮れない色』

- B l i g h t r e d o r C l e a r b

一週間も掛かってしまった。

“戦闘もどき”は書くのが難しすぎますね。

1 .

青く蒼く晴れ渡る空。

人気も人気もまるひとけで無い、あの日の再演。

あの時と違うのは、カーテンコールが僕一人だけの物だという事。真夏はおろか、未だ春の風が残るこの街で。

昇りきる前の陽光が眩しい、この世界で。

死なない殺し合い 下らない戯曲の舞台が今、開幕した。

「 とはいえ、せめてあと女役が二人はいないと、その物語は始まりもしないけどね……」

むしろ、それでもいい。むしろそれがいい。

始まる前に 終わらせる。

……はて、全く僕は何を言っているのか。

“偽月崎”で、紅さんの“訓練”が始まってからおおよそ五分一対一。

あるいは、マンツーマンと言っても良いのだけど、やはりこの場合は、“一対一”という言葉が相応しい。

開始の合図と共に僕は、建物の合間を縫うように走って逃げ出した。

「そりゃあ逃げますよっ！」
理由は簡単。

《茜音 紅》教官こと紅さんが、“拳銃”をこちらに突き付け、引き金を引こうとしたのが視認できたからである。

身に迫る恐怖に過剰な防衛本能が働いた結果の逃亡だったが、間一髪だった。

背後で炸裂する銃声と、ダン、という着弾音に身を竦ませながら、

路地裏に駆け込む。

無我夢中。息がきれるのも気にせず、我武者羅がむしゃらに足を動かす。見つかりにくいようジクザグに走り回ると、ビルの裏に積んであったダンボールの山を見つけた。

相手が後ろをついて来ていないか確認してから、その陰に、身体が小さくなるようにして身を隠し、ひんやりとしたコンクリートに背中を預ける。

ふう、と溜息をつき手に握り締めるのは、紅さんに渡された、至ってシンプルな形状の黒い拳銃。

「いやシンプルっていうか……」

黒い……《デザートイーグル》？

たまに漫画なんかで見る銃器に似ている。

素材自体が黒い金属で出来ているらしいが、表面に光沢がない。

……暗殺用じゃないですよ？

いかにも拳銃といった見た目は、シンプルというより、安直なデザインだと思う。

あと間違いなく“階段”の特注品だ。黒いし。

……ところで、この拳銃を使うような火力では、例えばゴム弾だった所で致命傷になりそうな気が……。

というか、貫通されでもしたら困る。

そう思い、訓練が始まる前に紅さんに聞いた所、実はこの特殊ゴム弾が有り得ない位に弱いらしく、これくらいの威力で撃たなければ訓練にも使えないレベルなのだそう。

この“偽月崎”空間とはまた違う特異能力者の手で加工されているらしい。

……この世界はなんでもありませんか？

「って言っても、訓練すら受けていない素人に持たせて良い武器じゃないでしょう、これ」

むしろこれから訓練受けるんですが、僕。

拳銃なんて、使い方すら分からないのに。

取り敢えず、事前の知識から判断するしかない。

「そういえば、なんでかは知らないけど琴塚君が携行武器に詳しくたような……」

特に拳銃。趣味って感じじゃない気がした。

数少ない友人を思い出す。

……やっぱり、変人が多いような……。

さて その彼からは、多少の話を聞かされたりもしたので、脳に刻まれた知識自体は少なくない筈なのだが。

「……ダメだ、思い出せない」

どう考えても、殆ど適当に聞いていたからだろう。

まさかまさか、人生において拳銃を握る事になるとは、夢にも毛ほども思わなかったので、仕方がないといえば仕方がない。

覚えているのは……簡単な撃ち方くらいだろうか？

何を思っただ友人がそんな事を自分に語ったのかは全くもって不明だが、今はそれに頼らせてもらおう。

記憶を頼りに、覚束ない手つきでいつでも引き金を引ける状態までもっていく。

「えーと……確か本物のアレは、自動式拳銃セミオートで、威力と反動の強い弾を使うから、ちゃんとした体勢で撃たないと肩に負担が掛かるらしい、と……」

って、ダメじゃないか。

正しい姿勢なんか分からないし、身体的に未熟っぽい僕には、更に荷が重い。多分この機構も、相当反動が強いと見て間違いないだろう。

どうして紅さんはこんな物を……って、ああそうか、撃たせないつもりか。

武器を使っちゃあ意味が無いって言ったじゃないか。

「じゃあ、どうしろっていうんですか……」

僕の手之余る大きさの、名称不明な拳銃を握りしめる。

確認した弾数は、少なめらしい七発のみ。

だが実弾なら、七人は殺せる可能性がある数だ。

ただ、僕は人を傷つける武器に対しても、他の全ての物と同じようにしか恐怖を感じないらしい。

「怖いことは怖いんだけど……なんか、自分でもどことなく安っぽい感情だと思っただよね……」

とにかく、超至近距離で頭に撃ち込みでもしない限り致命傷にはならないと言っても、僕は好き好んで怪我をしたとも思えない。

月下所長の言っていた、人体を修復できる特異能力者が控えているとしても。

「……痛いのは苦手だ」

とその時、僕は遠くから徐々に迫る音を耳に捉えた。

足音。

身体中に緊張が走る。

いや、恐怖が這い回る。

追いかけてきた！！

電流が流れるように再び立ち上がり、表通りに向かって迂回しながら走り出す。

ここはマズイ。逃げ場がない。

狭い通路で撃ち合いになれば、身を隠す場所がない。

僕は両手で、重量のある黒銃を掴んでいる。

まだ引き金には指をかけない。

「ハッ、ハア……ハ……ッ」

緊張からかそれ以外が理由なのかは分からないが、だんだんと呼吸が激しくなってくる。

その荒い呼吸音が僕の居場所を知らせてしまうのではないかと不安に思わせる程に、無人街は静かだった。

再び表通りにたどり着く。

光の差す世界への帰還。

そしてそこには

2 .

……脳裡に投射されるのは原初の記憶。

“僕”という人間が、黒澄理緒という存在が、新たに生み出された瞬間の記憶。

おそらくは、物心がついたのもこの頃で、本当の意味で姉と出会ったのもやはり、この時だったのだろう。

誰かは言った。

「それは、人の痛みが分からないからさ」

誰かは言った。

「それは、人の痛みが分からないからだね」

誰かは言った。

「それは、人の痛みが分からないからよ」

誰かは言った。

誰かは言った。

誰かは言った。

誰かは言った。

「それは、お前自身が痛みを理解出来ていないからだ」

そう言った彼はそう言って笑い、それを聞いた僕はそれを聞いて泣いた。

泣いた。

嬉しくて泣いた。

嬉しさのあまり泣いた。人を傷つけてきた僕を、そこまで考え

てくれた人が居ると知った。

その嬉しさに泣いた。

その優しさに泣いた。

申し訳なさに泣いた。

申し訳なくて泣いた。

痛くて涙が出る。

苦しくて涙が出る。

悔しくて涙が出る。

懺悔した。

今までの罪を悔やみ、自分に痛みを返して欲しいと願った。何かに願った。

後悔した。

痛みが返ってきてても、罪が消えない事を悔やんだ。確かに悔やんだ。

「僕は罪深い。僕には罰が下るべきだ。今の僕には痛みが分かる」

だから罰を。

僕に試練を。

贖罪を下さい。

罪は欲しくない。

罪を消し去りたい。

そう、願った。

それは誰にも何にも届かずに、消えていった眩きだった。
だから、これは“ああ”なった事とは関係がない。
此処からそう遠くない未来に“ああ”なくった事とは、奇しくも。

事だった
それは、彼が存在の根底に恐怖を刻まれた瞬間。その直前の

3 .

表通りに飛び出た僕。

そしてそこには、

「な!？」

「仁王立ちをする“俺”がいた、なんてな」

《茜音紅あかねくれない》は、戦いが始まったその場所から、まるで微動だにしていなかった。
たったの一步も、

伸ばした腕すら下げず、

微動だにしない体勢で、

彼は、この男は、茜音紅は、再び僕に銃口を向け、先と変わらぬ
い余裕で見下していた。

ただそこに立っているだけだった。

ただそこに。

居るはずのない姿を目に留めて、ビクリとしたきり呆然としていた僕に声が掛かる。

「……どうした、坊主。ランニングにはもう飽きたのか？」
紅さんの妙に冷めた声。

だが、いや だから、僕は決定的な間違いを、それと分かって
口にするしかなかった。

「お早いお帰りですね。僕より早いじゃないですか」

「あ？ 俺あずつとここにいたぜ？」

はい？

「え？ でも、後ろから足音が……」

「……あー、多分そりや鏡原のヤツだな。今のこの空間を作ってる
っつーヤツだよ。報告に来たのを、訓練の邪魔になるから離れとけ
って言つといたんだ。悪い悪い」

今度こそ僕は、相当に間抜けな顔を晒していたのだろう。

すると何か？

僕は、誰とも知らない足音に勘違いして怯え、一人で勝手に盛り
上がって逃げ回っていたというのか？

「……あんまりだ」 思わず両手で顔を覆って落胆を隠した。

仕方ねえな、といった紅さんの呆れ顔は、無性に僕の羞恥心を責
め立てた。

泣きそうです……。

「めんどくせえ、このままここで終わらそうぜ」

終わらせる？ どういう意味なんだろうか？

「構える、じゃねーと撃つ」

……ああ、そうか。

僕は、もはや選択の余地は無いと悟った。

ゆっくり、ゆっくりと。

自分でも、彼の声に操られていると錯覚するくらいの無意識に。

僕は、震える右手で銃口を向けた。

……狙いは、定まらない。

「狙え、坊主。ここを狙えよ」

そして銃口は、彼の顔に向けられる。

微動だにしない彼を見て思わず僕は、「撃ちたくはありません」なんて馬鹿を言った。

「まだ撃てとは言ってるねえんだが……成る程、“そういう類い”の本質か……」

何事か思索を重ねてから、紅さんは言う。

「自分の本質には自分で気付けよ？ 人間は他人を、どうやったって完全には理解できないんだからな。何となく雰囲気^{たいふき}が掴める、ってぐれえなんだ」

「そう、ですか。じゃあ……」

もうやめませんか、と言おうとした時。

「 氣イ抜いてんじゃねえぞ？」

何の前触れも無く、何の躊躇^{ためら}いもなく 紅さんは引き金を引いた。

ズガン、という重い砲撃音。

ともすれば、骨を砕くかへし折り兼ねないほどの暴力。

そんな、目で追えるはずのない速度で迫る弾丸を、何故か僕の目は捉えていた。

その行き先を捕えていた。

これは確実に僕を殺す。

彼は何気なく僕を殺す。

僕は呆気なく殺される。

何の前触れもない死。

ここで、終わり。

でも、それも良いかなと思った。

心残りは、走馬灯のように思い返される。

だが そこには、何も、写ってなど、いない。

友人も日常も未来像も、元の世界や父親でさえも。

真っ白なフィルム^{フィルム}の葬列。

死に行く僕に巻き付く、包帯のような白い記憶たち。

いつの間にか僕は、いつか夢で見た“白い世界”に浮遊していた。時間の感覚は既がない。

生きているとは思えなかったが、死んだとも感じなかった。

って、なあんだ、いつもと変わらないじゃないか

そう思う。それでもいい。

きっと、誰にとってもどうでもいい。

そんな事を考えていたら、頭の奥に自分の物とは違う声が響いた。

「 そんな事、ないよ」

姉さん？

あたかも初めからそこに居たとでもいうように目の前に現れたのは、姉である璃尾だった。

《黒澄璃尾》。

僕の たった一人の家族。

「理緒くんは、自分が思ってるよりずっと皆に好かれてる。君は、君のままできて。居なくなったりしたら、みんな寂しいんだよ……？」

……やれやれだ。本当、不意打ちみたいなタイミングに限って姉らしい事をいう人なんだよなあ。

でも、その通りだとは、とてもじゃあないけど思えない。

僕は大概に“ひとでなし”だ。

悲しむ人間なんて、いるのだろうか？

「ねえ 私を……“独り”にしないでよ……理緒くん……」

その一言で、今度こそ僕の目の色が変わった。

姉さんは、泣いていた。

涙を流しながら、僕を安心させようとしてか、笑いかけていた。

僕が此処で死んだりしたら、未だ僕以外の人間に観測すらされる事のない姉さんは、一体どうなってしまうのか。

誰にも知られる事なく在り続けるのか。

それは、“いない事”とどう違うのか。どれほど、つらい事なのか。

僕には分からない。

分からないから想像した。

そして多分、この時僕は“キレた”んだと思う。

「……私が代わりに力になるから。理緒くんは、死なないで……」

最後に姉さんが言った言葉の意味は、もはや分からない。

ガキリ、という音が響く。

機械のような歯車のような、何かが切り替わるような音。

スイッチなんて綺麗な物じゃない鈍い音は、僕の身体の中から響いた。

いや、おそらくこれは、《黒澄理緒》 いうなれば、“僕”という存在自体がたてた音なのだと思います。

急にクリアになる視界。

視界は急に変ったが、目の焦点はブレることなく対象を捉える。銃身を離れ、先程の宣言通り僕の眉間に放たれた弾は、まるでスローモーションを見ているかのように近づいてくる。

本来なら、弾丸が見えたところで、その速度に身体が反応出来ない筈なので意味がない。

だが、なぜか今の僕には、それに反応するだけの動きが可能だった。

頭を何とか射線からズラすが、流石にこの距離からでは回避しきれない。

左肩に直撃する。

鋭い衝撃が肩を後ろに持って行くこととするが、下がる半身を引くように回転して衝撃を殺し、一回転して体勢を整える。

翻ひるがえされた黒いロングコートの裾が、僕の視界を遮かざったが、紅さんは攻撃をしてこなかった。

「今の動き……一体どこで……？」

何やらブツブツと呟つぶやいているようだが、気にしない。

僕は、口を開いて宣言した。

「ごめんなさい、紅さん。貴方にとっては八つ当たりもいい所で、何の脈絡も無いんですが……」

僕は、いや

「 “私” は、貴方を許しません 」

それを聞いた紅さんは、「 ……！！ ……ククツ……っハハハハハハツ！！ 」

「何が、可笑しいんですか？」

高笑いを、始めた。

「成る程、そういう事かよ！ だから俺なんだな、月下あ！！ だからからかつて“アイツ”の担当だった俺が呼ばれた訳だ！」

「……？」

何を言っているのか、まるで理解できないが、やはり気にしない。手元の銃は、もはや重いとと感じない。

知らないはずの扱い方を、何故か脳が理解する。

初めから知っていたかのように、体捌きや武器の扱いが、あらかじめインストールされているかのように、身体が勝手に動いてくれる。

銃口を向ける。

「アレの検査でも解らない筈だぜ、こんな奴がこの世に二人も居るなんて、一体誰が予想できるってんだ！！ 」

そのまま引き金を引く瞬間、「 お前、《黒澄理緒》じゃあ、無えんだろう？」と、そう聞かれたので、当然僕はこう答えた。

「いいえ。私は、《黒澄璃尾》です」

「……そうかよ」

言葉に含まれた意味を理解できずとも、何となくは分かっただけであらう。えたらしい。

勿論僕自身は、自分の身に起きた事を大体理解している。

最初に紅さんが言っていた、『自分だけが、自分の真の理解者だ』

という言葉の通りだった。

本質は、本人が内面を見直すことでしか知り得ない。

「でも、今はそんなことは関係ない」

姉さんを

「泣かせた貴方を、私は許さない！」

「は　　ッ！　　いよいよもって“そっくり”じゃねーか！　どういうこった、同じ本質は二つとねーはずだよなあ！！　似てるだけのはずだが、怖くなるほど似すぎなんだよ！！」

知らない。そんな事は知ったことじゃない。

どうせ理不尽なのはどちらも同じだから構わない。

せめて一撃。

それで気は済む。

「っおおおおおおおッ！！！！」

踏み出す。

あらゆる事が並以下の僕にしては、とてもじゃないが有り得ない速度の瞬発力だった。

「　　そうだ本気でこい、俺も本気だッ！　見せて見ろ、テメエら

の在り方を！！」

トップスピード

僕は一瞬にして最高速まで加速して、茜色に向かって接近する。

彼は銃を構えるが、遅過ぎる。

自分でも信じられない速度で、紅さんの背後にまで回り込む。

音を立てて弾が通った先に、僕はいない。

「これで……」

背後から拳銃の切っ先を突き付けて、引き金を引く！

「終わり　　！！」

肩に伝わる発射の衝撃は、殺す必要すら感じないが、無意識に腕が吸収分散させる動きをこなす。

もはや、この瞬間の僕は人の域になかった。

放たれた弾丸は、先程と同じように真っすぐに飛び、彼に当たる前に

「え……そんな」

“掻き消えた”。

……嘘、でしょう？

……嘘だ。

嘘だ！！

「悪いな 本気だつつつたろうが」

瞬間、地面を焼く一筋の炎ライン。燃え盛る火炎の壁が、焼き焦げたゴムの臭いにおを生み出したのだろうか。

高速で飛来する物体を、触れた場所で焼き消す熱量。

何という火力なのだろうか。たかだかメートルに満たない火の線に、何と言う威力が。

つまり、これが、《特異能力》。

人と、異なる、人の、本質にある力。

この炎こそが、《茜音紅》そのものだというのが。

「これは、俺という人間だけに搭載された機能。これが俺だ。これが《茜音紅》だッ！！ 目に刻め、俺の《線炎ラインフレイム》を！！」

四方八方。縦横無尽に地を焼き走る炎線の群れ。

例えばそれは、自分を守るように。

あるいは、僕を囲んで捕えるように。

引かれた境界は、彼我を遮り断絶させた。

動けない僕に向けて引き金を引こうとする傍らかたわ、本当についてのような口調で、ポツリと呟いたのが聞こえた。

「自分自身でも未だ計り知れない本質、か。合格だ、“黒澄理緒”。及第点ぐれえはくれてやるよ」

初めて名前で呼ばれた 気がした。

勘違いだろうか？

やっぱり、違う気がする。

でも、何となく、誇らしい気がした。

恐怖症の僕がそんなことを思うなんて、有り得ない事だったけど。もしかしたら今の戦いで、何かが変わったのかもしれない。本質ではなく、僕という人格が。ズレていた歯車が一つ、正しい位置に戻ったような感覚。

気のせいかもしれないが、おそらくは。

良い事が悪い事かは別として。

頭を吹き飛ばされるような衝撃と、視界に広がる雲一つない蒼い空を見つめて、遠くなる景色をぼんやりと見つめていた。

ガギリ、と遠くで再び音が響いた。

僕という人格には有り得ない、人間らしい感情の一端を見つけて、思った。

本当、まったくだ。まったく

「まったくもって、僕らしくもない」

どうしちゃったのかな、僕。

まあ、姉さんはもう泣いてはいないのだから、別にいいか。

『 なんてかな、この世界は あんまり怖くないや 』

《to be continued》

第九話 『暴力的謀略』

1 .

声が聞こえた　気がした。

僕に呼び掛ける、誰かの声。

「起きてくれ」

……ベッド以外には何も無い白い病室で、僕はようやく目を醒ました。

目を覚ましたとは言っても、瞼が重苦しくて開くには時間が掛かりそうだ。

「……今は、何時でしょうか」

誰も答えはしないだろうが、取り敢えず疑問を口にしてみた。

今日の日付は五月六日。

紅さんの訓練を終えてから、既に二日が経過していた。

ここは、トラッシュユバンカービルにある医療フロアの一室、中でも《仮想階段》御用達の特別室だ。

僕の頼みで、ベッドとその上に取り付けられたテーブル以外を、一つ残らず排した部屋。

四方八方、白色で統一された部屋。

しかし統一感なんて感じさせない、潔癖に洗浄漂白されたような、病的なまでに白い部屋。

病的な病室。

……まあ、特別室とはいっても、緊急時以外は確保されている、というだけらしい部屋だ。

額に負った怪我は、待機していた特異能力者により完全に治癒していたのだが、念の為に脳への影響がないかを検査しておこうという事になって、今日まで検査入院をさせられている。

主に、月下所長の独断で。

鶴の一声、というべきだろうか。

入院中は、お見舞いに来てくれた人が意外と多かつた事に驚いた。紅さんは、僕が運び込まれたのと同時に、悪りい、坊主。やり過ぎちまった」なんて落ち込んだ顔で謝ってきた。

訓練で我を忘れた事を後悔しているらしい。

見舞いの品を貰ったら呼べ、食いに来るぜ。

……みたいな事を言っ去っていった。貴方はいったい何をしに来たんですか？

翌日、最初にお見舞いに来てくれたのはなぜか間宮ちゃんで、「……あの人の訓練でよく怪我一つで済みましたね、先輩……」とか言われた。

彼女自身は“先生”とかいう別の人に教えを受けたらしいのだが。

最後には、「無事で何よりですっ」とかなんとか言いながら、リングを剥いて皮だけを残して帰っていった。……何しに来たんだ。

後でその事を、間宮ちゃんと一緒に来ていたらしい月下所長に尋ねると、「ごめんなさい、明らかにこちらの人選ミスでした」なんて、なんとも紅さんに失礼な事を頭を下げながら口にした。

何となく引つ掛かる事があったが、聞くに聞けない状況だと判断してやめておく。

その後、何の脈絡もなくて申し訳ない 彼女はそう前置きしてから、「……ところで、こんな服を持ってきたんだけど……」なんて、意味の分からない言葉を続けた。

ええ女性用ですねどうみても貴女にそんな趣味があるとは思いませんでした顔が怖いですし気持ち悪い笑みを浮かべていないで速やかにお帰り下さい。

何もなくていいから帰って下さい。

なぜかがっかりして帰っていった。

……何をしに来たのかは、知りたくない。

珍しい人も来た。

《石竹沈》せきちゆうしんさん。

淡い赤　桃色にほど近く染められた……いやもしかしたら、天然色かもしれないかなりの長髪。同色の瞳、病的と表記する一歩手前まで白い肌、神秘的と言える無表情、色の淡いワンピースのような少女らしい服装をした、《仮想階段》に属する少女。

僕の“検査”の担当者。

もちろん病院での検査ではなく、特異能力の検査だ。

彼女の異能は、相手の本質は分からなくても、どういう能力が発現するかの予測が立てられるという解析を得意とする代物らしい。

まあ、そんな彼女は少々天然が入った性格で……いや、はっきり言って“不思議系”な性格をしていて、初めて会った時には……その……色々と恥ずかしい事故があった。ええ、事故ですよ、事故！！病室では、ふらっと現れた後に、「貴方の　心は　澄んでいて　綺麗　」……とか言われた。意味が分からない。

まあ、悪い人ではないし、僕はこういった性格も苦手ではないのであまり困ったりはしなかった。

実は、前の世界の知り合いにも似たような人がいたのは秘密だ。

僕と同じ年で、彼女も学校に通っているらしい。まあ、月下所長から聞いただけではあるのだが。

部屋から出る最後に、「無事で　よかった　」なんて言っ
って微笑み掛けられた時には、思わず顔が赤くなってしまった気がする。

天然な上に自覚がないのは、夕子が悪いとも思う。

結局彼女は、何もせずに帰っていった。

一番驚いたのは、井文さんの訪問だった。

黒コートを着込んだスーツ姿で、僕の病室に訪れた。

一人部屋なので驚く人物は僕だけだったが、普通の人間が見たら皆が皆、ギョツとするような登場だった。

いや、それだけならまだ良い。

それは、いうなればお通夜、あるいはマフィア。

そろそろとついて来たのは黒づくめの集団。

聞けば《階段》の同僚の方々。

井文さんの部下　　出撃を繰り返している実働部の人間らしいが数人。

仕事の帰りに寄ってくれたらしいが……。

警察を呼ばれそうですよ、井文さん。

「毎度すまん。茜音の奴が無茶をやらかしたのだろう？　自分から志願して来た人間にならともかく、保護して間もない少年に宛^{あて}がって良い奴ではなかっただろうに……」

美人の奴め、確信犯だな……。なんて、聞き捨てならない事が聞こえた気がしたが、気のせいだと断じる。さつき、所長に敢えて質問しなかった意味が無くなる可能性も高いだろうから。

「そうして昨日の僕は、他の黒服達一人一人に適当に頭を下げた挨拶してから、帰って行く彼らを見送り、無事に一日を終えた、と……唐突に何言ってるんだ、僕は。」

まあ、そんなこんなで検査は終わり、異常なしという結果が出たので、本日にはめでたく退院が決まっているのだった。

そんな僕に、寝起きの質問の答えを教えてくださいる声が聞こえた。

「今は、午前十時だよ」

「え、ああ、ありがとうございます、ご親切に　　って……」

ん？

先程から聞こえてくるこの声は、一体誰だろう？

ここは一人部屋なので、相部屋になる人なんて居るはずがない。

今日は昼には退院する予定だから、今から来る人間も居るはずが

ない。

病院の関係者も、もう退院するだけだから来なくていいと月下所長が伝えたはず。

そして今、姉の璃尾は不在なので、この部屋にはだれも来るはずがない。

居るはずがないのではなく、来るはずがない。

どこか似たようで決定的に違う。

誰が来たのか予想がつかない。

僕は、恐る恐る上体をベッドから起こし、周囲を見回した。

僕の不審な行動をすぐそばで見えていただろうに、笑い声一つあげないばかりか、むしろ興味深そうに眺めている人影。

僕はそれを、初め視界の端に捉えた。

ベッドの脇か……。

僕は左の窓側に目を向ける。

そこには 意外な人物が立っていた。

「……あ、あなたは……なんで……」

初めに目についたのは、この精神病棟みたいに真っ白な部屋で、それでも尚強い存在感を放つ白いコート。次は灰色のマフラー。更にハンチング帽。

跳ねっ返りの強い黒髪、やや鋭い灰色の目、そしてやはり、白い肌。

つまり何が言いたいのかというと

「《白墨 庵》。名前は忘れてくれていた方が、ボクとしては嬉しかったんだけどね」

かつてエレベーターで出会った彼は、以前とまるで変わらぬ姿で僕の前に立っていた。

「人は呼んでも無駄だよ。そのタイミングを見計らって来たんだ」
そう言いきった彼は、間違いなく間違えようもなくあの時の少年だった。

ただ、あの時より幾分か饒舌に感じる。

「……………」

沈黙は続く。

彼は、いったい何をしに来たんだ？

目的が分からない。

僕はこの人が怖い。苦手だ。

目を合わせてしまったあの時から、僕はこの、“白い彼”に敗北していたのだろうか。

そんな事を考えていると、彼は突然に喋り始めた。

「キミに伝えて起きたい事があつたのを忘れていたんだ」

「……………伝えたい事？」

「ああ、伝えたい事だ。頼みたい事と言った方が正しいかな？」

落ち着いていて、こちらに知的というイメージを与えてくる、まだ幼い少年のような声。

頼み事。

会ったばかりの僕に、お互いを知らない僕たちが、一体何を頼もうというのだろうか。

僕としては、この人とは余り関わり合いになりたくない。
だというのに

「ボクと 友達になってくれない、かな？」

なんて、とんでもない事を平然と口にするのだから、頭の中までこの部屋みたいに真っ白になってしまう所だった。

……………友達？

「冗談でしょう？」

「冗談ではないよ。君を見ていたら、手を貸したくなったのさ」
手を、貸す……………？

「ちょ、ちょっと待って下さい！僕は、貴方が誰なのかも知らないんですが……………」

「どの誰だか分からない人に手を貸すと言われて、ありがとございますと言える状況じゃない。」

「そもそも貴方は、一体何に手を貸すって言うんですか？」

「一つずつ答えさせてもらうよ？　まず、ボクの立場について。ボクは、このビルに住んでいる特異能力者と言えば、間違いじゃあないと思う」

「変な喋り方をする人だな、と思いながら、耳は一つの単語を強く捉えた。」

「特異能力者。このビルに住んでいるという事はつまり、そういう事になるのだろうか？」

「あの……貴方も《仮想階段》の方なんですか？」

「いや、違う」

しかし答えはノー。

つまり、僕の知識に無い種類の人間である可能性が高い。

「逆説的に、特異能力者を感知、回収する《仮想階段》に属さない、属せない、属したくない特異能力者の集団コミュニティの一人　と定義しようか。ここに住んでいるのは……まあ、“灯台下暗し”だよ」

逆説的　つまり、一見真理に反するように見えるが、その実は真理である事。

たかが二文字で、どれだけ《仮想階段》の探知接收能力が高く絶対的であるかが分かる表現。

《仮想階段》の目から逃れ続けられる特異能力者なんて有り得ない、という事なのか。

「ええと、つまり貴方は、《仮想階段》に敵対しているんですか？　緊張感が身体を若干強張らせる。」

彼は、僕の敵なのかどうか。
協力の対価に、とんでもない約束を取り付けさせられたりしないだろうか。

「いや、敵対とまでは言わないさ。保護を受けたくなかったり

受けられなかつたりした特異能力者が、手を貸し合う為の情報交換ネットウ網みたいな物だよ。確かに、多少は過激な輩も居るけれどね」

成る程、理解できた。

つまり、単なる“知り合いが多い人達”と考えて問題なさそうだ。「そうですね、分かりました。……それで、その貴方は一体何を協力して下さると?」

「情報をあげよう。現状の理解を深める為の、図書館を」
図書館?

流石に言葉通りの意味ではないだろうが、考えても分からない。聞くしかないだろう。

「どういう意味でしょうか。本なんて読んでいる時間はないんですが」

「フフ、“隙あり”……かな?」
しまった。

「口が滑りましたか……!!」

「“時間がない”。明確なタイムリミットも分からない。それどころか、リミットなんて物はなく、既に手遅れなのかもしれない……。焦っているんだね?」

「っ!!」

この男は、どうして、そんな、事を、知って

「受け取りたまえ。そこに書いてある場所に行けば、キミの知りた
い事は分かるはずだ」

その言葉を聞いた僕は、渡された紙を思わず握りしめた。

何よりも大切な物であるかのように。

一筋の希望を、水の中で薫わらに縊りつくように。

「何故、貴方はその事を……」

部屋を出ていこうとする背中を見て、僕は気になって尋ねる。

「ボクも、キミと同じだったから。それに 目的があるのさ。
長年の、果たしたい目的が」

呟くような声は、けれどすぐそばで囁かれたかのごとく僕の耳に

届いた。

ドアを開いたまま、彼は声をあげて言い残した。

「そうそう、ボクも学校には通っているんだ。会うことになったら、よろしく頼むよ」

後に残された僕は、去っていったドアに向かって、静かに頭を下げた。

ずっと、頭を下げていた。

2 .

視界に広がる蒼を、虚ろな目で見つめている。

ぼんやりと漂う意識の中で、ゆったりと揺蕩う僕。

「黒澄君!!!」

月下所長の声が響く。

駆け寄ってきた足音はおそらく二つ。

首を動かす気力さえない僕には、上から覗き込まれるまで、顔を確認する事すら出来なかった。

一人は月下美人さん。

眼鏡が可愛いらしい女性と表現できる。

待機していると聞いていたので、まあ不思議がることもない。

もう一人は、知らない女性だった。

「……………」

「喋るな。頭が動くとまずい。……………まったく、二人して無茶をする

……………!!!」

額に翳された両手が遮り、顔の全容を見ることは出来なかったが、大きく開かれた指の合間から見えたのは、ポニーテールのように結われた蒼髪と、つり気味の目つき、全体的に鋭い雰囲気纏った、侍のようなお姉さんでした。

手を翳された額からは、冷たく傷口をいじられているような、壊れた機械を組立て直したような感覚。

しかしそれで、そもそもあまり感じていなかった額の痛みは完全に消え、どこと無く感じる重さだけが残った。

「これでよし。構造的には再構築できた筈だ。後は本人が意識を取り戻すかだが……」

……なんだ、気絶してると思われてたんだ……。

「……大、じよ……夫です……」

紅さんに頭を撃たれて倒れた僕は、待機していた治療が可能な能力者から、治療を受けている。

……現状の把握も充分だ。

「……！！……お前な、私の“修復”を受けたのならば、痛みが酷くて意識を保っていられない筈なんだが……」

何を言っているのかよく解らない。判らない。分らない。

ぼんやりとした頭では、あまり多くの事を考えられない。

支離滅裂……“言葉”が、ではなく“意識”が、バラバラに引き裂かれているような感覚。

だが、肉体の痛覚の何割かが精神的な痛みに変換される僕にしてみても、これくらいでは意識すら失わない。

痛みはストレスとして認識されているのか、僕の持つ大容量に僅かに積み重ねられた程度の物でしかなかった。

「……ね……さん」

口を開いて名を呼ぶ。

ポニーテールの女性には、「む？ 茜音の奴なら今、所長にボコボコにされているが……」と言われた。

“茜音さん”と言った訳じゃないんだけどなあ……。

本当は姉さん、と呼ぼうとした……筈なのだが、声を出す事もままならない程に意識が混濁していたらしい。

ただ、ボコボコにされた紅さんを想像したら、思わず笑ってしまっ
いそんな光景が目に見えなかった。

彼をボコボコにする美人みごとさんは、まるで想像できないけど。そうやってる内に、担架が運ばれてきて、僕を乗せて帰っていく。

僕だけを、運んでいく。

「……姉……さん……」 ああ、もう現実逃避はやめよう。

答えてくれる声はない。

応えてくれる、声が。

「……姉さん……!!」

……居ない。

声だけではなくて、姿も見えない。

影も形も見えない。

最後に何かを呟いた姉の、その儂げな表情が頭から離れない。

不安。

いや動揺。

いや絶望。

「……なんで、姉さんが……そんなのは、嘘だ、夢、醒めて、見えない、世界が、奪うな、僕を、僕が、僕の、僕から、僕だけ、僕には、僕、僕は、僕は ツー!!」

支離滅裂なのは、僕の半身がないから。

たった一人の家族が、居なくなっただから。

関係のない光景を思い浮かべてみたのも、意識が混濁していたのも、同じ事だった。

現実逃避。

璃尾のいない現実から。

世界から逃げた少年が、自分の世界からさえも逃避した。

ただ、それだけの事だった。

この時、本当に消えてしまっただったのは、意識なんかじゃなく、僕自身だったのかもしれない。

この日、《黒澄璃尾》は……僕の姉は、いくら声をかけても、二度と返事をする事はなかった。

3 .

それは、幾何学的に非科学的な部屋でした。

手に小さく折り畳まれた紙を握りしめ、予定より一足先に退院した僕は、一階のホールから“指定された”エレベーターに乗り込み、落ち着いて階数を告げた。

「高速無音で上昇する昇降機により、身体に重力がのしかかる。」

「その後も特定の階数を細かく順序的に上下し、そして最後に、記号と数字を宣言する。」

「地下、」
地下十三階。

存在しない筈の最下層、地下十階よりも下の階。

普段ならば、口にしてもエラーが発生するだけの隠された暗号だが、渡された紙に書かれた手順を踏む事により、行けない筈の隠された階に辿り着ける、という、なんとも

「幼稚な仕組み。それ故に効果的でもある、ですね」

呟いた言葉は、いつかの時のように鉄箱の中で反響する。

皮肉にも、あの時と同じで姉はこの場にいらない。

……さっぱり笑えなかった。

気持ち悪い浮遊感にも徐々に慣れてくるが、元々相当な気持ち悪さに襲われていた僕には、あまり変わらない話だった。頭に異常がある訳じゃない。

どちらかといえば、精神的な方の理由だった。

さて。

十と三つ。

割と不吉そうなその数字も、今の僕にとっては、取るに足りない。既に地下に入ったらしい。

身体に掛かる重力に従い、徐々に徐々に、壁にある画面に表示された数字が、数を増していく。

八、九、十……。

「……十三。ようやく着いた、ここが」

図書館、と彼は言っていた。

開いたドアの向こうは非現実。

薄暗い部屋は、まるでホールのような広さ。

四方八方、前後左右と“上下”に広がる巨大な書架。床には、その上から透明な板が張られているらしい。

その中で、僕は見た。

この部屋の主を。

目的の情報を探し出す事が不可能ではないかと思える量の、言語すら分らない本達の主。

しかし、既にそれらを読む必要などない程に、その知識を頭の中にしまい込んだ青年。

部屋の真ん中。家の書齋に置かれているような机に腰掛け、こちらを待ち構える金髪の男。

瞳は赤。僅かに気怠けだるそうなイメージを抱かせるのは、目尻がどことなく垂れているからだろうか。

どこにでもいる大学生のような服装は、やや紅さんのセンスに近いが、そこからくるイメージの質が、まるで違う。

あの人は分かりやすくシンプルだったただけだが、この人からは逆

に底知れない何かを感じる。

彼の纏う神秘的な非現実がそのアンバランスさを生み出しているのだと気づいたが、その時にはもう、黒縁メガネの向こうから見つめる彼は口を開いた。

「初めまして、黒澄理緒君。僕の名前は《黄朽葉 柶榴》。さあ、いつまでも立ってないで、こっちに来て座りなよ。ああ、すまない。お茶は無いんだ、悪いね」

こちらの返答を待たずして喋りまくる彼は、随分と饒舌な人物だった。

こんな、誰も来ない地下に閉じこもっているのに。

極々自然に、教えてもない僕の名前を呼んだ彼は、歩み寄る僕に対して大仰に迎えた。

『ようこそ、少年。僕の “私設書庫” に 』

《to be continued》

第九話 『暴力的謀略』（後書き）

次回は世界観の説明が入るかもしれませんが。

第十話 『倫理の檻 - Taboo -』（前書き）

原案を考えていた外伝的な別作品を書こうかなー、などと考えています。

更新が尚遅くなるかも知れませんが、見てる人もあんまりいないみたいだし……どうしましょうか？

書くとしたらタイトルは『CRASH』（スラッシュクラッシュ）か『Wing of Words』のどちらかだと思います。

つたない駄文ですが、何卒、お目汚しお許しください。

1 .

「 ようこそ、僕の《私設書庫》へ 」

僕が白墨庵しろすみいぢから受け取ったメモに書かれていたのは、図書館であるこの場所への行き方と、そこには主である《私設書庫》と呼ばれる青年が居るらしいという、まるで噂のような走り書きだけだった。「……だけど、辿り着けたのなら重畳、といったところかな……」
まったくもって、その通り。

「……？ どうかしたのかい？」

「いえ、なんでも」

歩み寄る僕はそう言いながら、彼 《黄朽葉柶榴きくちはは びやく》の近くにたどり着く。

「よっ、と」

机から飛び降りた黄朽葉さん。

ここは、トラッシュバンカービル地下十三階《私設書庫》。

この気怠げな青年の引きこもる特別室であり、この世界で いや、大抵の世界を含めても評価の変わらない、世界で最も知識を保有する男。

《私設書庫》。

それは、究極の個の一形態の名であった。

「君が此処に来たという事は、知ってる誰かから聞いたんだろうけど……そこは聞かないルールなんだ……」
「……って、僕自身のルールを君に言っても仕方なかったか。ゴメンゴメン」

「……いえ」

……軽薄そうに見えて、その腹の底はまるで見えない。

勧められるままに従ってソファ―に腰掛ける僕。

油断は禁物だ。まだ、彼が敵になるか味方になるかの判断がつかない。

何をしでかすか分からない人間に対しては、接触は慎重に

「……あの、黄朽葉さんは、どうしてこんな所に住んでいらっしやるんでしょうか？ まるで　そう、人を、避けるみたいに」

だから、“慎重に^{えい}判^くって”みた。

「……ここに居る、理由？ ああ、簡単だよ」

歪んでいた口元は真っ直ぐに引き伸ばされ、半開きの眼^{まなこ}が携えていた微笑みは、もはや面影を潜めていた。

敵意のような殺気のような、冷たい空気が部屋の中を蝕むように這い回っている。

……いきなりとんでもない事をした気がするが、今の僕は瑣事に構う余裕がない。

僕の行動理念にして、生きる目的　そう、

姉が　璃尾が、世界に知られてしまった。

大前提が崩れた。

見るも無惨に。

修復の仕様もないほどに、どうしようもないほどに、徹底的に木っ端微塵に砕け散った。

あかねくれない
茜音紅に気付かれ、

つきしたみひと
月下美人に聞かれ、

“誰とも知らぬ誰か”に知られた。

……最悪じゃないか。

“口を封じ”ようかとも考えたが、最後の誰とも知れない、担架を運んでいた複数人が分からない。

僕の処遇なんて知ったことじゃないが、それだけはマズ過ぎる。ただ、それでもいい。

妥協はしないが、こうなってしまった以上は、それこそどうしようもない。

だから、どうでもいい。

例え僕が、自分自身の世界に孕^{なか}んでいた秘密を全て、世界に晒け出すことになったとしても。

いなくなった姉を、取り戻してみせる。

いや、取り戻す。

何があっても、絶対に

その為に、まずはこの男の人格を見定める。

危ない橋だが、「無遠慮にすみませんでした」とでも言っておけばどうにかなるだろう。

「ふうん、考え事かい？ まあ、いいけどね」

そう、踏んでいたのだが。

ニヤリ、と。

この青年は、擬音が聞こえそうなほどの笑みを、再び口元に刻んだのだった。

「……え？」 いつの間にか、先程の剣呑な雰囲気があるで嘘のように、元の飄々とした態度が場に戻って来ていた。

ああ、間違いない。“嘘のように”？ いや、真実あれは偽りだ。

単に、彼を試そうとした僕が、逆に彼に試されていたのだというだけの話。

彼は随分と愉快そうに口を開く。

悪いね、と言う黄朽葉さんは、あまりに愉快過ぎて滑り出した口が止まらないらしい。

「釣り人と魚。人が魚を釣ろうとしているのか、魚が人を釣ろうとしているのか」

「……釣り上げた方こそが釣り人ですよ」

……それでも止まらない。

「あるいは、顕微鏡越しの研究者とウイルス。研究者がウイルスを

観察しているのか、ウイルスが研究者を観察しているのか」

「……研究者はウイルスを見渡せますが、ウイルスは研究者を一瞥できません」

……まだ、止まらない。

「深遠と君。君が深淵を覗き込むその時に、深遠もまた、君を覗いている」

「う……深淵の底は、常に上を向いているというだけです……いえ、この質問だけ、前二つとは趣が違いますね？」

「おや、分かったかい？　だがそれとは逆に、今の質問で僕は君を理解したよ。非常に僕好みで興味深い　歪み方だ」

……今、僕も貴方を理解しました。

この人は、間違いなく性格が悪いです……。

いうならば、僕に少し似ているのかもしいない。

いや逆か。流石に僕では、彼に及ぶべくもない。さて、ようや

く話が止まった。今度はこちらのターンだ。

「申し訳ありませんが、何分僕には時間がない。単刀直入に聞きます。　僕の姉は、どこですか」

おいおい、勘弁してくれよ、みたいな表情で肩を竦める黄朽葉さん。

「別に僕が何かを隠したって訳じゃ……ああゴメンゴメン、睨まないでくれ、黒澄君。大丈夫、」

時間はあるよ。時間はね。

……その一言。

そのたった一言で、おめでたくも僕は、さっきまでの覚悟が呆気なく霧散した。

味方。

僕は彼を、そう定めた。

安易過ぎるのも自覚はある。

だけれど、本当の所を言うならば。言わせてもらえるならば。まるで精神的な余裕の無い今の僕に、誰かを敵に回す事なんて真似は、到底できやしなかったのだ。

2 .

「と、いうわけなんです……」

僕は黄朽葉さんに、この世界に来る前と来てからの動向を、詳しく口述した。

ただし、璃尾についてはまだ伏せている。

とはいえ、別にこの期に及んでまだ口にするのを渋っているなどと言っ訳ではない。

単に、話の流れの上で本題を後に持つてきただけだ。

強いて言うならば、“伏せている”ではなく“言っていない”と
言うべきか。

しかし、とはいえ、まったくもってどういう事か、どうも彼は、僕がこの世界に来てからの一切を知っているような雰囲気なのだ。

僕は、「聞くまでもない、って感じですね？」と聞いてみたのだが、「うん、まあね。この世界で知らない事も、分からない事も多い。その為に、僕は《蒼》^{こゝろ}にいるんだからさ」と、さりげなく話を流されてしまった。

しばらく会話をして分かったのは、「知識の収集には彼の特異能力を用いているらしい」という辺りまで。

それだって、彼が知られても構わないと判断したから口にしたに過ぎないのだとは予想がつく。

いや、そうとしか思えない。そうとしか考えられない。

それほどまでの腹の読めなさなのだ。

例えるならば。

あの、《月下美人》のような。

全てを知りながら尚、何事も無いかのように腹の内に納めるその底知れなさ。

人として、あらぬ方向に道を踏み外したような、異端な異常さ。それが進化の道程によりもたらされた物なのかどうかは、僕には分からない。

だが、話にならない程の歴然とした“存在の格”の違いのようなモノは、僕にでも感じとれる。

その彼が言った。

時間はある、そう言って笑った。

ならば、間違いない。

例え虚言を吐く事があつたとしても、間違っている事なんてある筈がないのだから

白墨さんが僕をここに導いたのは、彼の事を聞いたことがあつたからかもしれない。なんて、そんな事を考えていた。

そして、いよいよ本題に入る。

それについてすら知っている可能性が高いが、止めなかったのは、この世界に来る前の話を知らなかったからだろう。

そう考えて、生まれてから今この世界に来るまでを、大まかに説明した。

自分の生涯を語るなんて、初めての経験だ……。

「そして今、僕は貴方に会いに来たわけです」

白墨さんの要望通り、彼の事は伏せたままだ。

恩があるとはいえ、彼にここまで義理を果たすのは、もしかしたら憧れのような感情のせいなのかも知れない。

彼との二度目の接触以降、僕は彼に惹かれるモノを感じている気がする。

……いくら綺麗な人だといつても、僕は男性には興味ないハズだ。琴塚君のような、そういう友人もいたんだし。

だから、この感情は憧れのようなモノだと思っただが……それに
しては、なんか胸が苦しいような……。

ブンブン、と嫌な想像を掻き消すために頭を振る。

……はて。

いきなりの妙な行動にも、意地の悪そうな彼の声が聞こえてこ
ない。

見れば、対面のソファ―に座ったまま視線を俯うつむけて、何事か思案
にくれているようだった。

「どうしたんですか、黄朽葉さん」

僕の問い掛けに気付くと、重々しい感じで持ち上げられた視線が、
ゆっくりこちらに向けられた。

嫌な予感。

嫌な予感しかしない。

「ハツキリと言うよ 君のお姉さんは もはや、この世にはい
ない。それどころか、この世界に“幽霊”なんてモノは、存在しな
いんだよ」

初めから死んでいるんじゃないかとか、もうこの世にはいないだ
とか、そういう笑い事ではなくて。

僕の頭の中を満たしているのは、もつと暴力的な単色だった。

『 時間はあるよ、時間はね 』

それは、そういう意味なのか……？

全てが既に手遅れで、今更時間は関係無いって、そんなふざけた
事を言うというのか !!

……姉さんなんていない？ ……いる筈が、ない ?

赤。

やがて白。

そして最後に、黒。

明滅する視界からようやく視力を取り戻した頃、僕はソファに寝かせられていた。

起き上がるうとする僕

「……ゴメンな。もう少し言い方を気遣えばよかったかもしれない……」

やっぱり、性格悪いんだよ、僕は。

黄朽葉さんは、そう言って苦笑した。

どうやら僕は、何かを聞いて倒れたらしい。

倒れた感触は、しなかつたんだけどなあ……。

僕は、確かに此処にいる筈なのに

「なあ、黒澄君」

「……なんででしょうか」

「さつき、僕がなんで“こんな所に居るか”って聞いただろう？」

「……ええ」

気まずい話題をまた持ち出してきた彼。

「……僕が“此処に居る”のはさ、“贖罪”の為なんだよ……」

「食材？」

「……人生の先輩の話は真面目に聞いといてくれよ……」

すいませんでした。

「まあ、いいや。……昔、随分色々と酷い事をやっちゃってます。持てるだけの知識と情報と思考をもって、未来を読んで、要らない犠牲を大勢出して、その上僕は彼らを気にも留めなかった……」

「……」

僕は無言。

この人の心に踏み込んでいくに足る“何か”を、まだ持ち合わせていない未熟者だから。

「だから、困っている人を助けて、罪を償おうとした。此処はね、黒澄君……僕にとつての牢獄　いや、地獄なのさ」

“ここ”ではなく、“此处”。

確かに、自分が在るべき場所。

彼は、諦めている。

いや、諦めとは、少し違うか。

“受け入れている”。

自らの業を。

《黄朽葉柘榴》は、それが贖罪の道だったから逃れる事が許され

なかっただけ。

でも、僕は

「　いいんだ、君は。君のやりたいように、やればいい　」

その言葉は、咎人を縫い止める杭のように、あるいは、深淵の底に差し込んだ一筋の光のように、僕を許した。

僕は許された。

罪は一つ。

いない人間を見つける為に、今までの全てを捨てる覚悟。

だが、僕にとってはそれすらも救いになる。

この時　この時だ。

この時ようやく、僕は人間らしく生きる事を許された。

生きる事を。

「……なんだ、こんなにも簡単な事だったんじゃないか……」　世
界から、逃げる。

しばらくは、必要なさそうかな……。

「……一つだけ、君のお姉さんがまだ助かる可能性がある」
しばらくして落ち着いた僕に、黄朽葉さんは告げた。

「え？」

一瞬、言葉の意味を理解できずに、「ほ、本当ですか!？」
食らいつくように詰め寄る僕。

「お、落ち着いてくれ、可能性つてただけだ」

無理矢理に引きはがされた僕は、頭の中がさっきのような混乱に
包まれてしまっていた。

助かる、姉、可能性、璃尾、会える……自分でも把握できないよ
うな数の言語たちが、頭の中でグルグルと渦巻いている。

「それで、その方法って」

「まず君が知らなきゃいけないのは、この世界についてだ」

「……………うあ」

……確かに。方法だけ聞いたとしても、知識がなければとてもじ
やないがそれを実行できないと思う。

四則演算すらできないのに、関数を理解しろと言っても無理に決
まっている。

「教えてあげよう。この世界の仕組みを、この《私設書庫》が！」
いささか以上に芝居がかった声で、相手を迎え入れるように両腕
を開いた彼は高らかに謡う。

ええ、よろしくお願い致しましょう、咎人さん。

全ては、終わりに向けて歩を進める。

僕は、この世界に生きている。

それは璃尾のおかげ。

そして姉さんのおかげ。

だから、

『僕は姉さんを取り戻す。一人にさせない　その為に!』

»
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
»

第十話 『倫理の檻 - Taboo -』（後書き）

説明を書くといいましたが、書くのが遅いのと文量的に次回まで引
つ張ります。
済みません。

第十一話 『世界 - Seven colors -』（前書き）

後半の世界観説明。

つまみなくてすいません。

あ、あと。

『この物語はフィクションです。実在する一切の固有名詞とは関係ありません』
一応。

1 .

「君は、この世界がどうやって出来たのか知っているかい？」

彼、《黄朽葉柶榴》はそう聞いた。

僕 《黒澄理緒》はこう答える。

「いいえ。黄朽葉さんはご存知なんですか？」

当然、僕ごときには想像もつかない。

だけどこの人ならば、或いは。

……そんな冗談みたいな事を想像してしまうほど、彼は飛び抜けて超越していた。

だけど

「まさか。知らないよ、そんなこと」

あ、やっぱり知らないんですか……。

何を期待していたんだろうと自分に呆れる僕に、黄朽葉さんはこう語った。

「知らないっていうより、そもそも“始まりなんて無い” ンだけどね」

始まりが……無い……？「うん、無い。世界ってのはさ、終わっても始まりも無いんだ」

世界は、終わらない。

「……それは、どういう意味ででしょうか」

「よしよし、頭の回転は速いようで結構。えーとつまり、世界ってのは始まりが無いんだ。初めからそこに在るモノ、とでも言えはいいかな？」

「初めから、“在る”……」

「そ、初めから在る。始まりがあるモノは終わりもまたあるけれど

も、初めから当然のように在ったモノは、当然のようにいつまでも在り続ける。ほら、例えこの星が砕け散って、宇宙が消し飛んでも、時間やら虚空やらは残る。例えそれが消えたとしても、最後には“無”という概念が残り続ける」

「……まあ、“屁理屈”みたいな話ですが、言わんとしている事は分かります。“不生不滅”、ですね」

「詳しいね、仏教用語か。『何ものも生ぜず、また滅びない』……まあ、そこまでの“空虚”であるとは言わないけどね。さて、

この世には、って言い方は変かな……まあいいや。とにかく、この世には、三つの世界があるって話は聞いたよな」

「ええ、美人さん達から一応。……そういえば、黄朽葉さんって《仮想階段》の所属なんですか？」

「こんなビルに住んでますけど……」。

「いいや、個人的な知り合いは多いけど違うよ。僕は、“個人”に対する情報提供での手助け” しかないからね。まあ、不祥の弟子も居るけどさ……」

不肖ではなく不祥。

不祥とは、不運とか悪い出来事とか、そんな感じの意味。

……流石にそんな事までは聞いていられないので、話を促す。

「ゴメン、脇道に逸れたか。ええと、そう、三つの世界だ」

改めて説明しよう。

そう言った彼いわく、

『世界は、大きく分けて三種類に分類される。』

《異界》、《平行世界》、そして《並行世界》だ』

「……？　ハイコウセカイってというのが被ってませんか？」

「同音異義なのさ。あ、いや、本来の意味なら同音同義にも成り得るのか……。まあ兎にも角にも、最近はその三種類あるんだよ。解りやすいのが一つに漢字違いが一組、ね。……一気に続けるよ？」

その後の会話を、要約するとこんな感じだ。

『《異界》とは、自らが属する世界を基準とし、相対的に見てその基準とは異なる法則が支配している世界群の総称の事である。

基本的には他の世界との繋がりには《ロジックウォール》と呼ばれる情報素子で構成された隔壁によって断絶されていて、それが異界と呼称される条件でもある。

《ロジックウォール》以外の“壁”による法則の遮絶された空間を“結界”と呼び、その場合の“壁”もその原理や性質がなんであれ、同じように“結界”と呼称される。

異界には、大きく分けて物理的異界と概念的異界の二種類がある。物理的異界は現在、《BLUE EARTH》から始まる七つの大世界が有名。

概念的異界では、人の意識上に肉体という殻で隔絶された《精神世界》や、科学技術を応用して無機物で創造した“壁”の中に形成される《電腦世界》などが身近にある例である。

人が作り出す異界として、一般にあまり認識されていないモノでは、寺社等が有する《神域》、世間から隔離された閉鎖的施設などが挙げられる。』

……………要約？

絶対嘘だ……………。

「つまり、自分の世界とは法則の違う世界を《異界》と呼ぶ、と まあ、異界についての説明はこんな感じかな。……………分かったかい？」

いえ、さっぱり。

「だろうね。僕でもなければ初耳で理解は無理だよ、やっぱり」
「じゃあなんで説明したんですか……………」。

「よし、次の平行世界と並行世界の説明いってみよう」
って、聞いてないよこの人！

「世界はね、本当に無限に存在し得るんだ。僕等が認識出来るモノから認識が出来ないモノまでね。そうだな、“音”みたいなものかな？ ほら、『可聴領域と超音波』の関係とか。ああ、そもそもが遠すぎて聞こえないってのもあるんだよねえ」

喋り始めたら止まらない。

それが『黄朽葉 柘榴』。

『《平行世界》とは、とある世界を“基準”とし、その世界周辺を次元的に観測した時、基準と平行に存在している世界、その中でも特に世界の法則が“基準”と同一でありながらも、違う歴史を刻んでいる世界群の総称。

世界とは、何も無い宇宙の様な空間に一筋の流れとして存在している。

そして平行世界同士は、概念上は隣り合って存在しているが実際には莫大な隔たりがある。

宇宙の広さと惑星、もしくは太陽系間の相対的な距離の比較を考えれば間違いないだろう。近くに在るようで絶対的な程に遠いのだ。少なくとも、“星の寿命”程の時間を持たない人類という種では不可能だろう。

そしてそれら全ての流れは、更に大きな流れの中にある。

拡がりつつける宇宙そのもの、或いは逃れられない“時間の流れ”だ。

“時間”、つまり“可能性因子の流れ”は、無限の可能性そのものとして拡がり続ける“宇宙”と同義である。

可能性とは時間、宇宙と同じモノなのだ 』

「自分の世界と法則は同じだけど、歴史が違う世界を平行世界と呼ぶ。……並行世界も続けるよ？」

『《並行世界》とは、《異界》と《平行世界》両方の性質を持つ世界である。

隣り合った鏡面でありながら、その内部は、《創造主の気が狂ったのか》という程に異常な空間が成立している。

本来、人の想像、妄想等の精神世界の中に限ってのみ存在しうるが、“人の想像を創造に変えてしまう”現象が発生した事によって現実に誕生した。

一つの世界につき最低一人、アーキタイプ原型を構築した“想像主”が存在する』

「並行世界はね、ただ並んでるっただけの世界なんだ。だから、他の世界とは殆ど関係性は無いんだよ」

……関係、無い。

それは

「異界や平行世界には終わりなんて無いよ。どころか、始まりすらも存在しない。

無限なんだ。初めも無く、終わりも無い。

ひたすら永遠に続く世界、世界、世界」

「……ただ、そこに在るだけ、ですか……」

「そ。だから、違う。並行世界は、人によって“創られた”世界だ」

「そうか……創られたというのならそこが始まり……そして始まりが有るなら終わりもある……」

「さすがだね、その通り。人が創ったのなら、そこには必ず理由がある。例え夢だったとしても、その夢を見た原因って奴がね。そして存在理由が有るのなら、それを果たした時が寿命って訳。ラスボス倒してゲームクリア、ってね。並行世界は、誕生したその時から、夢の終わりまで収束して行くのさ」

成る程、確かに世界の仕組みについての知識は深くなった。

「だけど、これのどこが役に立つんですか？」

「ん？ 立たないよ、全然」
え？

「ぶつちやけ、《異界》以外はあくまで仮説の存在だしね。平行世界から来たらしい君が、有り得ないほど特殊なだけだからさ」

「ええっ!？」

2 .

「……じゃあ、本題に入るよ？」

先の会話から十分後。

部屋の隅に向かって体育座りを敢行していた僕を、黄朽葉さんが力づくにソファーに引き戻していた。

「……はい。黄朽葉さんって、性格悪いんじゃないですか？」

「よく言われる。今度のは君にも関係あるから、よく聞いておくこと。世界っていうモノは、《可能性》^{エーテル}によって構成されている。それは、世界に含まれる僕たちも同じだ。彼らに聞いただろう?？」

「ええ。間宮ちゃんは、“記憶媒体の容量”のようなものと」
「八十点」

……急になにを紅さんみたいな事言い出すんだろっ。

「いやあ、こつちの話。まあ、もっと分かりやすく言い換えれば、『磁力と砂鉄みたいなモノ』だね」

「どういう意味なんですか？」

磁力が砂鉄を集めるように、エーテルの塊には物質が付随する。それが、この世に“存在する”ということ。

エーテルはいわば、全ての存在に共通する魂のような物。

個体による僅かなエーテルの配列パターンの違いは個性と呼ばれ、

それは本質として存在し続ける。

磁力たましいが無くなれば砂鉄からたが崩れ落ち。

逆に、磁力たましいがあるならば砂鉄からたが集中する。

外側と内側、入れ物と中身　ではなく、切っても切り離せない

“原理”と“現象”。

人の魂である幽霊が存在しないとは、そういう意味だ。

それが魂であるならば、実体を持っていなければならぬ

これが、黄朽葉さんが僕に語った事の全てである。

矛盾。

存在する筈のない、実体を伴わない魂。

砂鉄を引き寄せない磁力。

幽霊。

なんて間抜けなんだ。

ずっと昔。

子供心に決めつけた結論を、今までよくもまあ疑いもせず……。

「君のお姉さんが本当にいると仮定するなら、成長する事といい、

君の“中”はいに入れる事といい、幽霊じゃなくて、精神が魂が二人分

身体に入っているのか……。

いや、前者で決まりかな。後者は、まず起こり得ないし」

……《私設書庫》の定めた結論は。

二重人格。

一人の身体に二つの精神が存在する状態。

肉体、魂、精神の、人を構成する三要素に重複がある状態。

……姉は、真実偽りの存在であると告げられた。

「それは違う」

解りやすくも顔に出ていたのか、僕の思考を否定する黄朽葉さん。ハツと顔を上げて、彼の顔を見る。

「僕が口にしたのは、あくまで一番可能性が高い仮説だ。正しいとは限らない」 それに

「“肉体”でも“魂”でもなく、“精神”の要素が重複してるって事は、君の中には確かにもうひとつ心があるって事だ。それを、蔑ろにはしていない」

ああ、その通りじゃあないか。

それはおそらく、僕の勘違い。

何を捨てても取り戻すと誓った。

だったら、そんな些細な認識のズレ、気にする程の事でもないっ
ていうのに。

「……それで、一体何をどうすれば姉さんは戻ってくるんですか？」

「……何もしなくて良い」

……え？

「……多分《黒澄璃尾》は、“力”を使ったせいで疲れているんだ
と思う。おそらくは、今も“君の中で”眠っていて いずれ目覚
める。後は時間が解決してくれると思うよ……」

ええと、つまり

「……それって、何もしなくても、時間が経てば元通りって事です
か？」

「うん、元通り」

「……」

今度こそ、僕は部屋の隅に突撃を開始した。

3 .

「……グスン」

結局の所、話を長々と聞く意味はなかったと知り、絶望にうちひしがれている僕。

「ごめんごめん」

なだめるように話しかけてくる彼。

「……僕がここに来る意味なんてなかったんですね……ありがとうございます
ございました、黄朽葉さん」

「それでは」といって帰ろうとした僕に、黄朽葉さんが声をかけた。

「ああ、そうそう。さっきの可能性因子エーテルの話なんだけどさ」

「……なんですか、黄朽葉さん」

疲れたので早く帰って寝たい。

これでも退院から直に来たんだから、そりゃあ疲れも溜まります。だから、言い方が少しぞんざいになってしまったのには、目をつむってもらいたい。

「『世界の原理も物質も、可能性エーテルという未知で万能のエネルギーによつて構成されており、ありとあらゆる事象は“可能性”があつて初めて成り立つ』」

「……？」

確か《可能性因子論》の原文だと、さっき聞いた気がする。

「そんな、“既存の学問全てを否定して敵に回す”ような理論を、誰が発表して矛盾なく説き伏せて認めさせたのか」

「……一体、何を言いたいんだらうか？」

まるで意図が読めない。

それでもまだここに留まっているのは、先程の件で彼に対して感謝を感じているからだが。

「新歴二十五年の五月 丁度五年前の今頃だ。“彼”はどこからともなく現れ、あらゆる学者を集めて論文発表した」

本来ならば誰も来ないような馬鹿げた内容だったが、巧妙に贈り先毎に内容の違う招待状を送り付けた。

医学関係者に対しては、『今まで治療法のなかった 病の治療

法が見つかった』だのと送ったり、数学者には、『超難問を解いたので検討して欲しい』などと書いたりした。

そして嘘は一つもなく、集まった学者達にとんでもない理論を説き伏せた。

あらゆる学者一人一人から批判をうけて、それを自らの理論で逐一論破してみせたのだという。

「そして、いやがおうにも“可能性因子論”を認めざるを得なくなった後に、彼は姿を消した。消されたという噂も聞くが、違う。アレは、それを察知して逃げおおせたんだよ」

そして遂に、立ち尽くす僕の背中に、忘れていた事を思い出したような声色で言葉を投げつけた。

「彼の名は確か 《サキラ・K・ブラッククリア》。偽名だろうね。特に、《ブラッククリア》なんてアレな感じの名前を恥ずかしげもなく名乗ってたぐらいだし」

「っ!?!」

ああ、彼はなんて

「……やっぱり貴方、性格悪いですよ」

「悪いね、自覚はある。でも、自分で嫌になるくらいは“生れつき”なんだ」

心底困ったような、にもかかわらずどこと無く笑っているような表情。

それを見た僕は、

「ああ、これも彼の本質なのかな」

なんて、そんな見当はずれなことを考えた。

それは間違いなく気のせいで、思い違いは僕のせいで、しかし彼がそうだったのもまた、誰のせいでもなかった。

本質なんて、本人にしか解らない。

本当なら、本人にすら分からない。

自然に気づくのは、特異な人間だから。

だから、僕はこの人に話しかけた。

「また来ます 救いを求めて」

贖罪でしか他人と関われない。そんな彼に対する、僕なりの気遣いだった。

だというのに。

「 いや、何もなくても、また来てくれて良い」

「……えーと」

「君とは長い付き合いになりそうな気もするしね。……それとも、嫌かな？」

……いえ、

「 また、お会いしましょう」

そうして僕は、彼の居を去った。

再会の約束と、確信じみた予感を残して。

今の僕に、あの時のような力は無いけれど。

全てを知る姉は、いまだ夢の中でも。

僕は世界に馴染み始めて、姉は世界に知られてしまって。

父さんが生きているかもしれない。

知らない世界に来てしまって。

有り得ない力も見えてしまって。

友達ができる。

死にそうになって。

現実感なんてまるでなくて。

そう、現実感なんてまるでない。それでも、僕は

『 それでも僕は、此処にいる 』

第一章

『Not Nonfiction』

完

《to be continued》

第十一話 『世界 - Seven colors -』（後書き）

……ぶっちゃけると、ここまでがプロローグでした。

次からは第二部、『School days（仮題）』が始まります。

猟奇殺人事件やら陰謀やらなにやらが渦巻くR-15タイムです。
学校生活編なのに。

……スクイズじゃないよ？

外話 『新たな日常 ある日の子守唄』 (前書き)

二部に行き詰まったので外話です。すいません。

しかもこつこつという話書くのも未熟です。すいません。

その為、二週間も掛かりました。すいません。

二部は構想に時間が掛かりそうなので、別の作品と平行して考えようと思います。これは本当にすいません。

心よりお詫び申し上げます。

『ともあれ、届かないモノを求めるのは、別に悪い事じゃない
』（黒澄理緒）

1 .

ところで、この世界のゴールデンウィークは七日間ある。

年号が新歴に代わると同時、暦の上ではいくつかの変更点が生じていて、三十年前までは五日前後であつたらしい連休は、一週間の長い休みとしてその姿を変えている。

その中で僕は、随分と普通じゃない経験をする事となった。

まあ、もともと僕自身の方があんまりまともじゃなかった節はあ
るんだけれど。

ちなみに、僕の世界恐怖症が大分改善されたあの一件以来……璃尾は、まだ起きない。

僕の特異能力にした所で、璃尾が目覚めなければ、何も分からない。
い。

だから、今の《黒澄理緒》はただの少年のはずだ。

昏睡した姉の目覚めを待ち続ける、ただの少年。

これから始まるのは、そんな僕が、まるで予想だにしていなかった事態 覚悟はしていたが、その覚悟がちつぽけなモノでしかなかったと思ひ知らされたあの非日常の事件 それに巻き込まれるよりも前の出来事でした。

「ああ、そうでした黒澄くん。貴方には今度、雪貴と一緒に任務に行つてきてもらいます」

それが、美人さんが雑談の終わりに口にした言葉だった。

「……任務、ですか」

五月七日。

この四字がどういう意味かは語るまでもないだろう。なんのことはない、今日の日付である。

ここ、トラツシユバンカーの《仮想階段》所長室で行われた会話の始まりは、月下所長の些細な一言によつてもたらされた。

「ええ、任務よ。訓練が終われば、出る事になるつて言つてたでしょう?」

それは……確かに。でも、

「……ありがとうございます。ですが、僕には戦闘力が……」
殆ど無い。

事実としては、例の件以来、僕の《世界恐怖症》が軽減され、運動能力等の出力も制限が少なくなつてこそいる。

が、それはただの人間としての範疇であり、僕が目の当たりにした《特異能力者》の力には到底及ぶべくもないと分かりきつていた。高校生の平均より秀でた程度の運動能力で、弾丸を無力化する炎の壁に挑むというのは無謀でしかない。

いや、無謀というより、見ていた人間が「何がしたいんだ?」と疑問を感じるレベルで理解不能な行動だと思う。

《特異能力者》も人間の範疇にある存在だとはいえ、丸腰の人間程度では比肩などできる筈もない。

その旨を伝えると、月下所長はこう言った。

「大丈夫よ。私の個人的な知り合いに、こういつた事に詳しい人が

いてね。その人の話によれば、外部から命の危機を感じれば、貴方のお姉さんも目を醒ますかも、って」

「大丈夫な理由が見当たりませんし、なにとんでもない事言ってるんですか……」

知識の豊富な個人的知り合い……《黄朽葉柶あかし》の事だろうなあ

そりゃあ知ってるでしょうよ、僕が相談しに行きましたし。

今度、遊びに行こうかな……菓子折りでも持って。

……いやいや、そうじゃないそうじゃない。

大事なのはそこじゃない。

僕の命の危機で、姉さんが起きる可能性？

僕も知らない事を、美人みひとさんの口から聞く事になるとは思いもしなかった。

まあ、信憑性だけはある情報だけど。

……あの人、本当に必要最低限の事しか言わないんだ……性格悪いなあ。

……菓子折りは止めて、お茶の葉でも持って行こうかな。お茶が嫌いだって言ってたし。

とかなんとか考えていた僕に、彼女は告げる。

「決定事項です」

決定事項ですか。

「決定事項です」

それは、拒否権やらの一切の行使が不可能という意味で？

「はい」

……えー。

「……ニツコリと擬音がするほどの良い笑みを浮かべる月下美人所長に、私は一抹の不安を感じずにはいられない」

「？何を言ってるの？」「……元の世界の友人の真似です」

僕の友人、琴塚蓮君ことづかれんの癖、“独り言”です。

……なんていつても分からないか。

「それより美人さん。僕は、一体何をさせられ……させてもらえるんでしょうか」

危ない危ない。僕から頼んだのに何を面倒になっているんだ。

……最近、言葉遣いも性格も、若干悪くなる時がある気がする……。

……うん、紅さんや黄朽葉さんの影響って事にしておこう。

「まだ日時は決まってるじゃないけれど、簡単な敵勢力の調査よ。そうねえ、初めてのお仕事だから……井文さんも後から向かうわね」

《仮想階段》のナンバー2が^で出撃する。

それだけでもかなりの事なのだと、間宮ちゃんから聞いた事があるが。

そんな事を何気なく決められるこの人は、一体どれだけの力を持った人間なのか。今の僕ごときでは、計り知れない。

……？

なんだ？ 今、僕は何に違和感を感じた？

「黒澄君？ 聞いてますか？」

唐突に何の脈絡もなく抱いた疑問は、かけられた声に霧散した。

「……え、あ、すいません、美人さん」

「お話はちゃんと聞いててくださいね？ じゃないと……」

うーん、と可愛らしく首を捻って悩んだ後、

「……食べちゃいますよ？」

食人行為！？

僕がなにかをしくじったらカーニバルですか！？

「……えーっと、もつとアレな意味だったんだけど……。ぐっ、まさか通じないなんて」

「いや何言ってるんですか」

何とか冷静さを取り戻した。

「“異世界”になら渡れる特異能力者がいるから、そこはご心配なく」

「えーと、分かりました。では、失礼します」

「ああ、それと」

「? なんでしょうか?」

何故か最近によく呼び止められるなあ。

「雪貴が貴方を探していたから、時間があるなら今から付き合っ
てあげてくれない?」

「間宮ちゃんが僕を? …… そうですね、探してみます」

そう言っ僕は部屋を出た。

そういえば、美人さんや紅さん、間宮ちゃんや井文さんなど、僕と割合親しい人達には、僕ら姉弟の事情が既に説明してある。

この時の話は今は忘れておこう。

言えるのは、皆に対する大きな借りが増えて、感謝が忘れられな
い程の大きさになったという事だけだ。

思考を元に戻す。

さて…… 間宮ちゃんが僕を探していた?

エレベーターに乗り込みつつ、「何か用事でもあったのかな?」

なんて考えながら、僕は間宮ちゃんの部屋がある階に到着した。

3 .

コンコン、と二回ほど手で叩く。

ドアの前に立った僕は、中に人が居るかを確かめた。

《間宮雪貴》。

それが、この部屋の主の名だった。

返事はない。

インターフォンもないので、ドアから出て来る事だけを気にすれ

ばいい。

「……居ないのかな？」

今度はチャイムを押そうと手を伸ばす。

だけれど、この前彼女から、「うるさい音は嫌いです……」「という話を聞いているので、やや躊躇う。

居ないかも知れないけど、居たら多分怒られそうだな……。

「……じゃあ、チャイムなんか付けなきゃ良いのに」

あ、いや、借りてる部屋だから勝手に外したらマズイだろう。

「……ボケたかな」

そう言いながら、もう一度ドアを叩き、今度はノブを回して音を立ててみる。

ガチャリ。

「……って、あれ？」

僕は留守だと思い、出直すことにしようと考えていたのだ。

だが、何気なく伸ばしたドアノブを掴む手は、そこに鍵がかかっている事を実感していた。

「……うーん。女の子の家のドアを勝手に開けるのは気が引けるけど」

一応、人並みの礼節と羞恥心と常識は持ち合わせているつもりだ。

まあ、羞恥心は最近になって獲得したモノだが。

……ああ、そういえば電話があるじゃないか。

「えーと、電話帳の」 この世界に来てから初めて持たされた携帯電話だが、今ではなんとか危なげなく使いこなせるようになっていた。

特に機械オンチとかそういう属性は僕にはなかったようだと分かり、安心したので覚えている。

……なんか、錐斗君きりとみたいな事を口走ってしまったな、僕。

まあとりあえず、ケータイの使い方は問題ないだろう。

あの間宮ちゃんのお墨付きだしね。

「」

部屋の中から着信音が聞こえてきたあたり、部屋の中に居たらしい。

寝ていたのだろうか？

トゥルルル、トゥルルル……と五回ほどコールが聞こえてきた後、電話は繋がる。

どうも着信メロディすら苦手らしかった。

「あ、もしもし、間宮ちゃん」

すると、いかにも今起きましたと言わんばかりの間延びした声で、電話口から返答があった。

『ふぁーい。せえんぱいですかー？』

……“せえんぱい”ってなんたる。

「うん、せえんぱいだよー」

適当に返しておく。

「それより、いま間宮ちゃんの部屋の前に居るんだけど」

と、言った瞬間

『な………な』

「な？」

『「な、ななななななんですとー！?!?!?!」』

「つ!?!?!」

電話口のみならず、直接部屋から聞こえてくる程に大きな叫びが、僕の脳をわしづかみにして揺さぶった。

『ちよ……ちよっと待っていて下さい！　すすすすぐ行きますからつ、そこを動かないで下さいねっ!?!?!』

「……きーん」

視界が揺らいでいる。

しかも耳が痛くて、耳鳴りがうるさい。

バキ、ガシャン!!!!!!

続け様に聞こえてきたのは、物が壊れたり、強打されたような激しい物音だった。

「間宮ちゃん!?!?!」

「驚いた僕は、間宮ちゃんの身を案じて決意を固める。
僅かに躊躇いはあるが……仕方ない。」

ノブを思い切り捻り、勢いよくドアを開け放つ。

緊急だ。何が起きたかは分からないが、彼女の無事が危ぶまれる
……！！

「無事でいてください……！！」

僕は一步踏み出した

と、

「……………へ？」

「……………せん、ばい？」

そこにいたのは、可愛らしいネコ柄パジャマを着た小柄な少女。

……………ただし、そのパジャマは乱れに乱れて、あらぬ姿を僕の目に
晒していた。

「き………きゃあっ！」

床に座り込んでいる彼女の胸元は、ボタンが中程まで外れていて、
そこから微かに覗くのは……あ、あの……そのっ……えと……何と
言つか、その……見た目相応の可愛らしい……し、白色が……！！
「……………ごめん、なさい」

「先輩……………」

ああ………本当にごめんなさい、間宮ちゃん。恥ずかしい思いをさ
せて申し訳なさすぎる。

僕は彼女に、一度くらい死んでお詫びしなきゃいけないと本気で
思う。

でも、こんなの、死んだ方がまだよう……………。

……………多分、僕の方も顔が真っ赤です……………。

「わ、わわわっ！？先輩、先輩ー！？」

自らを抱くようにして、ぺたり、と玄関先に座り込んだ間宮ちゃ
んが、急に壁に垂直な向きになった。

……………いや、ちがっ。

ドサリ、という音と共に僕が崩れ落ちたのだった。
許容量を超えた羞恥が、見られた彼女よりも先に僕の意識を奪っ
ていた。

「……情けないなあ、僕。……………無念」

「ちよつ、死なないでくださいっ、先輩!」

「今度の……眠りは……少し、永く……」

「せ、せんぱいっ!」

4 .

純白の中で、ゆっくりと漂う意識。 為式^{いしき}。 意色^{いしき}。

虚無的にたゆたう僕。

しかしけして虚無でなく。

半身を失う虚しさには耐えられない。

半身が持つ優しさには代えられない。

残ったのは……虚しさ。

空っぽの 空しさだ。

』

』

ああ、誰かが呼んでいる。

白い、世界。

何もない孤独……なんて哀しい世界だろう。

やれやれ、やっぱり。

本当に 《黒澄理緒》は、ロクな夢を見ない。

それだけは、未だに変わらず。

いや、これは本当に夢なのか。

“此処”はどこだ?

見覚えはある。

自己に埋没した時に訪れる、この世界は

「……………」
嗚呼、だとしたら…………なんて、寂しい

『……………！』

…………まったく、やれやれだ。

どうやら、僕を引き揚げようという物好きがいるらしい。

きつと それはとても素敵な事。

優しい色。

僕を温かく包んでくれている誰かに感謝しながら、意識が浮力に押し上げられるように上昇を始めた。

本当に不思議な事に、僕はその声を怖いとは思わなかった。

5 .

「先輩、せんぱいつ！」

意識が浮き上がるにつれて、徐々に周囲を認識していく。

この…………声は…………。

「間宮…………ちゃん…………？」

よくよく確かめてみると、僕はどこかの部屋にいた。

手の感触から想像するに、おそらくはベッドの上だ。

視界の端にあるネコのグッズの山を見て、僕がこうなった経緯を思い返せば、ここは間宮ちゃんの部屋かという結論に達した。

「良かったつ、せんぱいいい！」

…………その結論だけでも、十分に赤面モノのだけれど。

「む…………聞いてませんね」

それ以上に気になるのが……。

なんで……ひざ枕？

「……あ、先輩今度は真つ赤になっちゃいました……」

「……恥ずかしいので許してください……」

「……………」

「……………」

長い沈黙が君臨していた。

結局の所、十分後に目覚めた時には、僕が涙ながらに「ごめんなさいっ！」と口にすれば、彼女が「いえ、こちらこそ……」と返し、それにまた僕が謝る、という無限ループに陥っていた。

なんでもさっきのアレは、寝起きで色々とマズイ状態だった為に慌てまくり、着替えようとしたところで廊下に出た所で転んでしまったという訳らしかった。

とはいえ……とはいえだ。

男性にみっともない姿を見られたと思っている少女の気持ちなんて、軽々しく口にもできない。

例えどんな理由があろうが、僕は絶対に許してもらえないと感じていたし、許してもらおうとも考えていなくて、許される筈がないと思っていた。

いたのだが。

「……あの、間宮ちゃん？」

「はい？ なんですか、先輩」

なんですかじゃないです。

僕が目を覚ましてから実に十五分ほど経過しているが、未だに後頭部に暖かく柔らかい感触を感じている。

そろそろ、起き上がらせてはいただけないでしょうか？

それなのに彼女は、むーと可愛らしく少し眉をしかめたあと、

「先輩は……ご不満ですか？」

と、そんなことを言うのだから、逆にこちらが困ってしまう。

いえいえ、そんなことないんですよ。むしろ今まで人と余り親しくしていなかった分、暖かさというか温もりというかが恋しくてですね、ただど誰でも良いって訳じゃなくて、信用できる人とか、その……いやそういう意味はなくて……ええと……。

あれ？ 僕が言う台詞じゃないんじゃないかな、これ……。

「……むしろ間宮ちゃんが嫌じゃない？」

「いえ、それほどでもっ」 それほどでもないらしかった。即答だった。

いや、僕は嫌じゃないけどさ。

「ふふー、うふふー」

なんか、楽しそうにこっちの顔を見てるのは気にしない。

こんなに小さな（見た目が）女の子にひざ枕をしてもらって包容力を感じているのは、人として色々とアレだと思えてきたので、いい加減にしようと考えた。

「あの、そろそろ起き……」

「ダメですっ」

「あわっ」

こちらの額を人差し指で押し付けて、起き上がらせないようにしている。

くっ、よもや指一本で押さえ付けられるとは。

「わー。先輩、力強いですね。この世界に来た頃とは段違いですっ」
目を丸くして驚かれるが、起きようにも起きられない状態では厭いや味あじみみたいに聞こえる。

「そういう間宮ちゃんこそ……」

うっ、全然動けないよ……。

「いえ、私のはコツです。“重心”とか、“てこの原理”とかでし

て

「はあ……なるほど。」

「なんで起き上がるのが悪いのかは分からないが。」

「……それに、先輩ずっと無理してます……」

「まるで僕の思考を読んだかのような言葉に、僕はハッとさせられた。」

「僕が……無理してる……？」

「はい、してます。もはやしまくりです」
「しまくりなのですか。」

「気が付いたら知らない世界にいて、自分がよく知ってる人や物は、逆に誰一人自分を知らない……普通の人なら、気が変になっちゃってもおかしくない筈の状況なのに」

「それは言い過ぎじゃないか、と言いかけたが。」

「それは……僕が元々変なだけで、無理をしてる訳じゃ……」
「そう、僕は変だから。」

「それは負担にすら、感じていなかった。」

「……“世界恐怖症”の事を言っているのだとしたら、それは違います」

「何？ と問い掛けたくなるような言葉。」

「そも私の見立てでは、それはストレスに耐性がついただけ……いわば、器の許容量が増しただけのはずなんです」

「負の感情に慣れきったただけだと、そんな分かり切った事を口にした。」

「気付いていないからといって、知らないところでも蓄積しているのがストレスです。先輩は、目先の事を頑張りすぎなんですよ」

「正論。」

「感じなかった訳ではなく、気付いていなかっただけ。全くもって正論だ。」

「それよりも、私が言いたいのは最近の話です。先輩のお姉さんがいなくなっただけという後からは、自覚して無理してるようにしか見

えません！」

声を荒げてまで、僕みたいなのを心配してくれる間宮ちゃん。

「……あんまり、心配させないで下さい……」

……はあ。

「……参ったなあ、バレてたんですか」

「なっ　ワザとだったんですか!？」

……怒ってますね、これは。

「それは違うよ。気付かれないようにしてただけで」

まあ、とはいえ。

「間宮ちゃんには、バレバレだったみたいだけど。子供のワガママなんて……見せたくもないしね」

「先輩にも、プライドってあったんですか……？　そういうのは気にしない人だと思ってました……」

「ちよつと酷くないですか？　……まあ、多分そうだけど」

いや、間違いなくプライドは低い。というより、プライドの定義自体が、通常からズれているのかもしれない。

「じゃあそろそろ帰ります。ありがとう、間宮ちゃん。……ああ、それと」

これは皆に言ってることなんだけどね、と付け加えて。

「　　愛してるよ」

彼女が目を丸くしている隙に、素早く立ち上がり、部屋の出口を通り玄関前の廊下へ出る。

ドアは閉めずに、玄関に向かって歩き出す。

後ろから聞こえる足音を尻目に、靴を履き玄関のドアを開いた。たた、と小走りする音が後ろで止まり、ほんの微かに乱れた息を整えて話し掛けてきた。

「あの……先輩」

振り返らない。

恐らく顔は真っ赤だ。このまま振り返らないであげべきだろう。
「すいません、今日は……」

わざとらしく逸らしたような話題だが、気にしない。

「僕の方こそ、ごめんなさい」

だから、気にしないで下さい。

「……くす。先輩、年下にも敬語なんですね。もしかして、敬語そうちが素なんじゃないですか？」
やれやれ。

「敵いませんね。隠し事なんてできそうにないです」

その通りですよ。敬語を使うのは癖なんです。

「口調が安定しないなんて、物語だとしたら主人公失格ですよ、先輩」

「別にいいんです。そんな器じゃないですから」

拗ねないで下さい。

拗ねてません。

そんな会話を繰り返した。

…………… ホントに拗ねてないよ？

しばらくして、間宮ちゃんがポツリと呟いた。

「ご迷惑、おかけしました」

慎しん、と静まり返る玄関に、気まづげに響く。

でも、そんなのは

「気にしないで下さい。僕が来たくて勝手に来たんですから。」

いつかは、普通の話し方ができるようにがんばるぜ……なんちゃって。冗談ですけど」

それでは、と言って今度こそ外に出る僕。

「あ、ちよっ」

走り出すようにエレベーターに向かった。

だからだろう。

ドアが閉まる直前の、間宮ちゃん言葉が聞こえなかったのは。

「この、お人よし」

6 .

部屋に駆け戻るまでの間、誰かに出会いやしないかと気が気じゃなかった。

運よく誰にも出会わず（目撃されたかもしれない）部屋に辿り着いた僕は、ベッドに飛び乗り布団をかぶって悶えていた。

「うあー……」

顔が赤くて振り向けなかった？

「それは僕の方ですよっ！」

ああ……。

「恥ずかしいハズカシイはずかしいはーずーかーしいー！！」
なに寒いこと言っただ僕は！！

『嗚呼……恥ずかしくて死ぬ。……死にたくないよう』

《to be continued》

外話 『新たな日常 ある日の子守唄』 (後書き)

いまいち情景描写が足りない。ってか足りなさ過ぎる。まだまだ未熟です。

『N・N』登場人物（前書き）

一区切りはついたので登場人物だけまとめてみました。

第二部ではまた更に増える予定なのですが、矛盾点や記載ミスがあればどうかおしえて下さい。追加、修正、可能な限りさせていただきます。

『N・N』登場人物

『第一部主要人物』

黒澄理緒くろすみりお……『世界恐怖症』。本作の主人公で、黒髪黒目、ですます口調の丁寧語で喋る少年。

とかく年齢より下に見られがちで、男とも女ともつかない中性っ子。

感情表現が拙いという主人公らしからぬ性格で、現在は親しい人に『愛してる』と伝える活動を遂行中。

最近では、黒いロングコートに黒い装備品で黒ずくめになったのを気にしている。ささやかにツッコむ天然ボケキャラ。

黒澄璃尾くろすみりお……理緒に瓜二つな姉で、最近まで幽霊だと思われていたが、実は二重人格である事が判明。

にもかかわらず着替え、成長、理緒への干渉が可能という違法改造仕様スベック。

現在は理緒の内で昏睡中。訓練の時に発現した超身体能力と口調の真実は、恐らく彼女のみが知る。

ちなみに、やっぱり歳より下に見られる。

その勢いたるや弟以上で、姉ではなく妹にしか見えないほど。姿は理緒にしか見えないが。

“色”が重要なこの作品において、『髪と瞳の色が白い』という結構重大な伏線の描写を忘れる大失態。

ダメだコイツ、早く修正しないと。

作者は腹を切る思いです。

間宮雪貴……《国属先天性“可能性因子”干涉能力者鎮圧部署兼研究開発機関》こと《仮想階段》所属。

黒澄が《蒼の世界》で最初に出会った内の一人。黒澄に対しては多分好印象。とても良い子。

黒澄と同じ業を背負うロリっちい少女。

特異能力は不明だが、《原典オリジン》と呼ばれる希少な特異能力者であるらしい。“外話その一”でなぜか関係が接近。実はサブヒロイン的な立ち位置。

月下美人……『逆順一段目』、『最も先を行く者』、『超越者』等と呼ばれる《仮想階段》所長の女性。

若草色のロングヘアが特徴的なメガネ属性の人。
腹の中が黒そうなシヨタコン。

というかむしろ腹の中が読めない超人一号。

おとなしめな外見と言動だが、中身はまるで別物か。

特異能力者のトップに君臨する、全てを見通す超越者。

尚、近頃は黒澄を“男の娘”にしようと画策中。

自重しろ。むしろ自嘲しろ。

井文無比……『人の上に立つ二段目』。《仮想階段》の副所長。

尊敬する人物は『福沢諭吉』で、愛読書は『学問のすゝめ』。

特異能力《反意指揮ナイトヘッド》を扱う。詳しくは本編で。

戦闘班の総括役を担う老人。
間宮雪貴の上司で、かつては月下美人の保護者だった男。
三人並べば、お父さんと娘と孫娘に見える。
最近、黒澄という孫役が増えてご満悦の模様。
どこかの社長のように見える。

白墨庵しろくみいおん……『白き不明解』。

無所属の特異能力者だと思われる。

正体不明の怪しげな人物　にもかかわらず第二部にも登場予定。
月崎学園の三年生。

彼（仮称）の容姿は男とも女ともつかなく、後述の《琴塚蓮》に
秀囲気やらが似ている………後は言わなくても解ると思
います。

この世界での黒澄の友人第一号。
尚、《白墨庵》の名で呼ばれることを嫌っている模様。
これ以上の詳細は不明。

黄朽葉柘榴きくはなはな……『私立書庫』。

トラッシュバンカーの地下十三階で、己の贖罪の為に人に手を貸
す中立的傍観者。

この世界で知らない事はないと豪語する超人二号。饒舌。
とにかく性格が悪いが、それは“本質”によるものなので矯正は
不可らしい。

やっぱり腹は読めない。

ついでに空気も読めないが、本人は得意のマイペース話術で押し
切ってるつもり。

黒澄の友人二号でもある。
特異能力は不明。

無理矢理押しかけてきて弟子になった間宮雪貴を、生徒として教育中。

かつて、ありとあらゆる知識を用い、一つの未来を導き出した男。

あかねくれなひ 茜音紅…… 『ラインフレーム線炎』、 『戦闘技術教育担当官兼特別招致外部協力研究員』。

性格の荒々しい《仮想階段》所属の青年。服のセンスは黄朽葉に似ている。

良い人ではあるのだが、とにかく無茶をやり過ぎる人間。

黒澄の能力について何か情報を握っていそうだが……？

過去に色々あった“元”英雄。

後述の深留奏とは、本人達は否定しているものの仲は良い。素直になれよ。

あと、本当はフレームじゃなくてフレーム。作者は腹を（ry

せきちやくしずみ 石竹沈…… 『解析魔』、 『桃色の電波』。

不思議系の少女。しかし黒澄と同年。

何を考えているか分からないほどに無表情。……というよりかは

眠そうな目つきをしている。

髪は桃色だが、目も同じ色なので天然？ と思われる。詳しくは用語集を参照。

一つの事柄に対し、対象に触れただけで解析を行い、予測を組み立てる能力の持ち主。ただし名称、詳細は共に不明。

神秘的な雰囲気纏った人形のように美しい外見は、黒澄をもつ

てして『琴塚君より綺麗』といわしめた。
……それでいいのかお前達は。

みとめかなで
深留奏……『かつての仲間達』。

《仮想階段》所属の女性。第一部ではモブキャラその一を務めた。
茜音紅とは昔からの付き合いで、彼が《仮想階段》に呼ばれたのは彼女が月下美人に昔話をしたから。

実は、かつて茜音紅がとある世界を救った際の仲間の一人。つまり元勇者パーティ御一行。
いい歳してなにかとすぐ悪ノリする人。

紅とは、誰がどう見てもデキているというほどの仲。ただし本人達は否定している。

ツンデレが二人集まってもロクなことにならない良い例である。

ひしひさき
菱崎かなた……『隣人』。

黒澄の隣の部屋に住む住人。

最近成人式に出たばかりの女性。

《仮想階段》に所属する特異能力者だが、現時点ではモブキャラその一。

近頃の趣味は、食材から化学兵器を錬成すること。ほぼ無自覚に。

しほあきしりて
篠崎錐斗……『親友』。

黒澄の最も信頼する親友だが、諸事情により今回は不参加。

浅からぬ因縁の相手でもある。

幼い頃、最も信頼する兄が行方不明になっている。
以来、外面とは裏腹の、歪んだ内面を抱える事になった。
詳しくは伏せます。

熱血系。

琴塚蓮……『性別詐称疑惑』。

黒澄、篠崎と共に形成される三人組の一人。

無愛想かつ無表情だが、友人達の前では割と普通に振る舞う。

特筆すべきはその容姿で、顔立ちは女性らしい、それも麗人という表現が当て嵌まる少年である。

女性だと言われれば躊躇いなく納得し、男性だと言われれば逆に疑うレベル。

ちなみに、本人にはそれについてトラウマがあるらしい。

篠崎錐斗と同じように、今回は不参加。

やむにやまれぬやんごとなき事情によりアラスカへ発つたらしい。

厨二系。

友川智佳……黒澄の元の世界でのクラスメイト。

紆余曲折あつて、黒澄と親しくなつた苦労人。

明るい性格だと思われていたが、実は爆弾を抱え込んでいた。

詳細は本編で。

とりあえず以上。

用語集 (仮) (前書き)

全部完成するのはいつになるか分からないので、とりあえずこつこつ感じになりますよ、という意味で載せておきます。

こちらも徐々に加筆、修正していきます。

………今はまだ最低限も書かれていませんが。

用語集 (仮)

一応順番は五十音順。

「蒼の世界 (あおのせかい)」……別項「BLUE EARTH (ブルーアース)」を参照のこと。

「アラスカ(あらすか)」……米国最北端の州の事。日本の姉妹都市もある。中でもフェアバンクスは、最もオーロラがよく見えるとして日本人に有名。

「色 (いろ)」……作品世界での重要なファクターとなるのが“色”である。髪や瞳、名前等に付随する色は特異能力の強さや質などを端的に表している事が多い。

特に、特異能力者としての本質の名である“真名”に色が含まれる名は、強力な干渉力を持つ事が多い。

例) 《茜音紅》、《黄朽葉柘榴》など。

ただし、《井文無比》のような特異能力者もいるので例外はあると思われる。

大抵の場合は、自らの本質を“自覚”した際、身体が一度“最適化”され、髪や瞳の色などが変化する。

先天性能力の一種である《原典^{オリジン}》にもこれは当て嵌^はまる。

「可能性因子 (エーテル)」……世界に満ち、それ自身が世界を

構成する、あらゆる事象の原因になる万能エネルギー。

通常の人間には著しく感知しにくい。

特異能力者には微細な粒子状の光として観測されるが、あくまで人間が認識できる次元まで引き下げて処理されているだけである。

世界において、あらゆる存在と事象の出力には、絶えず可能性が消費されている。

逆に、可能性因子が極端に薄い、または全くない状態では、どのような現象も起こりようがない為に時間を含めた全てが停止する。これは消滅と同義である。

「原典（オリジン）」……特異能力の一種だと思われる。《間宮雪貴》がこれに該当するが、現時点では詳細不明。

「最適化（さいてきか）」……自らの“本質”を理解した際に行われる、“本質”に基づいた肉体と精神の再構築現象をこう呼ぶ。なぜこのような現象が起きるのか、未だ説明されていない部分も多い。

これによりようやく特異能力を扱う下地ができる。

再構築とはいっても、今までの人生によって少しずつ本質から逸れていた部分を矯正するようなもの。

その為、人によつては人格や肉体が大幅に変わる事も有り得る。

特異能力者の性格が、露骨であったり歪いびつであったりする場合が多いのはこの現象による。

「自覚（じかく）」……自らの本質を理解する事。

一定以上まで深く理解すると、特異性の観測により自らの肉体と精神の最適化が始まり、特異能力者として再構築される。

つまるところ、自覚という行為には度合いがあるのだ。

「月崎学園 (つきざきがくえん) …… 月崎都学術特区にある公立学園。

が、《蒼》の世界では特区の区別化に失敗、断念していて特区が存在しない為、同じ場所にある訳ではない。

「月崎高校 (つきざきこうこう) …… 月崎学園高等部の俗称。黒澄は最近まで、これが正式な学校名だと信じていた。

「月崎都 (つきざきと) …… 新歴に入ってから着工、驚異的な速さで創りあげられた四つの首都の一つ。『N・N・』の舞台となる。

第二章『捻くれた世界の肯定』（前書き）

お久しぶりです。工人です。

本当は就職難でこんなことしてる場合じゃないんですが、書いてしましました。

文章力が下がっている気がしますが、よろしく願います。

第二章 『捻くれた世界の肯定』

0 .

七大世界。

それぞれが法則を異とする《異界》の中でも、最も大きく、安定し、そして可能性に満ち溢れた七つの世界群の総称である。

哲思の翠、《ALL GREEN》。

第四種生物、あるいは《魔法植物》と呼ばれる生物が繁茂し、陸海の四割を占める世界。

《術式使い》達のギルドである《拝式教団》が拠点とし、第四種生物の働きによって大気中は高純度のエーテルで満たされている。それを理由に、亜人などの特異な生物が発生しやすい傾向がある。通称、『翠』の世界。

煉焰の紅、《SIGNAL RED》。

炎の海。

世界の三割を占める海には炎が走り、海面は絶えず燃え続けて天を焼く。

住まう人類は金属加工や工学技術に秀で、七大世界の中でも最高度の文明を維持する。

その技術を利用し、他の世界にとってのオーバーテクノロジーであるエーテル利用型戦闘用機械《武機》の製造、世界間貿易を行う《武装協会》が本拠を据える。

通称、『紅』の世界。

真威の紫、《VIOLET SKY》。

エーテルを応用した文明が極めて発達した世界。個体が持つ潜在

的資質が平均して優れている為か、科学技術が殆ど進歩していない。それでもなお、七つの世界で最大の戦力を保持する世界。かつて世界間の戦争を起こしたこともある。

古代的な文化と神秘。

それらはさながら、神話に語り継がれる古の世界である。

通称、『紫』の世界。

誰彼たそがれの橙、《ORANGE EYES》。

一日の大半を朝焼けと夕暮れが占める世界。

いたって平穩・平和で、最も安全な世界とも言われる。

ただし、世界の耐久値ともいうべき“世界強度”というものが非常に弱く、脆い為、渡界してくる外界人は少ない。

さながら、湖面に広がる薄氷のように。弱い故に強い、触れること適わぬ壊れ物である。

通称、『橙』の世界。

幻日の梔くちなし、《MOONLIGHT YELLOW》。

物言わぬ色、日の沈まない世界。

拜式教団と対を為す、《述式使い》達の機関、《保全機構》が拠点としていて有る。この世界の没さぬ日輪を、世界を照らす法の光の象徴としている。

文明は非常に現代的。

決して沈まない太陽は、異界としての独自の物理法則によって運運行されている。

通称『梔』、又は『黄』の世界。

星空の藍、《NAVY COBALT》。

日照時間が一日の四分の一もない、夜が支配する世界。この世界の生態系が特殊過ぎる為に、普通の人間が近寄れないエリアが地表の半分近くを占めている。残りの半分には人類が住み、眠らない摩

天楼の街で栄えている。

通称『藍』、又は『紺』の世界。

これらの異界は、更に独自の法則を元に動いている。

世界の名は、世界間の移動が可能となった際にそれぞれの世界の中で決められたものである。なお、これらの名称が『虹』の七色になぞらえられたものであることは言うまでもない。

以上が世界の雛型であり、数多ある世界は、その殆どがこれらの内に起源を有する。

だから僕が生まれ育ったあの世界は、この世界から枝分かれした一つなのだろう。

おそらく違いはただ一つ。

世界の基盤となる法則性を、ヒトが理解したか否かである　と　というのが、僕が間宮ちゃんから聞いた話。

彼女いわく、仮想階段としての常識らしい。

普通に生きていく限りであれば、この世界の住民ですらも知ることはないであろう、真実を。

僕は、当たり前のように聞かされる立場の人間になっていたのであつた。

あるいは。

そうなってしまうていたのだ。

1. 『限りなく、区切り無く』

「　で、これら六つの世界に我らが《仮想階段》の拠点とする『蒼』の世界を加えたものを《七大世界》と呼ぶわけなんですっ」

長々とした（失礼）覚えきれない（更に失礼）ような説明を終え

て、彼女 間宮雪貴まみや ゆきは話を閉じた。

五月八日の早朝。

僕は美人さんの命令によって、間宮ちゃんとの勉強会を開いていた。

まあ厳密に言えば僕が間宮ちゃんに教えて貰っているだけなので、勉強会というよりは家庭教師について貰っているような状況なのだけれど。

ちなみに場所は僕の部屋。間宮ちゃんは何故か制服姿。どうでもいいことなのだけれど、一応僕は部屋着を着ている。寒いので、上には黄緑色のセーターを着込んでいた。

そして

「あの……」「えっと……」

……。

「その……お先にどうぞ……」

「あ、いえ……そちらこそ……」

気まずい。

「あ……僕は……なんでもないです」

「えっと……私もなんでもないです……」

有り得ないぐらいに気まずい。

こんな事になってしまった理由は明白だった。

事が起きたのは昨日の午前中。僕が間宮ちゃんの部屋に訪ねて行った時の話だった。とかなんとか説明を入れてみたが、これ以上思い出すのも赤面モノなのでやめておこう。話が進まない……って、最近こんなのはっかりだなあ。

まあ何はともあれつまるところ、色々あったのだ色々。それが原因で間違いない。

説明を受けている最中にはごまかせていたが、終わってから僕らは若干の気恥ずかしさに襲われていた。

「先輩顔真つ赤ですよ……って」

貴女がそれを言いますか。

口にした後に自分も赤面してる間宮ちゃん。からかうつもりと言葉で自爆していた。

「やめてくださいよ……そんな誰の益にもならない自傷は……」
まったくもってやめてくれですよ。

「うー……。はい……。それじゃあ、本日はここまでという事で……」

さて。

さてさて。

これで今日の講義は終了。手が空いて暇になるのは僕一人。午後からはどうしたものか……。

「あ、すいませんっ」

考えている内に、間宮ちゃんは「ちょっと失礼しますっ」と言うのと、自分の携帯を持って部屋の外に出ていった。着信があったらしいが、間宮ちゃんはいついかなる時でも携帯の着信音を鳴らないようにしているらしく、僕にはまったく気付けなかった。本人はどうやって着信に気付いたのだろうか、さっぱり分からない。

それに、あまり思い出したくないのだけれど、昨日は昼過ぎ頃に紅さんが訪ねてきて、そこからとんでもない騒動が始まりを告げた。

詳しくはまたの機会にしておくが、とにかく段々と色んな人を巻き込んでいき、最後には井文さんや美人さんまで巻き込んでのトンでもない事になっていた。あの光景は、筆舌に尽くしがたい。ただ、発端が紅さんの「オマエらって小っせえな」という一言だったことを鑑みれば、その惨状は想像できると思。やっぱり無理かな。

ただ、そのせいで今日は《仮想階段》の居心地が今一つ悪い。

どうしたものかな……。

「そっだ、月崎行こう」

思い立ったが吉日。

「いや、少し違う」

今日する事を探してたんだっけ。この場合、『思いついた事はそ

の日の内にすべきだ』という言葉は、目的と手段が入れ代わっているような気がしてならない。

「あれ、それもなんか違うような……?」

結局、今の僕にはこの辺りが関の山だった。関山さんだ。少なくとも。

暇潰しに考える程度では、これ以上はとてどもとても。

「……それじゃあ、ちよつと街を見てくださいね」

ちよつと部屋に戻ってきた間宮ちゃんに告げると、当然のように予定調和のごとき答えが返ってきた。

「ああ、でしたら私も一緒にします」

……ただし予定調和というのは間宮ちゃんにとってのことであり、僕にとつては完全に予想外の答えでしかなかったのだけれど。

「え?」

「ですから、私も一緒に行きますよ。案内ならお任せ下さい」

「あの、間宮ちゃんは仕事があるんじゃない?」

「行きましよう先輩っ! いざ月崎へっ!」

……かくして、僕と間宮ちゃんは月崎の街へ繰り出すことにしたのであった。

2. 『檻の外と籠の内』

三十分後、僕らは各々私服に着替えて、一階のエレベーターホールに集まっていた。

「遅いですよ先輩っ!」

「僕の方が早かったよね……?」

間宮ちゃんは可愛らしい白のワンピース。同じく純白のリボンが、胸元から眩しく清純な印象を与えてくる。見た目はさながら、海辺の片田舎に住む夏の少女、といった所だろうか。まあ、あながち間

違いでもないと思います。

ちなみに僕はいつも通りの白いシャツに、この世界に来てからのお気に入りである黒いパーカーを羽織っている。他に特筆するような所なんてないし、そもそもファツションなんて真つ当なものには無頓着なのが僕という人間だった。僕が人間だというのは、ただれど。

「とうかここ数日間の出来事を通して思ったんですが……先輩って、本当に男の人だったんですね」

「……………えー」

急に話題を振ってきたと思ったら、いったい何を言っているんでしょうか、この人。

「入院中に所長が持つて来てたゴスロリとか、巫女とか、スク水とか……気持ちは分からないでもないですが……変態ですねっ（所長が）！」

「……………う」

真つ白に固まる僕。

「ええ！？　じよ、冗談ですっ！　だから、そのっ、しっ、死なないで下さい先輩っ！　き、傷は浅いぞーっ！！」

そんな人に聞かれたくない恥ずかしくて馬鹿な会話を軽く交わし合い（？）ながら、僕達はトラツシユバンカーを出た。

「僭越ながら、私が案内させていただきますっ」

間宮ちゃんは、いつかの話を覚えていたらしい。まずは買い物ができる場所を、ということ、様々な店舗が建ち並ぶ地区まで案内してもらったことになった。

歩き始めた僕ら。

そして見上げた春の空。

屋外に出たのは実に五日ぶりになる。この上なく不健康な生活だったのだが、僕は元々屋^{インドア}内派だから、特に苦となるようなことはなかったといえる。

だが　だから。

そういえば、向こうでも錐斗君や琴塚君に色々言われてたなあ。外に出ないから女みたいに肌の色が白いんだ、とか、たまに出歩いても日陰ばかり歩いてるからだろう、とか。そんなこと言わないで、って言ってもからかわれ続けていた。

怒ったり怒られたりもしたけど、親愛に同情を、哀れみに信頼を返すような、相当に歪んだ間柄でこそあった僕らだけれど。

「だけど だけれど。」

「今となつては。」

「否…だからこそ、僕は今」

「すぐく 会いたいなあ」

「……？ どうかしたんですか？」

と、横からかけられた疑問によって、僕の意識は呼び戻された。

「あ、あれ？ 声に……出た？」

「はいっ」

「え、あ………えうう」

思考停止、緊急停止。非常事態発生、異常事態発生。

顔が熱くなるのを感じる。赤くなっていると思われる。思考回路が発熱している。まさかこんなどうでもいい事を聞かれたくらいで赤面するなんて。自分が恥ずかしくることが恥ずかしい。

こちらに来てから妙に感情の振れ幅が大きくなってきているとは思っていたが、まさかこれほどまでとは思わなかった……。

「せ、先輩の頭が赤くなつて爆発したっ！？ か、可愛すぎるっ…

…！ この戦闘力……化け物かつ！？」

「あ、あの……なんかキャラ崩れてませんか……？」

ちよつと言つてる事が支離滅裂過ぎて、理解の範疇を横断していききました。彼方から彼方へ。

「ていうか、なんか怖い。」

「はっ………す、すいません、欲望に負けて取り乱しましたっ。」

思わずキャラ崩壊を起こしてしまうくらいに……まだ序盤だということに……」

「何がですか……」

言ってる事の半分も分からないけど、美人さんもこの子も意外とだいぶ壊れてるな……。

まあ、僕なんかより全然マシなのだろうけれど。

そう考えた途端、隣を歩いていたら間宮ちゃんが僕の前に出てきて立ち止まらせた。

「……？ あの、間宮ちゃ

言いかけになったのは、間宮ちゃんが急に近づいてきたから。

無言のまま、

影が重なった。

「
」
といつても、耳元で囁かれただけなのだけれど。

しかしそれは、壊れていると評したことへの怒りや不満ではなかった。

それが、僕には不思議でならなかった。

本来なら今頃、顔を更に赤らめて気絶しそうになっているはずなのに、言われた内容に意識を奪われて、不覚にも気を失い損ねてしまった僕。気を失い損ねた、なんて状況がこの世にあるとは思わなかった。少なくとも自分がそんな状況に陥るとは。

言葉が嬉しくなってしまうような内容だった所為^{せい}で、気絶もできずに更に顔を赤くするだけになってしまった。どうやら、恥ずかしさの種類が違う。

意識していない素の自分の姿を他人に見られるのと、臆面もなくそういう気恥ずかしいことを言われるのでは、違うにもほどがある。すぐに耳元から身体を離れた間宮ちゃんは、目的地であった商業区の入口へと駆けて行った。

「せんぱーいっ！ 早くしないと置いてっちゃいますよー！」

その言葉に、僕は同じ方向へ走り出すことにする。世界恐怖症が酷かった時には、逃走の為にしか出来なかった事だ。

間宮ちゃんの囁いた言葉が、ずっと頭の中で反響していた。

「大丈夫です。私はもう先輩のこと……嫌いになんか、なれないんですから」

ああ 確かに。

僕は確かに、直り始めていたのだ。

もしくは、壊れ始めていた。

2・『再度、再会』

その後も似たような取り留めもない会話をしながら、僕らは一通りの散策を終えていた。

途中、

「あ、これデートですよデートっ！ 私、あんまり自分に自信はないんですけど……すいません、恥ずかしくなかったですか……？」

「なんか、いまいちこういうことに疎くて……恥ずかしいことだと認識しないみたいです。……多分、ですけど」

「元も子もないことを言いますね……」

まあ色々あったのだが、ある程度の地形も把握できた。

今は住宅区と商業区を繋ぐ橋の上で休憩を兼ねて話している。その大きな橋ではないのだが、幅だけは割と広かった。

「楽しかったですねっ。また行きたいですっ」

「うん……大分はしゃぎ回っちゃったしね……」

ふう、と息を吐き出す僕。そういえば今日はあまり風が吹いてなかったなー、なんてことを考えながら、僕は川の流れを見つめて間宮ちゃんの話聞いていた。

「……先輩」

ふと視線を横に見やると、間宮ちゃんがこちらをじっと見ていた。すごく真面目な表情で、真摯な眼差しを、僕に。

「……間宮ちゃん？」

僕がその視線の意味を尋ねようと思ひ呼び掛けてみたが、それでも彼女はこちらを見るだけだ。何かを考えている風でもあるし、語る言葉を選んでいようでもあった。

そして僅かな逡巡の後。

「久しぶりでした」

と、間宮ちゃんは静かに語り出した。

「こうやって、友達同士で遊び回るようなことが、です」

ポツリ、ポツリ、と。

「私は、物心ついた頃には既に仮想階段にいました。その頃から近い歳の人間は少なかったんですが……」 僕がこんなこと聞いてしまつて良いのだろうか。

言葉を挟む余地のない、独白。

「知つてますか？ 二年前まで、仮想階段は特異能力の研究の為に、そこから拉致監禁してきた人への投薬実験、洗脳、拷問、身体の半機械化、同じ特異能力同士での戦闘実験までやる、相当に狂つた人体実験場だったんですよ？ 信じられます？ 爆発する首輪を着けさせてさあ死にたくなければ殺し合え だなんて、ずっと昔の映画みたいなことが大真面目に、あの塔の中で行われてたんですよ……？ 仮想階段の上位十三段の階級は、当時の名残なんです」

既に終わった話として、割り切りながら口にしてる。

それでも、切々と。

「……それが二年前、当時被験者の一人だった《月下美人》を筆頭に、彼女の親代わりだった《井文無比》、組織の中に外部から紛れ込んでいた《深留奏》、完全なる人類《兎角》と、彼女の相棒で外一位と呼ばれていた《虚言の葉》、研究者の一人だった《医師》、その他大勢……そして私、《間宮雪貴》。……私達はですね、クーデターを起こしたんですよ。当時の所長と、その一派を相手にして……そして、こちら側は一人の犠牲だけで勝つことができました」

独白。

「その後は、多くの人達が出て行きました。それはそうですよね、拉致されて監禁された人達は、もうこんな所に居たくないのは当然ですし、大切な人の元に帰りたいに決まっています。私だって、出来るのならそうしたかった……だけど」

独白、している。

「特異能力は、可能性を脳で演算する作業が必須です。例え何十とある内のほんの一工程でしかなくとも、あのマッドサイエンティスト共が興味を抱かないはずがなかった。希少なタイプの特異能力者である私も、当然のように頭を切り開かれました。その影響でしょうね。その時の私は、仮想階段に来る前の……一切の記憶を失っていました」

そんな、人前に出したいくない傷口を晒すような行為を見せられて「だから数年ぶりで懐かしいなー、って。長々と語ったくせに、結局はそれだけの話なんですけどっ」

彼女は、また別の意味で僕達の“仲間”なのだと、知ってしまった。

「あ、あの、あれ？ 先輩？ もしかして、涙……ですか？」

そして、泣いた。

僕が、泣いてしまった。

いつも周りにそうだった人間関係を築いてきた僕だから。その所為で彼女もそうだったんじゃないかという、思い上がり。

僕という人間に関わる登場人物だったから、壊れた過去を設定として背負う運命だったのではないかだなんて、彼女を侮辱するような、妄想を。

せずにいられなかった自分が、この上なく醜く、下衆げすで、無様な、どうしようもなく気持ちの悪いものにしか感じられなくて、恐怖した。

恐怖、するしかなかった。

だって今もまた、僕は自分の事しか考えていないじゃないか。

「先輩、先輩っ。聞こえてますっ？ 無表情で涙を流すなんて器用

なことやってないで、こつち向いてくださいよう。ほらほらー、くつついちゃいますよーくつついちゃいますよー、（無線機片手にこれは腕が当たってるんじゃない、腕に当たってるんだー!!」

本当、いつだってそうだ。僕は自分勝手に迷惑ばかり掛けて、そのくせ誰かが自分と同じ最低辺にすることにたまらなく安堵しているんじゃないか？ そんなことだから最低辺なのだというのに、それを甘受している自分がこの上なく不愉快だ。不可解だ。不誠実だ。どうしてこんなにも

「ガン無視っすか。なんですかこのヒドイ温度差。泣き顔も様になつてるからって……。やりますね……。先輩、おそろべしっ」

そもそも他人に同情を向けてる時点でろくでなしだというのに、それを自覚しながら止めないなんて夕チが悪いなんてどこの話じゃない。まさかこれで本当に人間のつもりか？ 正気の沙汰とは

「はっ……。まさか、同年代最低値をたたき出した私の発育ではダメなのかつ……。!? むむ……。こうなれば、伝家の宝刀『ゆつきーダイブ』なる寒い業を使うことも辞さない覚悟ですっ！ ゆつきー……。オポッサム！」

そもそもこうやって悩んでることがまったくの無意味なんじゃないのだろうか？ ……そうか、つまり僕がこうして発作的な恐怖症を再発させたのは……。ってうわあああああ！？

首に二本の腕が巻き付く感触、コンマ三秒。

そのまま重量が横向に掛かる感覚、コンマ二秒。

「あ、この鼻先の金髪は間宮ちゃんの仕業かー」という感心、コンマ七秒。

計、およそ一秒弱の喜劇。

僕は、急に抱き着いて来た間宮ちゃんに困惑しながら、足元のコンクリートに強かに背中を打ち付けた。

「オポッサムが何!? っていうかオポッサムって何!?」

「……むむむ、最初と技名が違う所にツッコまない辺り、本気で話

聞いてませんでしたね……」

「……もう何が何だか……分かんないよ……」
いや、ほんとに。

「マイナーになるとツツコミが出来なくなるようでは、まだまだ三流の域を出ませんねっ！」

「……………」
理解不能にも更にも上の段階があるようだと、僕は今日初めて知ることになった。

「えっと……どうかしたの？」

倒れた僕の上で馬乗りになっている間宮ちゃんは、ふう、と溜息をついて語り始める。

どうでもいいけれど、この体勢になると思わず両手で顔を庇いそうになってしまうのは、僕だけなのだろうか。……僕だけかもしれない。少なくとも、普通の高校生という範囲内においては。僕なんかを普通の高校生に含めてくれるのなら。

「あのですね、先輩。そうやって自己嫌悪ばかりしているのはどうかと思います。それも、自分だけの世界に埋没しているようでは“現実逃避”と変わりません」

現実逃避。

それは、世界から逃げ続けた僕が、最も最初に身につけたコトだった。

「……………」

頷くしかない。

事実だから。

自覚も、あつたから。

「それでも、先輩は変わったじやないですか。自覚しなければ、特た異能力者たしたちは変われないんですから」

ここまで僕の事を考えてくれる人なんて、それこそ“彼ら”くらいのものであったのだ。

「……………」

涙が、止まらない。

だけれど、今度は、顔が、みっともなく、歪んでいることに、気づいた。

こんなのって、どうしようもない。

どうしようも、ないじゃないか。

「……うん」

黒澄理緒は、声を出して泣けないのだと知った。「……うん」

僕は、変わっていく。

名残惜しいけれど、変わらなくちゃいけないから。

「……先輩。もっと街を歩きましょう。もっと世界を見ましょう。

もっと私や貴方、皆と生きていきましょう。それだけで、いいんです。諦めなければ、可能性の芽は潰えません。変わるうとする事自体が“変化”、なのでですから」

だというのなら。

そう言ってくれるのなら。

「うん」

少しずつでも、変わっていかこうと思えた。

まったく、数日前の自分とはまるっきり反対の考えだということだから、呆れてしまう。

朱に交われれば朱くなる。ならば、朱くなった後はどうなるんだろ
う。

「うん」

きっと、誰も知らない解答^{こたえ}。

「うん！」

大丈夫、僕には

「行きましょう、先輩っ。まずは、パーツと遊んじやいませうっ
！」

友達が、いるじゃないか。

知らない内に互いに甘えあっていた僕達は、それでもいいかと歩みを進める。

いつかまた、悩む時まで。

助けてもらったら、助け返そう。例えどちらかが嫌がっても。

今までそうやって、生きてきたように。

今までは違つ形で、もう一度。

僕らは、駆け出した。

《t o b e c o n t i n u e d》

二章 第一話 『白純色』（前書き）

隙を見て投稿。

割と真面目に書いてはいるつもりなので、参考になるような評価がもらえるとは作者は狂喜乱舞です。

至らない所は多いですが、何卒、よろしく願います。

二章 第一話 『白純色』

0 .

再び街に戻った僕と間宮ちゃんだったが、結局すぐに別れる事となった。

さながら、破局を迎えた恋人達のように、彼女は去っていった。

理由は簡単。

間宮ちゃんに緊急の出動命令。なんでも、近くで特異能力者による問題が起きたらしい。

間宮ちゃんいわく、「実力のある仮想階段の職員は、こういった鎮圧作戦の救援に借り出されたりもするんです。まあ、問題を起こすなんてこと自体がだいぶ珍しいんですけど」とのこと。

……恋人だなんだとかいうさっきの比喻は、別に“生殖のために横分裂したゾウリムシ”なんか置き換えても一向に構わなかったりする。

閑話休題。

間宮ちゃんには、どうやらまた美人さんから電話がかかってきていたらしく、「先輩、ごめんなさいです。また今度遊び来ましょうねーっ！」と本当に申し訳なさそうに手を合わせて謝りながら慌ただしく駆けて行った。走り去りながら叫んでいたのも、最後の方はかなり遠くから微かに聞こえてきただけである。

……となると、先程まで感じて止まなかった青春の情熱的な熱意は行き場を失い、虚しい寒風が胸に去来するのは自明の理であった。

「……寒いよ」

それはないですって……。

この場に及んで。

まあ、いいんだけど。

時間ならこれから作れば良い。

僕は、友達なんだから。

「うーん……だとすると、先にトラッシュバンカーに帰った方がいいのかな？」

友達と仲を深める活動を取りやめ、元来た道を帰る。

そのつもりだった。

少なくともそのつもりだったのだが、僕が『自分に意識を向けている誰か』の接近する気配に気づけなかったという驚きが、僕をその場に引き留めた。

「帰るつもりなら、それは少し気が早いな。友人と親交を温めるつもりだったのであれば、ボクにキミを誘わせてはくれないかな、リオ君」

鈴の音のような清すんだ声。聞き間違えるはずもない。

不意に、胸の鼓動が高鳴る。驚いた事による心拍数の増加だろうか？ それとも……。

「……どうも、こんな所でお会いするとは思いませんでしたよ、白しら墨すみ、庵いおりさん」

「ああ……嫌だな、まだその名前前で呼んでくれていたのかい？ そちらは偽名なんだ。本当は、《白純伊織しじゆいおり》と書く……まあ、読みは同じなのだけれどね」

なにかとんでもない事実を暴露しながら、あの日と変わらないハチング帽と白いロングコートを纏う彼 《白墨庵》改め《白純伊織》は、その雪のように白い顔でウインクをしていた。相変わらず、灰色のマフラーで顔の半分が隠されている。

跳ねつ返りのある黒髪は、風に揺られて揺れていた。

振り返った途端にこれだ。僕が数瞬の戸惑いを要したのも、当然のことと思える。いや思いたい。

「フフ……折角友人になつてもらったんだ。自分の名前くらいは明かしておきたいのが正直な話だね。いつまでも警戒したままだと誤解されるのも困る。なにより、それでは些ちかか心苦しいじゃあないか。

ところで……どうだろう、どこか別の場所で話さないかい？」

どういう状況なのかと悩んでいたが、どうやら白純さんは、僕が一人になったのを見かけて声を掛けてきてくれたという訳らしい。

あるいは、“見かけて”ではなく“見かねて”とも言えるのかもしれないが。

先日、間宮ちゃんに先んじて友達になった白純さんは、この世界で出来た初めての友人だ。個性的な口調で話す割に、理性というものが気配から感じて取れる。本当、こんな存在感の持ち主に、いたいな。僕が気づけなかつたんだろう？ 世界恐怖症が多少の回復をした所^{せい}為で、周囲への警戒力が弱くなったのかもしれないなあ……。

そんなことはさておき、これからどうするかだけれど……。

……まあ、行くしかないよね……友達だし。むしろ良い暇潰しになつてありがたいくらいだし。

「はい、僕なんかでよろしければ」

「フフ……君なんか、ではなくて、ボクは“君が”良いんだよ。では、行こうか。ついて来てくれ」

うん……本当、独特な人だなあ……。

僕みたいな人間を必要だと言ってくれるなんてのは、僕にとって不意打ちもいい所で、不覚にも少しときめいてしまう。今まで人に必要とされたことなんてない所^{せい}為で、少し褒^ほめられただけでも嬉しくてたまらないというのに。

尊敬と憧れは、募るものだったらしいと初めて知った。

それはまるで、恐怖みたいだ。

1・『不意打ち』

白純さんに着いていった先にあつたのは、僕の家が在つた跡地だ

った。

否。

この世界の上でいうのならば、ここはそんなどうしようもない場所ではない。

月崎公園。

この街が出来た時から在ったのだろうか。

ほんの僅か。ある程度に寂^{さび}れ、どこまでも人氣の無い隔離地帯。少しでもベンチに腰掛けて思考に意識を沈めたのなら、たちどころに時間の感覚を失って、街から人が一人も居なくなってしまうたような感覚に捕われていただろう。

あるいは、錯覚に。

「……いや」

どっちも同じか。

それほどまでにこの場合は、外界とは一線を画している。

こんなにも内面に引きずり込まれそうになるのは、僕があの家を思い出してしまう所為？

それとも、僕の中にいる姉が悲しんでいる所為？

分からない。分からないけど……。

いつか、戻ろう。

「本当に人が居ませんね……」

ざわつく木の葉の緑だけが、今の季節を正確に教えてくれる。もうすぐ、夏が来るのだろうか。

「ここならいいかな、リオ君。まずは、君の疑問に答えさせてもらうよ」

向かい合って立つ僕達。ベンチに座るつもりもないようだ。

とはいえ、別に剣呑な空気が流れている訳ではない。むしろ気軽で、ちよつとした立ち話といった雰囲気だ。おそらく、そこに理由はない。

「疑問、ですか？」

思い当たるような節は……ああ、アレかな？

「“私立書庫” いえ、黄朽葉柘榴きくくはじゅうさんのことでしょうか？」
それはどうやら当たりだったようで、話を繋げるような言葉が返ってくる。

「あの男を指す言葉というなら、“私立書庫”でも間違いではないのだけれどね。……性格、悪かったらどう？」

はい。

と言いたかったのだが、流石に紹介した本人に向かってそんなことを言う訳にもいかないかな、と思う。黄朽葉さんにお世話になっているのも事実だし、基本的には良い人だ。それなりの言葉にしておこう。

「いえ、色々とお世話になりましたし……楽しくお話をしましたし……」

「フフ、無理しなくてもいいよ。その様子だと、だいぶ苦勞したようだしね」

あう。

バレた。

バレバレだった。

この人すごい。

「あ、えーと、その……すみません」

「謝らなくても良い。キミはボクを氣遣ってくれたんだろう？ 確かに、黄口葉さんはあまり善い性格とはいいい難いからな。嫌がらせみたいな話の構成を、自然と作ってしまうらしい」

「……ん？ 意図せずとも自然となってしまうのなら、性格じゃなくって話を作る才能がないだけなんじゃないのだろうか……」。

「いや、意識と無意識に関わらず、自然とそうしてしまうというのは性格なんだよ。それに、生まれ持ったモノが人格の構成に大きく関係しているのも間違いない。だからそこを含めて性格というものを見ないとね」

「はあ……なるほど……」

分かるような分からないような。やっぱりこの人は独特だ。

「質問に答えるってことは、やっぱり黄朽葉さんのことは知ってた上での場所を教えてくれたんですね」

「困った人間には彼が必要になる。経験者からのアドバイスの類たぐいだと思ってくれ」

その黄朽葉さん自体が、違う意味で“困った人間”であるのはいうまでもない。

……やっぱり、最近の僕って口が悪いかな？

「それはさておくとしよう。本題だ。今日はキミに伝えたいことがあつて声をかけさせてもらった」

「伝えたいこと、ですか？」

よくよく考えてみれば、僕はこの人にはあまり会った事がない。

だから、どんなことを言い出すのか見当がつかないのだけれど……。

なんだろう？ 学校に通ってるって言ってたし、明後日に僕が月

校に転入することについてだろうか。その事については白純さんには

言っていないはずなんだけど……あれ、転入っていうんだっけ？

編入っていうんだっけ？ どっちなんだろう？

「敵が来る。君を狙つてこの世界に、敵が、来るんだ」

思考が凍結した。

「君という特異能力者の反応は、他の世界からですら感知できる恐ろしいまでのものだった。当然、《仮想階段》に敵対する組織は君を手に入れるか始末するかの一択を迫られるだろう。実際、《保全機構》は既に動いているし、それを皮切りに他の世界にある組織まで動き出している。中には、伝説級とすら呼べる人物が個人で表に出てきたなんて情報すらあるんだ。仮想階段の情報封鎖は少し甘い所があるからね。他の組織に情報を奪われたようだというのが、ボクが集団コミュニティで聞いた話なんだ」

油の切れた歯車のように、ぎりぎりと軋む音を発しながら。

僕は血まで、凍りついた。

敵。

敵敵敵。

敵敵敵敵敵。

敵敵敵敵敵敵敵。

敵敵敵敵敵敵敵敵敵。

敵敵敵敵敵敵敵敵敵敵敵。

違う、そんなにいない。

いや違う、何を考えている？

考えている？

いや考えてなどいない。

過剰反応。

アレルギーみたいに、僕はなぜかその一文字に過敏に反応していた。

敵。

心を目一杯落ち着かせようとしていたが、すぐには無理。無理だけれど、自分が荒い呼吸をしてうずくまっていたことは自覚できた。傍らに立つ白純さんが、僕を支えていてくれるのを感じた。この人は、優しいな……。

「大丈夫かい？ …… すまない、ボクが浅はかだった。こうなるかもしれないことくらい、予測できていてしかるべきだというのに……」

何を言っているのかよく分からないのだけど、予測という単語が聞き取れた。だけれど、本人ですらよく分かっていないことの予測なんてできるはずがない。

そもそも、こんなことには覚えがない。

「……？」

けれど、なんだろう どうしてか、この感覚には覚えがある気がする。

確か、この世界に来る前。僕はこれに近い感覚で倒れていた気がする。

いや、違う。それ以前。記憶が薄れるほどの。もつと今回のに近い感覚を、僕は頻繁に感じていたような……？　しかし、何に對して感じていたのかが、思い出せない……。

「……もう、大丈夫です。すいません、ご迷惑を……」

「いや、構わない。それより、あまり無理はしないでくれ。もしキミになにかあれば、ボクは……」

思考は平常に。回路は冷静に。僕はもう、いつも通りだ。

「本当に、大丈夫です。ありがとうございました」

「……そうか、そう言うのなら構わないよ」

大丈夫、二回目を聞く分には、もうさっきの感覚はない。

「……続けよう。おそらく、連中は君の元に人を送り込んでくる。

捕まえるために、なんだが、捕まってはいけない。そうすれば、君の願いは死ぬまで……いや、死んでも叶わないだろう。始末されるか、実験に使われるか。あるいは、こき使われて仮想階段と戦わせられるか、かな」

「そんな……」

「《拝式教団》という組織に逃げ込むという手もある。ボクの記憶が確かであれば、《仮想階段》が今の所長に代わった時に友好関係を結んでいる筈だからね。ただ……」

「僕が目的を果たすには不十分……ですね。それなら《仮想階段》の方が良い、ということ。理由としては……同盟の時間が浅い、戦力が《仮想階段》にまで及ばない、そもそも拠点がこの世界にない、内のどれか辺りでしょうか」

間宮先生の授業は活かされているようで何より。

「ご名答、すべて当たりだ。だから君は、目的を果たす為に《仮想階段》で迎え撃ちたまえ。それが正解だよ」

この人には本当にお世話になっている。

あるいは、これからもそうなるのだろうか。

「白純さんはどうして、僕を助けてくれるんですか？」

不思議がって聞く僕に、元から鋭い目を更に細めて、白純さんは

不敵に笑んで答えてみせた。

それは、僕なんかには到底真似できない微笑みで。綺麗　なん
て、感じてしまった。

人間として綺麗。

「フフ、ボクがキミを助けるのに理由が要るかい？　なんと
言おうとも、ボクとキミは友達だからね。　あるいは、『親友だから』
かな？」

口元をつり上げながら、悪戯めいた笑みをこちらに向けている。
どこか確信犯的な、何かしらの愉悦を湛えた視線が、僕を射かけ
ていた。

「あ……」

口に出さない口癖を真似されてしまったのだ。「あるいは」
っていうやつ。ほとんど心の中でのみ使っていた言葉なのに、
確実に使ったように見える。

……だというのに、なんだか嬉しいなあ……。

「ふふつ、えへへ……」

「ん？　どうかしたのかな、急に笑い出したりして。なに面白い
ことでもあったのかい？」

「あ……いい、いえつ。なんでも、ないです……」

危ない、我を失ってしまいそうだ。なんでこんなにも嬉しいのか。
今にも踊りだしそうとはこんな気分なのだろうか。

分からない。

分からないけど、嬉しい。

すごく、嬉しいのだから。

……笑いは、少し気持ち悪かったらどうか。今更ながら不安で
仕方ない。

なのに胸の奥は暖かく熱を持っている。

ああ、この気持ちはなんなんだろう。考えても分からない。考え
れば考えるほどに分からない。分からないから、考えるのもやめた。
だって、なんか怖いんだもん。仕方がないんじゃないだろうか。

「……ん？」

そうだ。そういえば、聞きたい事ならもう一つあったはずだ。トラツシユバンカーのエレベーターで、僕と白純さんが始めて出会った時に呟いていた言葉。

「何だっただんだろう……？」

確か、有意義がどうか、孤島がどうか。

……ゴメン、全然確かじゃなかった。あやふやです。

「あの………え？」

意を決して顔を上げた時、既にそこに彼はいなかった。

木々の葉をざわつかせる風が凪いだ頃。

辺りを見回していた僕は、ひどく唐突なそれが、挨拶を伴わない別れであることを悟った。

それは勘違いではないはずだった。

「……帰ろう」

迷うことなく、公園の出口を通り抜ける。

「さようなら、白純さん。また会う時まで」

トラツシユバンカーへの帰り道を歩きながら、僕は考えていた。いつたい、白純さんはどこの誰なのか。

年齢は？

なんでいつも同じ服装？

璃尾のことを知っていた？

特異能力者？

コミュニケーションって？

どうして僕の目的を知っていた？

白純さんが急に消えた理由は？

……さっきの質問には、なんだかんだでこの先も答えてはもらえないのではないかという気がする。

しかし僕の胸には、再会は近いという予感もあった。

確信めいた予感。

あるいは、確信が。

暮れかけた日を眺めながら、僕はしばらくの間、郷愁と未来への期待　希望が混ざりあったような気持ちを、一人感じているのだ。　　

2. 『At the end of the day.』

日も暮れた頃にビルまで帰ってくると、玄関ホールで帰宅してきた間宮ちゃんにばったりと会った。

「あ、先輩……もう、聞いてくださいよー……」

線になるまで細めた両目から、たばーっとかどばーみたいに滝のような涙を流していた。

あ、これ漫画とかで見たことある。

苦労人の泣き方だ。

多分。

いや絶対。

完成していたのか　　ツ！！

「疲れました……真つ白な灰に燃え尽きたぜ、とつつああん……」

「どんなキャラですか……」

とつつあんじゃないし。

突如として愚痴り始めた間宮後輩。言っちゃ悪いけど、いつも元気な彼女のぐてーっとした姿は結構新鮮だったり。

フラフラとこちらまで歩いて来たかと思うと、近くにあった待合用とおぼしきソファーに座り、テーブルの上にはぼてっ、と突っ伏す。

うー、と疲れ気味の唸り声をあげながら、間宮ちゃんは独り言のような調子で語りだした。

「この現代日本ですよ……？　西洋長剣を振り回す男性と、日本刀を腰に下げた女性が果たし合いなんかやってたんですから……」

「うわぁ……それは、なんとも……」

リアクションに困る話だった。時代錯誤甚だしい。

「というか話を聞いた限りでは、どこの誰とも知らないその二人とは、是非ともお知り合いにはなりたくないな」と思った。

切に、思った。

「啞然として三十秒くらいぼーっと見てたんですが、あんまり腹が立ったので弾丸の雨で一掃してきましたっ」

「いやいやいや」

「間宮ちゃんが？」

「いったい、どうやって？」

「ここではこれぐらいが普通なんだろうか……？」

「……もしかして、死んじゃったんですか……？」

「いや、確かにこの組織に身を置いている以上は、人を殺さなければならぬ時もあるのかもしれない。」

そして。

「こういうのは、いざ事に及ぼうとした時に感じるものだと思うのだけれど。」

しかしふと、空恐ろしくなった。

「研究の為という名目で。」

「自分の為という理由で。」

「僕は、いずれ人を殺す」

「いやですねえ、そうそう人死になんて起きませんよう。適当に追い払っただけですっ」

「あ、そうなんだ」

「さっきまでの思考は、取り敢えず置いておこう。」

「まさか全部受け止められるとは思いませんでしたよ………だいぶ本気でやったんで、全治二、三ヶ月はかたいと思ったんですけどっ」

「……わーい」

「やっぱりここは、まともじゃない。」

「……あー、でも」

「一番目には、僕なのだろうけれど。」

おっと、失礼。この子の前で、自虐はダメだ。厳禁だ。それを、忘れるな。

「あ、そういえば先輩。さっき斗貴^{トキ}弥さんが呼んでましたよ？」

いかにも何かを思い出したような顔をしながら、僕にそう言う間宮ちゃん。

でも僕は、そのトキヤさんとやらを知らない。

「えっと……ゴメン、誰なんでしょうか、その人」

すると間宮ちゃんは口元を押さえ、表情が『しまった』といったそんな顔に変わる。

「あーっと、えっと、茜音さんのことですよ。特異能力者になる前に使ってた名前。まあ、真名じゃなくて親から貰った生れつきの名前らしいんですけど、今はその名前で呼ばれるのが苦手らしくてここ一年ぐらいは名乗らなくなってるんですよ」

二年前に例の事件^{クーデター}とやらが起きたらしいから、その直後に《仮想階段》に呼ばれたと考えても、一年間近くはその《トキヤ》という名を名乗っていたのだろう。

その後何かが有ったのかまでを僕が知ろうとするのは、さすがに無神経というべきだから止めておこう。

それにしても紅さん、何かと過去が謎な人だな……。

「まあ聞かなかったことにして本題に戻りますけれど、紅さんが何て言ってたんですか？」

「ええと……、『あー黒澄、毎晩やってる訓練だがな、今日からしばらくアレはナシだ。この所、他の世界の組織が何かとキナ臭せえ動きをしてるみてえでな。井文のジイさんとは別動で仕事しなきゃなんなくなつた。所長の方からの連絡はしなくていいって言っていたから、俺の代わりに間宮に聞いておけよ。つーワケで、今夜からは自主トレに励むように。以上。返事はイエスかサーイエッサーだ。よし、頼んだぜ嬢ちゃん』……だそうですね。一字一句、間違はなく伝えさせていただきましたっ」

「うん、言いたい事はたくさん有るけど取り敢えず分かりました」

まず一つ。間宮ちゃんの記憶力良すぎ。ただ、最後のは絶対伝言じゃない。

でもまあ、これは分かる。

二つ目。イエスもサーイエッサーもたいして変わらないと思うんですが。意味というか何というか、それ以前の次元で既に。

しかしこれも、茜音さんだから、で片付けて良いだろう。多分。

更に三つ目。自分が伝えるって美人さんに言っておきながら、間宮ちゃんに伝言頼まないでください。

しかしこれも二つ目と同じ。仕方ないと諦めるしかない。

そして最後に。

個人的に頼んだ深夜の訓練は、人に言わないでって言ったのに……

…。

「うう……恥ずかしいよ……」

「あれ？先輩、泣いてます？」

「な、泣いてませんっ！」「あー、そ、そうですかっ！ すいませんでしたっ！では私、これから外で荷物の受け渡しの仕事があるのでっ！！」

うん、気を使われてる。

「……ありがとう、間宮ちゃん。じゃあ、先に部屋に帰ります。また今度、遊びに行こうね」

ニッコリと笑って手を振っている間宮ちゃんを背に、僕はエレベーターに向かった。

エレベーターが来るのを待っている間、一人思案に没頭する。

「“敵”が来る事はもう分かっているみたいでよかったけど……間宮ちゃんにはバレちゃったかな……」

必要最低限以上に自分を鍛えようと、紅さんで行っていた戦闘訓練。美人さんにすら黙っていたはずの事だ。

なのになんで、こんなにあからさまに伝言しちゃうんだろう。

「紅さんのばか……」

「あら、ごめんなさい。彼の責任は、雇い主の私の責任です」

「いえ、美人さんは別に悪くありませんよ。ただ僕が恥ずかしいってだけで……へう?」

目が回るほどの速さで後ろを振り向けば、そこに立っていたのは髪の色が鮮やかな眼鏡の麗人、月下美人所長だった。

「あ、あの、月下所長……?」

「ふふ、美人で結構ですよ。そのように改まらないでください。悲しいじゃないですか」

赤く澄んだ瞳でこちらを見て、薄く微笑んで見せる。

「あ、はい、美人さん」

いや違う違う、そうじゃない。

「あの、いったいいつからいらっしやっただんですか……?」

独り言を聞かれてたりはしないだろうか。

「ええと、『もう、聞いてくださいよ……』の辺りからでしょうか……」

あれ? 僕、そんなこと言いましたっけ?

「あ、それ間宮ちゃんの台詞ですよ!? 遠いです! 始めからっていうかゼロを通り越してマイナスですから!」

「あら、元気の良いツツコミですね」

大人の対応だった。

この場合は、あんまり嬉しくない。

「気配を消さないでください……」

僕でも気付けないなんて、この世界のの人達はすごい。流石はプロ、って感じ。前は、過敏過ぎて困っていたくらいなのに。

「うふふ、ごめんなさいね。貴方を探していたら、ホールでちょうど見かけまして。話が終わるまで待たせて貰っていました。ですが、少し離れていたにもかかわらず、始めの方が少し聞こえてしまったのです。本当に、ごめんなさいね」

流石にここまで言われると、自分が我が儘を言っている子供のような気分になる。

「いえ、もうお気になさらず……。詳しくは、聞かれてもいない訳

ですから」

ただしこの時、僕はまだ気づいていなかった。

この《超越者》の瞳が、赤色であるその訳を。

「それで美人さんは、僕に何の御用でしょうか」

これを聞かなければ意味がない。僕は今までのやり取りを押し返して、果敢にも自分から聞いてみる。いや、そんな大したことじゃないんだけど。

「明後日からの学校の話です。以前間宮ちゃんから、『特異能力者は情報技術を学ぶべき』って言われて、選択科目の授業に選ぶって決めてたわよね？」

そう、そうだった。

間宮ちゃんが進言したその理論。

特異能力を上手く扱うには、情報技術を学ぶべき。

その実験一号に、僕が選ばれたのだった。

理由は言うに及ばず。敢えて言うなら、丁度良いタイミングで転入生が見つかったからである。

つまり僕。

《仮想階段》の職員としては初めての被験者経験だが、特に危険があったり、非人道的だったりする訳でもない。

月崎学園高等部には都合良く選択授業があるので、指定された科目を選ぶだけで良いらしい。

被験者への報酬も意外と多かったので、今後の生活費を稼ぐ為に一も二もなく引き受けた。

おそらくは月下さんの気遣いだったのだろう。感謝しないと。

今は、間宮ちゃんとの勉強の際に基礎の基礎を学んでいる。「一応、貴方の部屋のパソコンとネットワーク環境の敷設しきせつ工事が終わりました。ほとんど無断でやってしまったから、謝らせていただきます」

しまった。

今日やりますって言ってたのに、僕が忘れてた。

「すみません、留守にしていた僕の手落ちです」

ちなみに部屋には、盗られて困る物なんか置いてなかったのもかけていなかった。それもこれも、トラッシュバンカービルのセキユリティが強固なお陰だけだ。

部屋にあるのは着替えの類のみ。というより、そもそも買いに行く余裕がなかったので私物がさつぱりない。

せいぜい冷蔵庫に豆腐が残っているくらいだ。

「あ、それは私がいただきました、工事の時に」

勝手に止めてくださいよ、紅さんじゃあるまいし……って、

「え、美人さんがですか!？」

「……? そうですけど……何か?」

「あ、いえ、なんでもありません……」

言えなかった。

そんなキャラでもないでしょうに。お願いですから、無茶しないでください……。

「それでは、雪貴と搬入した物資の確認をしますので失礼しますね」

「はい。月下所長も、お疲れ様です」

美人と呼んで下さいね。

はい、美人さん。

そんな定型句を並べながら、僕はエレベーターに乗り込み、美人さんは外に向かって行った。

扉が閉まり、告げた階層までの上昇を始める。

今日までに色々なことがあった。

「本当、色々あったな……」

あるいは、これからも。

むしろ、これからだ。

物語が、始まる。

その事実には、大局的な視点を持たない今の僕が気づくことにはついになかった。

ちなみに部屋に帰った僕が、数着の私服が消えていることに気がつくのはもう少しだけ先の話だった。

どうしてなのかと頭を捻る僕が、真実を知ることになるのはまだまだ、先の話。

《t o b e c o n t i n u e d》

二章 第一話 『白純色』（後書き）

敵の存在を告げたり、学校についての色々設定がでてくる回。
終わり方がおかしくなってますかね……。

第一話 『白純色』〈Figgment〉（前書き）

久しぶりのFiggment。

お正月の暇に投稿です。

視点不明な独白をどうぞ。

……それにしても、短い上に拙いなあ。

一人称の同じ作品ばかり書いていたので、いつの間にか書き方に癖がついていたかもしれません。

少し世界観を変えて別の作品を書いてみたいと思っています。

タイトルは『学園戦想』です。まあ、最後に（仮）が付きますが。

第一話 『白純色』《Figgment》

《Figgment》

「キミがボクではないのならば、僕は君ではないのだろう。
命題を明かすつもりならば、反定立を証明せよ。
もしも世界が二元（+・-）ならば、きっと心は三次元（3D）。

悲しいならば泣けばいい。だけど、泣いたからといって悲しいの
だとは限らない。

汝、忘れること勿れ。

されど人は罪重ねる者なり

0・『××××の思考錯誤』

“恐怖症”になっってしまうより前、僕は随分と捻くれた子供だっ
たと思う。

少しでも世の中を知ったようなフリをして、他人を見下せるよう
に試行錯誤して。その内僕は泣かなくなった。

本当に馬鹿馬鹿しいことだが、僕はそんなことをしている内に、
泣き方なんて忘れてしまっていたのだった。

そして数年が経った頃。

やがて僕は泣けなくなってしまうていた。

いくら泣きたくても、泣くに泣けないのだから。

そして僕はいつしか、泣くというコトすら忘れていった。

強くなった訳でもなければ、弱くなった訳でもなく。

大事な部品が飛び散り戦闘不能。

行方不明の僕の一部は、“帰らぬ僕”になってしまった。
まあ、そんなこと。

その時まで僕のやってきた事が、試行錯誤なんかじゃなくてただの錯誤だった、というだけの話。

あるいは恐怖症や無痛症は、その時の後遺症なのかもしれなかった。

僕の身体の成長が未だあの“時”のまま、流れに取り残されているのと同じように。

1・『夕闇の旅路』

ふと、風が風ぐ。

この世界の平均よりはやや長めであろう髪が、揺れるのを止めた。知らぬ間に、自らの口が言葉を紡いでいる。

「もう少し……あと、もう少しだ……」

時間を割いて、身を削り、骨を折って既に幾年。四季ひととせの巡りは、始めの一年で既に数えるのを止めた。

その甲斐あって、既に計画は軌道に乗っている。

振られた賽さいを止める者などなく。

動き出した時を止める術はない。

それに、“彼”。

人にして人でない彼。

「《二重魂魄》にして《二乗人格》。《完全存在》の《二極統合者》。有する全ては、精神ココロだけでなく魂と肉体さえも二つずつ。

足し算ではなく引き算でもなく割り算でもない掛け算で。乗法によつて成るべくして為る存在」

それが、自分の求めるモノ。

“彼”ならやってくれる筈だ。

きつと、この望みを叶えてくれる。

グチャグチャに混沌としたこの心を。

身が内側から焼け付きそうなほどの感情を。

どうにか、してほしい。

「でなければ」

だから、自分は。

誰にも気づかれない、人間の最も暗い部分から。精神の奥底から。

「今はまだ、貴方を見えていますよ、
×××××」

あるいは。

《Black out》

第一話 『白純色』〈Fragment〉（後書き）

ご覧下さり誠にありがとうございました。

今年も頑張りますので、もし読んで下さっている方がいらっしゃっ
るなら失望されないようにしたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136/>

『Not Nonfiction』

2011年1月5日15時55分発行